コードギアス　反逆？の首輪付き

Casea

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ＡＣｆＡ」の首輪付きを「コードギアス　反逆のルルーシュ」の世界に入り込ませた作品です。

主に首輪付き目線で原作に沿って進めていく予定ですが、ちょこちょこ違う展開を入れていきたいと思っております。初めての作品なのでお見苦しい点が多々あるとは思いますが、それでもよろしければご覧下さい。

ネタが少し多いので苦手な方、シリアスのみ求めている方には合わないかもしれません。ご了承ください。

目次

プロローグ ―― 1
設定など ―― 12
01話 迷子の首輪付き ―― 14
02話 異世界からこんにちは ―― 22
03話 獣は意外と繊細である ―― 34
04話 noblesse oblige ―― 44
05話 一発確殺 ―― 56
06話 ゲットー ―― 67
07話 獣を手懐けるには餌付けが一番 ―― 81
08話 黒の騎士団 ―― 91
09話 母 ―― 103
10話 泣き虫けもの ―― 114
息抜回その① セレンさん家 ―― 126
11話 ナリタ戦 ―前― ―― 130
12話 ナリタ戦 ―後― ―― 142
13話 傭兵として ―― 153
14話 片鱗 ―― 164
15話 翻弄 ―― 175
16話 嵐の前 ―― 187
17話 暴発 ―― 198
18話 crazy beast ―― 209
息抜き回その② あんなモノ ―― 219

プロローグ

――気付いた時には瓦礫の中にたたずんでいた。

ここはどこ？　何で瓦礫まみれなの？

自分に問いかけても当然わかるわけもなく慌てふためく。

落ち着け……とりあえず深呼吸して落ち着くんだ……。

ヒッヒッフー……ヒッヒッフー……。

何か違うー。まぁいいか。

それなりに落ち着いたので次はどうするかと考えていると銃声が聞こえた。すぐさま物陰に隠れて状況を確認する。音からして人間用のものではない。おそらくＡＣ。それ程近い距離ではなく、自分を狙って放たれたものでもないが安心はできない。

次に自分の装備を確認する。

パイロットスーツを着ておりヘルメットも傍にある。左腕には小型端末を装着し、武器の護身用拳銃もスーツの右太股の辺りに格納されているのを確認した。

幸いなことに大切な首輪もしっかりと身に付けていた。

パイロットスーツを着ているのなら愛機も傍にあるのではと考え辺りを見渡すも見当たらない。戦場に生身でいるのは不味い。非常に不味い。

焦っていると今頃になって長年連れ添った人物のことを思い出した。

どうして彼女のことを忘れていたのかはこの際どうでも良い。そんなことを本人に言ったら殴られそうだが。

彼女なら今の状況を打破することができるはずと期待して、ヘルメットの通信機能を使ってオペレーターであるセレン・ヘイズに話しかけてみた。

「セレンさん！　セレンさん!!」

しかし反応は返ってこない。

通信障害が起きているのだろうか？

その後何度か話しかけてみるも一向に返事はなかった。
結局自分で考えるのかー面倒だなー。
その間も銃声は止まず、悠長に考え事をしている暇はなさそうだった。せめて愛機の位置情報だけでも掴めないかと左腕の小型端末を操作する。だが機体の位置どころか現在自分が居る位置までわからなかった。正確に言うならエラーが出ていたのである。
見知らぬ戦場に機体もなくオペレーターとも連絡が取れない。いよいよ進退窮まったかと半ば諦めかけた時、昔彼女に言われた事を思い出した。
『あきらめたらそこで試合終了ですよ』
あ、違う。コレジャナイ。いや意外と合ってるけど。
『お前は物事を悲観的に考えすぎだ。もっと前向きに、気楽に生きてみろ』
そうそうこれこれ。もし忘れていたら一晩抱き枕の刑に遭うところだった。
おかげで前向きになることができた。
ネガティブ思考になっていた自分に活を入れ、使えそうな情報はないかと再び端末を操作すると見慣れない項目を発見した。
〈Ｈｙｂｒｉｄ　ＮＥＸＴ〉
はいぶりっどねくすと？　ナニソレ？　僕が落としたのはハイブリッドでも電気でもなく普通のネクストだよ？　女神様に正直に話したからハイブリッドだけくれたの？　普通の返してよ！
だから余計な事考えてる時間はないんだってば。
その項目を選ぶと今度は別の項目が出てきた。
［Ｃａｌｌ］
［Ｇａｒａｇｅ］
コール……？　これはあれか？　ネクスト呼べちゃうの？　いつの間にそんなにハイテクになったの？
疑問は尽きないが思考するのは後回しにし、すぐさま［Ｃａｌｌ］の項目を選んで呼び出してみることにした。

「……。」

こない……。あれか。期待させといと落とすパターンか。今の僕にはあまりにもあんまりな仕打ちである。

そんなことを考えていたら物凄い勢いで何かが降って来た。それもすぐ傍に。

「ふげぇ!?」

勢いで吹き飛ばされながら思わず情けない声が出てしまった。誰かに聞かれていたらお嫁にいけないくらい恥ずかしい思いをしたことだろう。

吹き飛ばされた際に打ち付けた尻を摩りながら起き上がるとそこには黒く太ましい機体が鎮座していた。変態企業ことトーラス社製のＡＲＧＹＲＯＳフレームで構成された愛機、ストレイドである。この機体はとにかく堅い。そして重い。

呼び出された機体を見て、本当に出てきたと感心しているとある違和感に襲われる。

……何か小さくない？　たしかネクストって１０メートルはあったはずなんだけど。何でその半分程度のサイズしかないの？　どんなに大きくみても６メートルもないんだけど。どこにハイブリッドの要素があるの？　サイズ以外見た目ほとんど変ってないし。変わった所を挙げるとしたら左膝に盾っぽいのが付いてるだけだよ。何の為に付いてるのこれ？

もし戦闘している機体がネクストであった場合どうすればいいのか。このサイズの機体で果たして勝てるのであろうか……あれ？小さい方が有利なのかな？　どうなんだ？　こんなことになるならもっとセレンさんとの勉強に真剣に取り組んでおけば良かった。

ともかく折角機体が来たので瓦礫を伝ってコクピットに入ることにした。コクピットハッチを開け中に入りシートに座る。通常のネクストより小さいだけあってコクピットは少し狭く感じたが、それ以外はあまり違いはなかった。首の後ろ、うなじの下部辺りに埋め込まれた機械にＡＭＳとリンクさせる為の装置を取り付け接続した。Ｐ

Ａは付近に人が居るといけないのでＯＦＦにしてシステムを立ち上げた。

『システム　キドウ』

あー良いよねーこの昔懐かしいＣＯＭボイス。僕は好きなんだけどセレンさんには不評みたいで変更しろってやたらとうるさく言っていた。

機体が完全に起動したのを確認すると次に武装を調べた。

Ｒ．Ａ．ＵＮＩＴ：ＧＡＮ０１―ＳＳ―ＷＢ
Ｌ．Ａ．ＵＮＩＴ：ＢＤ―０　ＭＵＲＡＫＵＭＯ
Ｒ．Ｈ．ＵＮＩＴ：――
Ｌ．Ｈ．ＵＮＩＴ：――
Ｒ．Ｂ．ＵＮＩＴ：――
Ｌ．Ｂ．ＵＮＩＴ：――
Ｓ．ＵＮＩＴ：ＭＥＳＴ―ＭＸ／ＣＲＯＷ

腕部武装しかないじゃないですかー！

右手のＧＡ社製バズーカはまだ良い。左手のＭＵＲＡＫＵＭＯって何？　見たことないんだけど。左腕の小型端末の［Ｇａｒａｇｅ］部分で調べてみるとどうもブレードらしい。しかも金属製の。せめてレーザーブレードつけといてよ。それから肩部。これも見たことがない装備だ。こちらも調べるとレーダーに映らなくなる、要はステルス用装備らしい。こちらはそれなりに使えそうだ。見た目は三角定規っぽいけどね。

とりあえず戦闘地域に向かってみよう。ステルスもあることだし、こっそり近づけば案外ばれないかもしれない。

と気楽に考えながら反応のある方へ向かっていった。

――機体が降って来た時点でばれないも何もないのだが。

瓦礫と化した街の中を一機のＡＣが高速で移動していた。否、ＡＣではない。サイズは４メートル前半。ＡＣではなく、ＭＴでもないこの機体は【ＫＭＦ】ナイトメアフレームと呼ばれていた。走行しているのは第五世代の紫色をしたＫＭＦ、〈サザーランド〉である。このサザーランドを操縦している学生服の少年、ルルーシュ・ランペルージは焦っていた。

――ここまで順調に進んでいたのに。

子供の頃に親友に誓った自分の願い。

『ブリタニアをぶっ壊す』

少年は力を手に入れた。他人を自分の意のままに操ることが出来る能力を。

それを使いブリタニアの女兵士からＫＭＦを奪い、テロリストグループに手を貸した。

――全てが上手くいっていたのに。

手元にある手駒を最大限に利用して敵のＫＭＦを破壊、奪取させた。

――それなのに。

敵を罠に嵌め全滅させた。

それにより確信した。俺ならばやれると。子供の頃に誓った願いを叶えることが出来ると。

――それなのに！

「なんなんだよお前は！」

突如現れた新型の白いＫＭＦたった一機によってテロリストのＫＭＦは全滅した。更には自分の潜伏位置までばれ、あと少しでやられるというところまで追い詰められた。女テロリストの手助けによりなんとか逃げ出すことは出来たが、その後すぐ破壊されたのだろう。白いＫＭＦは後ろからこちらを追跡してきている。敵のＫＭＦの方が圧倒的に速く、このままではいずれ追いつかれる。

（考えろ……どうすれば……）
テロリスト共の通信からサザーランドに装備されているアサルトライフルは効かないことはわかっていた。実際、撃っても機動力を活かし全て回避された。
（それならば！）
周囲にある倒壊しかけているビルを撃ち、瓦礫で少しでも長く足止めをして距離を稼ぐ。そしてその間にＫＭＦに搭載された脱出機能を用いて逃げる。これが最善であろう。後ろを向き銃口をビルの上部に向けようとした瞬間、白いＫＭＦはその場に急停止し右手のスラッシュハーケンをビルの上部に向かって撃ち出した。一体何を狙っているのか。上を見上げると、そこに何かが居た。
「何だ……あれは……？」
思わず停止してしまい、口から言葉が漏れた。
大柄の黒いＫＭＦが上から降って来た。自分のサザーランドと白いＫＭＦの間に降り立ったそれは見たこともないＫＭＦだった。
（あの新型が攻撃したことを考えるとブリタニアの所属ではなさそうだな……）
現に黒いＫＭＦはこちらに背を向け白いＫＭＦに向かって右手の武器を構えていた。だからと言ってこちらの味方とは限らない。下手に動けばこちらを狙われかねない。
ルルーシュは少し様子を見ることにした。

戦闘地域まで来てビルの上からこっそり覗いてみるとＡＣを見つけた。どうやらネクストではないみたいだけど……何か小さくない？　この機体と同じサイズか下手するとそれよりも小さいサイズなんだけど。ノーマルも確かネクストと同じくらいのサイズだったよね？　もしかしてこいつみたいなハイブリッドなのかな。

おまけにどいつも飛ばない。みんな足に付いたローラーで地面を走ってるところを見るとＭＴの可能性が高いな。
いやーそれにしても便利だねーこのスキャンモードっていうの。エネルギーの回復が倍近く速くなるし、戦場の状況が手に取るようにわかるよ。
おまけに
『システム　セントウ　モード』『システム　スキャン　モード』
切り替えるたんびに古臭いＣＯＭボイスで言ってくれるの。素敵！　でもセレンさんには（略

上から眺めていると一機の紫色をしたＭＴがこちらの方面に向かって来る。その後を追うように白いＭＴが近づいてくる。
おー白い方は中々かっこいいデザインだな。僕の趣味じゃないけど。あんまりにも細すぎるし。戦いは装甲だよ！
脳天気に眺めていると突然白い方が急停止してこちらに向かって何か飛ばして来た。やっべ、なんでばれたし。
慌てて飛び降りると紫のと白いのの間に降りてしまった。位置取り最悪じゃないですか。おまけに紫の方も止まってこっち見てるし。
Ｑ．紫は白に追いかけられていました。白は僕を攻撃しました。さて破壊すべきは紫と白どちらでしょうか。
Ａ．白！
おーけー白いの覚悟しろよ。
右手のバズーカを白い方に向ける。ＭＴ如きならこいつで一発さ！　ＨＡＨＡＨＡ！
引き金を引き、発射される寸前に白いＭＴは腕で自身を庇うように構えた。するとエネルギーシールドのような物が展開され、弾丸は相手に届くことはなかった。

――白いＫＭＦのパイロットである枢木（くるるぎ）スザクは焦っていた。

所属不明の黒い重量級ＫＭＦがこちらに向けて大型の武器で攻撃してきた。腕に搭載されたブレイズルミナスを起動、エネルギーシールドを発生させ弾丸を防いだ。しかし防いだ瞬間に大きな衝撃を受け、機体が後ろに押された。

（そんな馬鹿な！　サザーランドのアサルトライフルですら容易く受け切れたのに……）

幸いにも弾速は遅いため避けるのは簡単と考えて迎撃を開始した。脚部に装着されたランドスピナーを使い一気に距離を詰め、右手のスラッシュハーケンを敵に向かって撃ち出した。

黒いＫＭＦはそれを必要最低限の動きで避け左手に装備していたブレードを起動させワイヤーを切り裂いた。

「なっ!?」

スラッシュハーケンはＫＭＦに搭載されたワイヤー式アンカーで、攻撃だけでなく壁に撃ち込み巻き取ることで立体的な機動をすることも出来る。その性質上ワイヤーはＫＭＦを重量を支えることができるくらいには頑丈なはずだ。しかし敵はそれを切り裂いてしまった。

すぐさま左腕のハーケンを地面に撃ち込み、その反動で一気に飛び上がって左足で空中回転回し蹴りを仕掛けた。敵は右腕を上げ、シールドと思われる部分で防いだ。重量級なだけあってサザーランドを簡単に吹き飛ばせた蹴りでもびくともしない。

敵は空中で硬直したこちらに対して飛び膝蹴りを放った。だが速度が尋常ではなく、まるで爆発でも起こったかのような勢いで左膝が迫った。咄嗟に両腕のシールドを展開し直撃こそ免れたが、機体は大きく吹き飛ばされた。空中で体制を立て直すことで地面に叩きつけられるのだけは避けることが出来た。

（まさか……あの機体も第七世代なのか？）

スザクが操縦する白いＫＭＦ＜ランスロット＞は第七世代のＫＭＦである。サクラダイトと呼ばれる希少な鉱石をふんだんに使用することで驚異的な戦闘能力を有し、現在普及し始めている第五世代ＫＭＦのサザーランドを圧倒している。おそらく現存するＫＭＦでは最強と言っても良い筈であった。だが現実はあの黒いＫＭＦに圧倒されている。機体性能も。パイロットとしての腕も。

更にはこの隙を突いてテロリストの指揮官と思しきサザーランドは脱出機能ですでにこの場から離脱してしまっていた。

（どうする……？　このままでは……）

――負ける。

それどころか脱出機能のついていないこの機体では脱出もままならない。

敵の重量を考えれば逃げ切ることも可能かもしれない。しかしこのまま逃げてしまえば自分にこの機体を託した〈特別派遣響導技術部（とくべつはけんきょうどうぎじゅつぶ）〉の方々の顔に泥を塗ることになってしまう。

「きゃあぁぁぁ！」

そこへ突如女性の悲鳴が聞こえた。小さな赤子を抱えた母親と思しき女性がビルから落下していた。どうやら倒壊しかけたビルに隠れていたところ、壁が崩れて落ちたのだろう。

「くっ……！」

あの人達を助けなければ。だがそんなことをして隙を見せれば目の前のＫＭＦに……。

だが目の前に黒いＫＭＦは居らず、女性に向かって跳び、武器を左脇に抱え右手を伸ばしていた。無事に女性をキャッチした敵はそのままの勢いで壁を蹴り上がりビルの屋上へ逃げていった。

逃がすまいと後を追ったがどこにも敵の姿はなかった。ファクトスフィアを起動し敵の位置を確認したがレーダーに反応はなかった。

「逃げられた……いや、逃がしてくれたと言った方が良いのか……」

独り言を呟きつつ、まだ潜伏しているテロリストがいないか確認する為にランスロットを走らせた。

いやー危なかった。何とかこの親子をキャッチできました。
ステルス便利だね。あの白いＭＴから逃げるのも楽チンだった。三角定規だけど。それにしても何あのＭＴ！　すんげぇ俊敏に動いてましたけど！　やっぱりこっちみたいなハイブリッドなのかな。
まぁとりあえずこの親子を安全な所に連れて行こう。すっごい怯えた顔でこっち見てるから。

はい、というわけでやってきました。戦闘地域からそれなりに離れた所。とりあえず親子を頭部の横に置いて移動しております。
そろそろ親子を降ろしても大丈夫かなーっと。あれ？　装甲車が建物の入り口吹っ飛ばして兵士が入っていった。何してるのか気になるなー。とりあえずブレードで入り口大きくして中見ようか。
建物の入口をカッティング。
あ〝ぁ？　おいこら兵士なにガンつけてんだコラ。コジマ漬けにすんぞ。
兵士の他にも民間人っぽい人達もいるね。あらやだ、あの赤い髪の子かわいい。ちょっと涙目になってるけど。そうかこの兵士達が泣かせたのか。許さん。
とりあえずバズーカを装甲車に向けて脅してみた。
「武器を捨てろ、さもなくば攻撃する」
当然マシンボイスですよ？　中の人など居ない。
「貴様！　イレブンか!?」
何ですかイレブンって。
あぁあれか。アクアビットが出したサッカーゲーム「カミナリ親父イレブン」。あれの熱狂的ファンのことイレブンって言うんだっけ？
残念ながら僕はそんな熱狂的ファンじゃないよ？　確かに中々面白かったけど。

とりあえずもっかいだけ警告してあげよう。
「繰り返す。武器を捨てろ」
「やれるものならやってみろ！　そんな大口径の武器で攻撃すればこのイレブン共も一緒に吹き飛ぶぞ！」
うええ!?　ここに居る人みんなあのゲームの熱狂的ファン!?
さっきのあのかわいい子も!?
驚いたなぁ。確かにあのゲーム一部の女性にも人気だとは聞いてたけど……ここまでとは。でもいくらなんでも殲滅するのはどうかと思うよ僕は。
とか考えてたら地域全体に放送が入った。
『全軍に告ぐ！　ただちに停戦せよ！　エリア11総督クロヴィス・ラ・ブリタニアの名の下に命じる！　全軍！　ただちに停戦せよ！』
『負傷者は、ブリタニア人、イレブンに関係なく救助せよ！』
お？　停戦？　聞いてる感じだとイレブン狩りしてたっぽい？
そんな……いくらなんでもアクアビットに汚染されてるってだけで殲滅するなんて……。おのれ企業連！　今心の底からテルミンに首輪外してもらって良かったって思えたよ。
兵士も全員武器をおろしたみたいだし僕もおろそう。おっと危ない親子降ろしてあげなきゃ。
さーさっさとこの場からずらかろう。企業連に捕まると面倒だしね。

その日の夜、とある自室のベッドに少年が横になっていた。
「あのイレギュラー、黒いＫＭＦには感謝しないとなぁ……！」
そう呟くと嬉しそうにくつくつと笑った。
「見ていろ……シュナイゼル、コーネリア……次はお前達だ！」
少年の左目がぼんやりと赤く光った。

設定など

○機体設定

この作品ではギアス世界ということで出てくるＡＣは主人公である首輪付きの機体だけとなっております。他のリンクスがこちらの世界に！　ということはありませんので、そういう展開を期待していた方には謝罪させていただきます。ごめんねー。

まずは今作オリジナルの〈Ｈｙｂｒｉｄ　ＮＥＸＴ〉について書いていきます。

混ぜ合わせたのはＡＣ４系列のＮＥＸＴとＡＣＶ系列のＶＡＣです。

ギアス世界のＫＭＦのサイズが大体４メートル程、大きめの「ガウェイン」ですら６メートル半ばなのでこれに合わせる必要がありました。しかしネクスト機の大きさは１０メートル。この差はさすがにと思いましたが、ただ小さくするだけだとつまらないので、「じゃあＶＡＣとくっつけるか」と安易に考えてこうなりました。

Ｑ．「で？　そのハイブリッドはどうしたの？」

Ａ．め、女神様がくれたんです。うん。ネクストを湖に落とした際に正直に言ったからくれたんです。ハイブリッドだけ。あれー？ネクストは……？

Ｑ．「無双なの？　主人公機最強なの？」

Ａ．作中にプリン伯爵がいるよね（ニッコリ）

ギアス世界の技術者も馬鹿ではないです。一機のイレギュラーの影響で、少しづつ技術が向上していきます。……多分。

ただ、オリジナルＫＭＦ等は出しません。出せません。センスないし。

実際に出てきたＫＭＦの性能が通常より向上している程度です。

次に首輪付き自身の機体、ストレイドについて。

プロローグで出てきた機体はＡＲＧＹＲＯＳフレームの機体ですが、中身は不明。というのもまだ主人公が武装しか確認していないか

らです。その辺は作中にて。
ただ中身についてはそれ程はっきりとは考えていません。だって中身がどうあれギアス世界ではＡＣは脅威的性能だしね！　内装をカバーする腕もあると考えていただけると幸いです。
実際は私が機体アセン下手なだけです。粗製なので。すまぬ……。
まぁ少なくとも機体はしばらくトーラスフレームで進みます。
他のパーツ等については作中で換装した時にまた補足を加えていきます。
また、武装にＶ系の「ＢＤ―０　ＭＵＲＡＫＵＭＯ」や３系の「ＭＥＳＴ―ＭＸ／ＣＲＯＷ」が出てきました。
これからも分かる通り、４系以外のパーツも出します。というか多分大半はＶ系パーツになる可能性が高いです。ただし、私がプレイしたのはＡＣ３からなので、それ以前を期待されてしまうと厳しいです。ＡＣＰＰはやったけどね！

○主人公設定
主人公は首輪付きさんです。
身長は大体１８０センチ前後程、髪は白く髪型のせいでケモミミが生えているように見える。国籍は不明だが瞳は黒く、日本人のような顔立ちをしているので、ギアス世界ではイレブン、イレブンと蔑まれますが、本人はどこ吹く風。しょうがないよね。熱狂的ファンじゃないし。
ちなみにＡＣ世界でのルートですが、プロローグで「テルミンに首輪を外してもらった」とあることから少なくとも一つはありえませんね。どちらのルートに進んだかは多分気付く人はすぐ気付くと思います。そういう風に書いていく予定ですので。

０１話　迷子の首輪付き

皇暦２０１０年８月１０日。神聖ブリタニア帝国は日本に対し宣戦布告。日本は敗れ、占領された。
属領となった日本はその名を奪われ、新たに「エリア１１」という名を付けられた。
日本人は「イレブン」という蔑称で呼ばれ、その自由を奪われた。
日本侵攻から7年後。ちょうど首輪付きがこちらの世界に来た日。
エリア１１総督、クロヴィス・ラ・ブリタニアは何者かにより暗殺された。
その後、ゼロを名乗る仮面の男がクロヴィスの暗殺を自分の犯行と宣言し、ブリタニアに対して戦いを挑んだ。

～アッシュフォード学園大学部～

白いＫＭＦ、ランスロットを前に三人の男女が会話している。
「いや～これでようやく色々と詳しく聞けるねぇ～」
眼鏡をかけた技術者の男がモニターを見ながら嬉しそうに話している。
「初めて出撃した時には詳しくは聞けなかったからねぇ」
「ランスロットのことも、これのことも」
モニターに移っているのはランスロットを圧倒していた黒いＫＭＦ。
「あの後クロヴィス殿下殺害の容疑をかけられてしまいましたしね」
「すみません……。あの時詳しくお話できれば良かったのですが……」
「しょうがないわよ。あの時は怪我もあったんだし」
「そんなことより是非とも聞きたいねぇスザク君。この黒いＫＭＦのことについて」
「ロイドさん……！　そんなことって……」

「大丈夫ですよセシルさん。それよりもこのＫＭＦですが」
　モニターを見ながら思い出す。あの黒いＫＭＦ。
「自分はあの機体も第七世代ではないかと考えているのですが」
　自分が搭乗したランスロットと互角以上に渡り合ったあの機体。
「確かに、想像以上の性能でしたね」
「ブレイズルミナスなんか壊れる寸前だったからねぇ」
　膝蹴りを受け止めた時の衝撃で大分ダメージを受けていたらしい。
あれ以上攻撃を受けていたら……。
（考えたくないな）
　気を取り直して戦った時のことを再び考える。
「スラッシュハーケンのワイヤーを切断したことにも驚きました。自分も先日の純血派の方のＫＭＦと戦った際に切断こそしましたが、あれはＭＶＳあってのものですし」
　ＭＶＳ、メーサーバイブレーションソード。高周波振動により切れ味を高めた近接戦闘武器である。
「見たところただのブレードにしか見えないですね」
「確かに武装面も気になるけど、僕が気になるのはここだよ」
　ロイドと呼ばれた眼鏡の男が端末をいじると、黒いＫＭＦが親子を助けたところが映った。
「この映像……ですか？」
　セシルと呼ばれた女性が不思議そうに映像を眺める。
「スザク君。君はこの場面のどこが凄いかわかるかな？」
「……この跳躍力……ですか？」
「せいか～い！　よくわかってるねぇ～！」
　ロイドはとても嬉しそうに答えた。
「この機体を見る限り、スラッシュハーケンは装備していない。スラッシュハーケンを使わずにこれだけ跳んだんだ。こんな重量機が、ね。」
「そんなことが可能なのでしょうか？」
「目の前で見ていた君が一番良くわかってるんじゃない？」
「……。」

ランスロットですら高く跳ぶにはスラッシュハーケンを地に打ち込んで、その反動で跳躍する。なのに何故あの機体はあれだけ高く跳べた？
「もしかしたら〝跳んだ〟のではなく〝飛んだ〟のかもしれないけどねぇ。それを判別するには材料が足りない」
「こんなこと言うのはスザク君には気の毒かもしれないけど、是非ともう一度遭遇して欲しいところだねぇ～！」
技術者というのは皆こうなのだろうか？　とスザクは心の中で尊敬半分呆れ半分に思った。
「それにしても、ずっと黒いＫＭＦと呼ぶのは面倒ですね」
「じゃあ何か仮の呼び名でも付けようか」
「……ミスト」
「え？」
セシルさんが小さな声で呟いた。
「肩の所を見てください。先程ズームしてみたのですが……」
左肩に赤い首輪の周りを霧が立ち込めているようなエンブレムがしてある。
「なるほどねぇ。急に現れ、そして消えるように居なくなった。まるで霧のように。ミストというのは言い得て妙だねぇ。ミストにけって～い」
「ミスト……」
ミストという名の付いたＫＭＦのエンブレムを見る。首輪の周りの霧はまるで首輪を守るように、隠すように存在している。
「さて、ここら辺で休憩にしましょうか。ちょうど試しに作ってみたお菓子があるんです」
そうセシルが話してその場を離れると、ロイドが顔をしかめた。
「あー……スザク君？　君はセシル君の料理を食べるのは初めて？」
「はい……そうですが……？」
「僕はちょっとやることがあるからこれで……。……頑張ってね」
「はぁ……？」
ロイドはスザクの肩を軽く叩くと足早にその場を離れていった。

数分後、スザクはその場に残ったことを後悔した。

不味い。非常に不味い。食べ物の話じゃないよ？
初日の戦闘から何日経っただろうか。あの後から今まで大変だった。

最初にコジマ粒子の汚染濃度を調べたが、一切検知されなかったところを見るとクレイドルの中なのだろうか？　地上がコジマ粒子で酷い汚染状態な今、汚染がないのは高空プラットホームであるクレイドルくらいなものだ。だとするとこの廃れた街は何なのか？　そもそもクレイドル内で戦闘をしているということすら初耳であった。
実は別の世界とかだったりしてねーはっはっは。……んなあほなことあるわけないか。
機体は隠しました。呼んだのはいいけど、本当に呼んだだけ。戻せませんでした。帰れよー。
飛行したりして、下手に目立てば企業連に見付かりかねない。その為に機体を隠す場所を探した。瓦礫に半ば埋まりかけた、おあつらえ向きのビルがあったためそこに機体を隠し、機体の光学迷彩を起動させて置いておいた。この光学迷彩、普段から使えれば良いんだけどね。エネルギーの消費が激しすぎてシステム以外が完全に停止した状態でしか使えない。がっくし。

次に格好。パイロットスーツで歩いていては機体を隠した意味がない。故に代わりの服が必要だった。汚染もなさそうだしね。
でも代わりの服は見当たらないし、スーツの下はパンツ一丁でした。いやん。
おかしいな。普段は上半身にも何かしら見につけてたはずなんだけど。
仕方がないのでスーツのままで行動することにした。あ、ヘルメッ

トだけは機体にしまっときました。変わりにインカムをつけてます。
ちなみに僕はボクサーパンツ派です。フィット感がいいよね。
食料は問題ないかな？　腰に装備してあるポーチに数日分のレーションと救急キットが入っているし。まぁこれだけあれば大丈夫だろう。等とその時は思っていた。

そして何日かたった現在、僕はふらふらです。眠気と疲労で。見知らぬ土地なため落ち着いて休むことは出来なかった。ＡＣの中で休んではいたけれど、いつ何が起きるかわからなかったので気を張りっぱなしだった。いくら光学迷彩が機能していても、ＡＣとかに見られれば一発でばれるし。
セレンさんとも未だ連絡が取れていません。
この街には妨害電波でも流れているのか？　ってくらい通信が出来ない。少し遠くに見える栄えた街。あっちに行けば連絡手段があるかもしれない。だが僕はパイロットスーツ。こんな格好では人前に出れない。故に瓦礫の街で通信出来る場所を探していたのだが上手くいっていない。
そして今日僕は決意したわけです。あの栄えた街に行こうと。かなりきつい状態だけどね……。
こんなにきつい思いしたのはいつ振りだろう。セレンさんに拾われる前だから……１０年ちょっと前かなぁ……。いやでも、セレンさんの特訓の方がきつかった気がするなぁ……。懐かしいなぁ……。
はっ！　いかんいかん。今のはどう考えても走馬灯だ。さっさと行こう。

極力人目を避けながらふらふらと街を彷徨っていたが遂に限界が来た。足に力が入らずその場に倒れた。
あぁここは何処だろう……。彷徨ってたら何時の間にか変な所来ちゃったけど……。なんか広い場所だなぁ……でっかい建物だなぁ……。何かで見たことあるなぁ……あれだ、貴族のお家みたい……。

夕暮れの中、制服姿の少女が歩いている。
「まったくあの人は……」
赤い髪をした儚げな少女、カレン・シュタットフェルトである。だがその儚げな容姿に似合わず口から出た言葉は辛辣なものであった。
アッシュフォード学園生徒会会長であるミレイがまた思いつきで開催した企画。その後片付けの最中である。
「はぁ……ほんと、何で病弱キャラなんかにしちゃったかなぁ……」
溜息をつきながら後悔する。都合上、彼女は学校で病弱を装ってはいるが、本来の彼女は活発な性格であるが故にお淑やかに振舞うのは非常に疲れる。それは今現在も例外ではなく、知り合いから手を振られれば微笑みながら軽く手を振る。手に抱えた荷物もゆっくりと運ぶ。本当ならこんな荷物は軽く走って片付けてしまいたいのだが、彼女が作ったキャラがそれを許さない。
いっそのことカミングアウトでもしてしまおうかと冗談半分で考えていると目の前に人が倒れているのを発見した。急いで駆け寄って荷物を床に置きその人物を抱き起こすと、目を引くような白い髪をした少年であった。
だが彼女の目を奪ったのはその少年の顔立ちであった。
(もしかして……日本人!?)
自分と同じ日本人のような顔立ちの少年。
「ねぇ、大丈夫!?」
もし日本人であれば。自分と同じ日本人であるのなら助けないわけにはいかなかったカレンは必死に声をかけた。
すると少年は重々しく目を開いたが、その目には明らかに警戒の色が見られた。
……無理もない。はっきり言って日本人にとってブリタニア人は憎むべき敵である。日本人とブリタニア人のハーフであるカレンを敵だと思ってしまうのも頷ける。
少年は震える手でゆっくりと自らの右太股の辺りに手を持って行

く。カレンはその動きを見て彼が何をしようとしているのか理解し、その手を軽く抑え優しく話しかけた。
「大丈夫。私はあなたの敵じゃないわ」
少年の目をしっかりと見て。
「信じて」
彼女の気持ちが通じたのか、少年はゆっくりと目を閉じ気を失った。相当長い事気を張っていたのだろうか。
さて、この少年をどうすべきか。ブリタニア人に対して警戒している以上は自分の所で匿うのが一番かとも考えたが、生徒会の面子ならば受け入れてくれるだろうと心のどこかで考えた。
この少年のことについては色々と気に掛かる部分はあるが、それは追々聞いていけば良いだろう。

保健室に生徒会のメンバーが集まった。ベッドにはカレンが見つけた白髪の少年が寝息を立てている。
「先生が言うにはただの疲労と寝不足ですって」
「そうですか……良かった」
会長のミレイがそう言うとカレンも安心して答えた。
「イレブン……なのかな……」
眼鏡の少女、ニーナは少年に対して恐怖心を抱いている。
「確かにそれっぽい顔だよなぁ」
生徒会のメンバーであるリヴァルは興味津々に少年を眺め。
「でも何で学校の中で倒れてたんだろう？　スザク君はどう思う？」
シャーリーという名の少女は疑問をスザクにぶつけた。
スザクはアッシュフォード学園に入学し、生徒会に所属していた。
「そうだなぁ……一度話してみないことにはなんとも……」
学園にイレブンが全く居ないわけではないが、そこまで多くない。その上この目立つ容姿であるなら嫌でも目に付くはずだ。
そんな各々を余所に、ルルーシュは少年をじっと見つめていた。

（耳には小型のインカムを装備、着ているのは……パイロットスーツか？　だとするとこいつはＫＭＦの操縦者。だがこいつの顔立ちは……）

少年について思考する。

（名誉ブリタニア人にはＫＭＦの搭乗許可が出ない。だとするとテロリストか、日本解放戦線か、それとも中華連邦の人間か……？）

（まぁいずれにせよ……利用できそうなら駒に使う。邪魔になるようなら……）

――始末する。それだけだ。

０２話　異世界からこんにちは

アッシュフォード学園のクラブハウスにはルルーシュ・ランペルージと妹のナナリーが住んでいる。ルルーシュにとって、ナナリーと二人で過ごす時間はとても大切なものであった。

二人で夕食をとりながら今日の出来事について話している。

「その方は日本人なんでしょうか？」

「日本人のような顔立ちではあったけど……話を聞いてみるまでは何とも言えないな」

結局あの後は解散となった。先生によれば数日は起きない可能性があるそうなので、少年は保健室に寝かせておくということになったのだ。場合によっては病院へ搬送することも考えたが、特に怪我や病気の兆候もないというのでとりあえずは見送りとなった。

「仲良く……なれるでしょうか？」

「大丈夫だよ、スザクとだって仲良くなれたんだ。きっと友達になれるさ」

「はい……！」

ナナリーはとても嬉しそうに返事をした。

はっきり言って根拠はなかったが、ナナリーの悲しむ顔は見たくなかった。

もし仮に自分達に仇なすような存在であるならば……いくらでやりようはあるさ。

「お兄様？　どうかなさいましたか……？」

気付けばナナリーが心配そうに尋ねてきた。

「何でもないよ」

そう言ってナナリーの頭を優しく撫でた。

～迷子の首輪付きが拾われた翌日～

カレンは昨日自分が助けた白髪の少年のことについて考えていたら、何時の間にか放課後になっていたことに驚いた。
昨日あの後に生徒会メンバー全員に、彼が自分に対し警戒している雰囲気があったということを伝えた。それがブリタニア人に対しての警戒なのか、それとも人間自体に対してのものなのかはわからないが。どちらにしても注意するに越したことはない。だが少なくとも昨日の自分の言葉は彼に伝わったと信じたい。

生徒会に顔を出すと今日は昨日のメンバーに加え、ナナリーも来ていた。皆少年のことについて話していた。彼は何者か、何故学園内で倒れていたか、今後彼をどうするか、ｅｔｃ……。
カレンは少年の様子を見てくる旨を伝えて保健室へ向かっている最中である。
歩きながらまた少年について考える。彼の反応からしてブリタニア人にあまり良い印象を持っていない可能性もある。もしそうなら自分達の活動に手を貸してくれたりしないだろうか。彼が着ていたのはパイロットスーツのようなものであったし、抱きかかえた時にわかったが彼は見た目以上に筋肉がついていた。もしかしたら彼はＫＭＦの搭乗経験や、生身での実戦経験があるかもしれない。

気付くと保健室前まで来ていた。考えに耽りすぎたかなと思いつつ保健室の扉を開け中に入るとベッドはもぬけの殻であった。
「居ない!?」
カレンは焦ってベッドへ近寄ると何者かに後ろから口を塞がれた。だが焦らずに肘を後ろの人物の腹目掛けて一発、拘束が緩んだところへ振り向きざまに相手の太股へローキックを叩きつける。相手がバランスを崩したところでベッドに押し倒し、馬乗りになり相手の両腕を封じ抑え込んだ。案の定、相手は白髪の少年であった。目の前の少年は昨日と同じくその瞳は警戒の色を宿している。
「落ち着いて。私達に敵意はないわ」

諭すように。やさしく。すると少年の体から力が抜けた。
「わかりました……好きにしてください……」
この場面でその一言はやめて欲しい気もする。こんな所を誰かに見られたら誤解され……

「カレーン！　彼の容体はど……う？」
「どうしたのミレイちゃん……？　急に止まって……へ？」
扉を開け入ってきたミレイとニーナが中で見たものは、普段大人しいカレンが少年をベッドに押し倒し馬乗りになっている現場であった。
まるで時が止まったかのように静かな空間であったが、その静寂を破るようにニーナが顔を真っ赤にしてあたふたしだした。
「あ、あの！　えっと！　その！　……じゃ、邪魔してごめんなさい！」
ニーナはミレイの腕を掴むと急いで出て行ってしまった。
「誤解ですってぇ！」
カレンの叫びが保健室内に響き渡ったのであった。

生徒会室に少年を連れて行き、全員で話を聞くことにした。
「いやーごめんごめん！」
「ごめんなさい……」
「いえ……誤解が解けて何よりです……」
会長とニーナの謝罪を受け入れる。誤解が解けて本当に良かった……。
「それじゃあそろそろ彼に対する質問に移っても？」

ルルーシュにそう急かされ皆が気を引き締めた。ルルーシュの目の前に机を挟んで少年が座っている。少年の傍の椅子には彼を連れてきたカレンと念のためにスザクが立っている。
「それで……お前は何者だ？　どこから来た？　お前は……イレブンか？」
イレブンと言われた際に少年がピクリと反応を示した。何とも複雑そうな顔をしていた。
「いや……イレブンではありません」
彼が日本人であることを期待していた私は落胆した。顔に出すようなことはなかったが。
「ほう、そうか。ではお前は……」
「待ってください。こちらも一つ聞きたいことがあります」
「何だ？　言ってみろ」
少年はとても不思議そうな顔をして疑問を投げかけてきた。
「どうしてみんなイレブンだ何だ聞くんですか？」
「どうしてって……それはお前が……」
「いや確かに僕はあの作品好きですけど……そこまで熱狂的ファンでもないですよ？」
「は？」
全員の頭にクエスチョンマークが浮かぶのが見えた。勿論私もだ。……熱狂的ファンって何のこと？
「え？」
彼も何が何だかよく理解できていないご様子。ルルーシュも珍しく狼狽えている。
「待て……お前は一体何の話をしている……？」
「え？　だからイレブンの……」
「そうじゃない……お前の言うイレブンとは一体何だ」
「え？　そりゃぁイレブンって言ったら……」
「”カミナリ親父イレブン”の熱狂的ファンのことでしょう？」

ルルーシュが溜息をつき、イラついているのが目に見えて分かった。
「お前……ふざけているのか？」
「それはこちらの台詞です。今イレブンなんてものも持ち出すだなんて……馬鹿にしているのですか？」
少年も少し辛辣に言葉を返した。言葉こそ丁寧だが声からは明らかに怒りが滲み出ている。
「それとも……これが企業連なりの尋問方法ですか？」
聞きなれない単語が出て来たことで更に混乱することとなった。
「ちょっと待て……！　お前は何か勘違いしていないか？　俺達はその企業連とかいうものでもないし、尋問しているつもりもない。あくまでも質問だ」
「企業連じゃ……ない……？」
「そもそも何だ、その企業連というのは」
今度は彼の頭にクエスチョンマークが見える。
「企業連を知らないのですか……？」
「企業連というと……企業の連盟か何かか？　だとすると、余程マイナー企業の集まりなんだなそれは？」
少し馬鹿にしたような物言い。
「もしかして……今のクレイドルではそういった情報は全て秘匿されているのですか……？」
「クレイドル？　また聞いたことのない単語が出て来たな……」
彼から次々に知らない単語が出てくる。彼は彼でかなり混乱しているようだが。
「ここはクレイドルの中ではなかった……？」
彼はここがクレイドルという所の中だと思い込んでいたようだ。
「クレイドルというのが何かは知らんが、ここはエリア11、トウキョウ租界の一角にあるアッシュフォード学園の生徒会室だ」
「トウキョウ……東京!?」
彼は東京という言葉を聞いた途端、座っていた椅子が吹き飛ぶくらいの勢いで立ち上がり、左腕についている小さな端末みたいなものを

いじり始めた。ウェアラブル端末というやつだろうか？
「なっ!?」
驚いた表情のまま固まってしまった。何が表示されているかはわからない。
「馬鹿な……ありえない……」

話を聞いているとここはどうやら東京らしい。それを聞いた瞬間驚いて立ち上がった。その勢いで椅子が倒れてしまったが今はそんなものを気にしている場合じゃない。急いで端末を使ってコジマ粒子による汚染率を調べる。だが信じられないような結果が返ってきた。コジマ粒子は一切検知されていなかった。ありえない。地上では汚染が酷くて普通には生活できないはずだ。故に地上の建物は多少の汚染対策が施されており、屋外よりは汚染濃度はずっと低い。それでも完全には遮断できないはずだ。だがここはコジマ粒子が一切検知されない。
考えられる可能性は三つ。
一つ目、彼らが嘘を付いている可能性。　だが彼らが嘘を付いているような感じはしない。
二つ目、コジマ粒子を完全に遮断できる技術が開発されている可能性。　これもありえないだろう。そんなものがあるなら自分の耳に届いているはずだ。
そして三つ目……
「聞きたいことがあります」
「何だ？」
「アーマードコア、国家解体戦争、リンクス戦争、一つでもご存知の単語はありますか？」
目の前の少年だけでなく、部屋にいた他の人々にも目配せして返答を促す。だが返ってきた反応は皆同じく「知らない」であった。
「その言葉に偽りはありませんね？」

「あぁ、ない。嘘だと思うなら調べてみようか？　……ニーナ！」
　目の前の少年がコンピュータの傍に座っていた眼鏡の少女に調べてみるよう促した。
「えーっと……国家解体戦争……でしたっけ？」
「はい、お願いします」
「……うーんと……出ませんね……」
　頭から血の気が引くのが分かった。最も危惧していた事態になってしまった。あまりのショックに倒れた椅子を元に戻す気力もなくその場に座り込んだ。もはや口からは自嘲するような笑いしか出てこない。
「どうしたの……？」
　近くの椅子に座っていた赤い髪の、さっき僕をぼこぼこにした少女が心配そうに尋ねてくる。
「……先程僕がどこから来たか聞いてきましたよね？」
「どうやら僕は……」

――別の世界から来たみたいです。

　別の世界。この少年はそう言った。ルルーシュはさすがに失笑を禁じ得ない。
「おいおい？　何を言い出すかと思えば……」
　他の生徒会のメンバーもさすがにこれはジョークだと思ったのだろう。皆大なり小なり笑っている。
「さすがに別の世界ってのは想像してなかったなぁ」
　カレンもさすがにこれはないと思った。もしかしたら彼なら、そう思ったのだが。
（見込み違いだったかなぁ）
「それで？　異世界からの使者はどうやって自らの出身を証明してい

ただけるのかな？」
　ルルーシュはまるで舞台の上の役者のように仰々しい喋り方をした。
「証明になるかはわかりませんが……一つだけ見せられるものがあります」
「何だ？」
　少年はうなじの辺りを指で軽く小突いた。
「これぐらいしか見せられる証拠はありませんが、見るのは一人だけにしてください。あまり見せたくないので……」
「一人か……。カレン、確認してみてくれないか」
「私……？　ええ、良いわ」
　少年の傍に座っていたカレンが指定され、少年の後ろに回った。少年が首輪を外してうなじを隠している髪をかき上げると、そこには本来ある筈がない物体が存在していた。
「何……これ……？」
　そこには機械が埋め込まれていた。
「……カレン？」
「何々？　何があったんだ？」
　カレンの様子がおかしいことからシャーリーは心配そうに尋ね、リヴァルは興味津津と聞いてきた。
「機械よ……」
「機械？」
「何の為かはわからないけど……うなじの辺りに機械が埋め込まれているわ……」
　その一言で全員が凍り付いてしまった。今まで喋っていた内容から、彼は悪ふざけをしているイレブンという印象でしかなかった。
　だが彼のうなじには見たこともない機械。見ていると本能的な不安にかられるような、何か禍々しいモノのように感じられた。
　これは何？　何故こんなものをこんな所に入れる必要がある？
「もういいですか？」
　少年の一言で我に返った。

「え、ええ……ありがとう」
彼は再び首輪を付けた。髪と首輪、それから来ていたスーツで埋め込まれていた装置は完全に隠れてしまった。
「こんなものしか見せられそうな証拠はありませんが……信じていただけますか？」
ルルーシュは押し黙った。自分で直接見たわけではないが、レジスタンスとして行動しているカレンがあれだけ狼狽えたのだ。少なくとも見て楽しいようなものでないだろう。
「カレン、君の見解は？」
「私は……彼の言い分を信じるわ」
「俄かには信じ難いが……君がそういうなら信じるしかあるまい……」
ルルーシュはカレンの言葉を信じ受け入れた。その際シャーリーが少しムッとしてルルーシュを見ているが当然本人は気付かない。
「しかし……彼が異世界人だとするならどこに行けば良いんだろう？」
スザクが最も大事なことについて触れる。彼が異世界人だとするなら、この世界にはどこにも帰る場所が存在しない。だとするならどうするか？
「警察にでも引き渡せばどうにかしてくれるんじゃないか？」
「駄目よ……！　彼は唯でさえイレブンと間違えられるような容姿をしているのよ？　しかも首に得体の知れない機械まである。まともな扱いを受けるとは思えないわ……」
リヴァルの発言にカレンは反論する。
「ならどうする？　俺達で匿うか？　親に隠れて動物を飼う子供のように？　それも素性も何もかもわからない異世界……」
「会長チョップ！」
ルルーシュが言い切る前に会長のチョップが頭を襲った。
「もう！　折角途中まで良いアイデアを喋ってたのに！」
「まさか会長……」
「その通り！　うちの学園の生徒として迎え入れちゃえばいいじゃな

い！　ルルーシュ達みたいにクラブハウスに住み込んで通えば問題ないわ」
「会長！　ナイスアイデア！」
「こんなこともあろうかと事前にお爺様に許可をもらってあるわよ」
「はぁ……どうなっても知りませんよ……」
ルルーシュは深く溜息をついた。

何か知らぬ間にどんどん話が進んでおります。僕のことを警察に突き出したりする気がないみたいだから良いんだけど、話的に僕はこの学園に通うことになるのかな？
「あ、ごめんごめん。勝手に話を進めちゃったけどそんな感じ良いかしら？」
会長と呼ばれていた少女が話しかけてきた。
「はい、ありがとうございます」
「よし！　じゃあそういうことで！　えーっと……そういえば名前聞いてなかったわね」
すっかり忘れていた。
「そういえばそうですね。僕の名前は……」
言おうとした瞬間に頭に痛みが走った。名前を言おうとしただけなのに。忘れているわけではない。だが何故か自分の名前を名乗ってはいけないような気がした。何故だろう？　目の前の彼らが信用できないとかそういうわけではないのに。
「どうした……？　今度は記憶喪失か？」
僕がいつまでも名前を言わないのをおかしく思ったのか、僕の正面にいる少年が尋ねてきた。
「ごめんなさい……少し頭痛がしただけです……」
「僕の名前はユウ・ヘイズといいます」
その後は一人一人自己紹介していってくれた。

僕に尋問、もとい質問していたのがルルーシュさん、僕と同じく日系顔の少年がスザクさん、興味深そうに僕を見ていたのがリヴァルさん、会長と呼ばれていたのがミレイさん、

髪が長く明るい少女がシャーリーさん、おさげに眼鏡の少女がニーナさん、車椅子に乗った盲目の少女がルルーシュの妹のナナリーさん、僕をぼこぼこにした赤い髪の少女がカレンさん、ということでした。

自己紹介が終わったところで今後僕が住むことになるというクラブハウスへ向かい、みんなで掃除したり、必要なものを運び込んでくれたりした。ええ人達やわぁ……。

「彼の世話はみんなでするとして、世話係主任はカレンに任命します！」

「え？　私ですか？」

「彼を最初に拾ったのはあなたでしょ？　それに最近やっと学校に顔を出せるようになったみたいだし、リハビリも含めて……ね？」

カレンさんは少し考えているようだ。そりゃそうか。僕もいきなり異世界人の世話しろとか言われたら迷うだろうし。

「……わかりました。よろしくね？　ユウ」

そう言って彼女は手を差し出してきた。

「よろしくお願いします」

僕は彼女の手を握りって握手した。手は柔らかくてすべすべでした。神様……ありがとう。

詳しいことはまた明日話すということで今日はこれでお開きとなり、皆は部屋から出て行った。と思ったら、カレンさんが残っていた。

「えーっと……保健室のことなんだけど……」

保健室のこと……？　あぁ僕がぼこぼこにされた時のか。まだ体調が完全ではなかったことに加えて完全に油断していた為に彼女に負けてしまった。断じて僕が弱いわけではない。……本当だよ？

「あのこと……皆には言わないでもらえる……？　事情があって、私学校では体が弱いってことになってるから……」

なるほど、病弱キャラか。女の世界には色々あるんだろうな。う

ん。僕は誰にも喋らないことを誓った。
「ありがとう」
礼を言われるようなことではないような気もするけど、まぁいいか。素敵な笑顔も見れましたし。眼福眼福。
「それじゃあ、また……あっ！」
彼女は出て行こうと振り返った際に倒れそうになってしまった。瞬時に腕を掴んだは良いが、僕もそのまま倒れてしまった。僕の力が弱いわけじゃないよ？　今はただ貧弱になってるだけだよ？
なんとか僕が下敷きになったことで彼女が地面に激突するのは防げた。ナイス僕。背面は痛いけど、前面は天国です。やだ……この子意外とグラマラス……。
「いたたたた……。ごめんね……」
ん？　何か似たようなことが今日あったような……？　もしかするとこの後……。
「ごめんごめん、言い忘れてたんだけど今日の夜……」
そう言いながら扉からヒョッコリ顔を出したミレイさん。やっぱりにゃー。当然カレンさんはまだ僕の上にいるわけで。
「あ、あの!?　会長!?　誤解しないでください!?　これは躓いて！」
必死に言葉を紡ごうとするも上手くいっていないご様子。ミレイさんは意地悪そうににやけながら一言。
「ごゆっくり～」
そしてフェードアウトしていった。
「誤解ですってばぁぁぁぁぁぁ!!」
カレンさんの心からの叫びが響いた。多分学園全体に響いたんじゃない？　大きさ知らないけどね。
（楽しくやっていけると良いなぁ）
カレンの叫びを聞きつつのんきにそんなことを考える首輪付きであった。

０３話　獣は意外と繊細である

『霞スミカよ、引退するというのは真か？』
『あぁ、色々あってな。それより……その子だな？』
『そうだが……本気か？この子を引き取るというのは』
『冗談でこんなこと言うと思うか？』
『まさか。だが何故だ？光源氏計画でもするつもりか？』
『尻穴にレーザーぶち込まれたいか？』
『勘弁していただきたいものだな……別に私の養子としても良いのだぞ？』
『友人の忘れ形見だからな……』
『お前に友人がいたとは驚きだな』
『良い度胸だな。尻を出せ』
『よせ、この子が怯えているぞ』
『誰のせいだと……。はぁ……それにな』
『何だ？』
『お前の所に置いておいたら重量機好きの大艦巨砲主義になりかねん』
『最高ではないか』
『やかましい』
『まぁ無駄話はこれくらいにしておこう……そら、今日から彼女がお前を引き取る』
『初めまして……お前の名前は何と言う？』
『ユウ……』

とても懐かしい夢を見た。初めてセレンさんと会った日だ。あの日から僕は彼女と共に生活を始めた。早いものであれから十数年。今僕は彼女の居ない異世界にいる。どうやってこちらの世界に来た

のかわからない以上、帰ることも絶望的と考えていいだろう。彼女には二度と会えない。そう考えると自然と涙が溢れてきた。おかしいな、昨日も思いっきり枕を濡らした筈なんだけど。

首輪を付けながら考える。

はっきり言って僕は彼女に依存している。彼女は僕にとって大切な家族であり、心の支えだ。その支えがない今僕はこの世界で生きていけるのだろうか。不安に押し潰されそうになる。

『前向きに……』

――わかってるさ。

ノックする音で我に返り、慌てて目の涙を拭う。返事をするとカレンさんが入ってきた。

「おはよう、調子はどう？」

「まずまずです」

長いこと気を張りながら彷徨ってたからなぁ、中々疲れは抜けないみたい。

目が赤いことに気付いたのか、彼女は心配そうにこちらに尋ねてきた。

「……大丈夫？」

「昨日思いっきり泣いたから大丈夫」

我ながら女々しすぎる。あぁ、だからたまに口調とかがおかしくなるのか。納得。

「そう……。それじゃあ……行きましょうか」

二人で部屋を出る。

昨日のできごとー。

あの後ルルーシュさんが代わりの服を貸してくれました。少し大きめのを貸してくれたため、ピチピチにもならず着れました。感謝感謝。

そんでもって長いことシャワーすら浴びれなかったのでしっかり

汚れを落としました。綺麗好きなので辛かったな。折角日本だしそのうち温泉にも入りたい。ちなみに服はちゃんとシャワー後に着たよ。

晩御飯はミレイさんのお爺さんである学園理事長と一緒にお話ししながら食べました。食事はこちらの世界の方が美味しいかな？決してセレンさんの料理が不味かったわけではないとフォローを入れておく。

後は考え事をして枕を濡らしながら寝ました。

おわりー。

回想が済んだところで生徒会室に到着。そこには昨日のメンバー全員がいた。

あれ、確か今日休日って言ってなかった？　皆暇なの？　そう言ったらリヴァルさんから「お前の為だよ……」って突っ込まれました。失礼しました……。

今日も皆で僕の今後について話し合ってくれるそうです。特に戸籍。異世界からきました～とか他人に言っても信じてもらえないだろうしね。でも戸籍は何とかするとか言ってたけどどうするつもりなんだろ？

「そう言えばユウ、お前は全員にさん付けで呼んでいるが歳はいくつなんだ？」

「今年で１７歳です」

「あ、私達と同い年なんだー」

どうやら同い年だったみたいで呼び捨てで良いと言われました。ついでに敬語もいらないとも。聞けばミレイさんは一つ上、ナナリー（ちゃんはいらないらしい）は中等部らしい。

「そういえば疑問だったんだけど、結局イレブンって何だったの？」

昨日聞きそびれたことを聞いておく。

ここで初めてこの世界の成り立ちやこの国の現状について聞いた。

日本にブリタニアが攻めてきましたー。日本は負けましたー。ここはエリア１１となりまーす。

簡単に言うとこんな感じか。んでもってそこのエリア１１の人間だからイレブンと。ちなみに日本人にとってはイレブンは蔑称らしい。失礼しちゃうねまったく。
「で、結局ユウはイレブンってことになるのか？」
「多分ね」
「多分って……東京を知ってたってことはあなたの世界もこちらと同じような地理なんでしょ？　だったら日本もあるってことよね？」
「うん、日本はあるよ。でも僕が日本人かどうかは詳しくは知らないよ。孤児だったし」
その一言で皆やっちゃった感全開になってしまった。まぁ実際どうなんだろうね。日本で両親亡くしたのは間違いないけど……セレンさんにも詳しく聞いたことなかったし。
「気にしないでいいよ、僕も気にしてないし。でも日本人だと良いなぁ」
「あら、どうして？」
カレンは少し嬉しそうだ。何でそんな嬉しそうなの？
「恩師で尊敬してる人が日本人だからね」
「どんな人だったの？」
「温泉好きの社長」
「お前知り合いに社長なんかいたのか!?　でかい会社なのか!?」
リヴァル食い付き過ぎ。そんな驚くことかな？
「うん。有澤重工４３代目社長　有澤隆文さん」
「よんじゅう……」
「さんだいめ……」
確かに４３代目って凄いよね。自社製品を自分で試すってところも男らしい。
「まぁそんなわけで僕の戸籍は日本人が良いなぁって思って」
「だがはっきり言って、ここでは日本人は虐げられているぞ。それでも戸籍は日本人にするのか？」
ルルーシュの僕を見る表情にはまだ硬さが感じられる。まぁしょうがないか。

「ふーん。まぁいいんじゃないの？　どうでも」
「お前……真面目に考えているのか？」
「虐げられた程度で折れるほど柔な心はしてないよ。それに好きなら胸を張れって言われて育ったしね」
「覚悟の上か……」
「覚悟する必要もないよ。それとも、ここの人達は国籍で人を見下すような人ばかりなのかな？　皆も蔑称である〝イレブン〟を使っているようだし」
「いや……それは昔から言ってたから……癖っていうか……それに俺達はイレブンを蔑称として使ってないし……」
　皆困ってるね。言い過ぎたかな？　ニーナなんかは僕に対して畏怖の感情があるのは見て取れる。日本人が苦手なのかな？
「少なくとも、この学園はブリタニア人も日本人も区別してはいないわ。勿論……私達もね」
「もしそうなら嬉しいよ」
　その一言でニーナは複雑そうな顔をしていた。

　その後も色々と話を聞いた。僕の世界とこちらの世界の違い等を教えてもらったり、学園のことを教えてもらったり。午後からは街の案内と服等、必要なものを揃えようという話になった。こちらの世界のお金がないと伝えると学園側で出してくれるということだった。どんだけ太っ腹なの？　涙が出ちゃう。だがその前に昼食をとる為に食堂へ。
　でもその前にトイレ～。ルルーシュが案内してくれた。
「それにしても……イレブンねぇ……」
　心底げんなりしながらの一言。
「まだ何かあるのか？」
「いや……イレブンが日本人のことだというなら、あそこで行われてたのは日本人狩りだったのかと思うと複雑で……」
「何……？　どこの話だ？」
　ルルーシュがこの話に食い付いた。さっきまでと少し雰囲気が違

うような……まぁいいか。
「瓦礫の街だよ。あっちの方かな？」
「シンジュクゲットー……お前はその場に居たのか？」
「うん。イレブンか!?　とか言われて銃向けられちゃったよ」
　その時はＡＣに乗ってたけどね。さすがにＡＣのこととかは言えないけど。
「よく無事だったな……」
「すんでのところで放送が入って助かったよ。えーっと……クロビス？　とかいう人の放送」
「なるほどな……」
　ルルーシュは考え込んでいる。僕なんか不味いこと話したかな。
「ユウ……いいか、よく聞け……今の話は誰にもするな……」
「理由を聞いても大丈夫？」
「あぁ、そこでの出来事は公式では発表されていない。ということはもしそんなことを誰彼構わず話せば、お前の身に危険が及びかねない」
　成程、口封じか。どこの世界も裏はあるのね。恐ろしいこって。
「わかった、この話は心に閉まって鍵掛けとくよ」

　皆と合流して食堂で楽しい食事の時間。食事、風呂、睡眠……最高だよね。これだけで僕ストレスなく生きていける自信がある。
　さすがに休日だから人は少ないがクラブ等で人が少しいるみたいで、生徒会メンバーに紛れて見慣れない白髪の日本人がいるからか皆僕のことチラチラ見てる。そんなに見つめられると照れるなぁ。食事しながら気付いたけど、生徒会の皆も僕の顔をチラチラ見てる。いや、顔というか頭？
「どうしたの？　さっきから僕の頭見てるみたいだけど」
「あ、ごめん……ただどうしても気になって……」
　シャーリーが申し訳なさそうに言った。一体僕の身に何が……。
「その……髪型」
　髪型？　何か変？　もしかして寝癖？

「どういう風になっているのですか？」
目の見えないナナリーも話を聞いて気になったらしい。僕も気になる。
「何というか……動物の耳みたいだよね……」
日本人が苦手と思われるニーナも好奇心には勝てなかったのか、少し控えめに言った。
というか皆見てたのは僕の頭の耳だったのね。
「昨日はなかったよね」
「昨日までは何日もシャワーとか浴びれてなかったから萎れてたね。耳は昔からだよ」
「そういう風にセットしているの？」
「いや、乾くと勝手に耳っぽいのが出来る」
昔からこんな状態である。何で乾くと勝手に耳ができるのか？未だに疑問のままだ。
「白い髪や首輪も相まって、何というか……」
「獣みたい？」
「獣というかペット？」
「ミレイちゃん……それはさすがに……」
どこの世界でも僕の扱いは同じらしい。メイさんにも言われたな。
「うちで飼いたい！」って。ほいほいついて行きそうになった。綺麗なお姉さんに飼われたいと思うのは男なら普通だよね？　だよね？
そんなことをダンと話してたら二人揃ってセレンさんにしめられた。
「向こうでのあだ名も首輪付きとか首輪付き獣だったよ」
「あー」
皆うんうんと納得してた。何か釈然としない……。

食事後、みんなで栄えた街の中心部へ。大まかに言えばこの栄えた街を「租界」、僕が最初にいた瓦礫の街を「ゲットー」というらしい。租界にはブリタニア人が、ゲットーには日本人が住んでいるそうだ。ちなみに日本人でも役所に届け出を出せば名誉ブリタニア人とかい

うある程度自由や身分が保障された存在になれるらしい。スザクも名誉ブリタニア人だと言っていた。複雑な世界だなぁ。
色々見て回り、必要なものを買っていった。服や靴、授業に必要な文具なんかを購入した。
「そういえば、ずっとその首輪をしているのね」
「そういえばそうだね。大事なものなのかい？」
カレンが発言し、スザクが疑問をぶつけてきた。
「うん……とても大切なモノ……向こうで貰った数少ないプレゼントの一つ……」
しんみりしちゃうね。うへへ。
「大切なものなのね……」
「うん、ここも隠せるしね」
そういってＡＭＳとの接続装置を触る。見られるのは好きじゃないのだ。そう言ったらセレンさんがくれた。これだけが彼女との繋がりと言っても過言ではない。
「聞いて良いことなのかわからないけど……何の為にそんなものを……？」
やっぱそれを聞くよね。当然か、普通こんなもの埋め込んだりしないし。
「ごめん。それは言えない」
言うわけにはいかない。
「これがあんまり好きじゃないのもあるけど……何よりもまだ君達を信用は出来ても、信頼は出来ない。色々良くしてくれてるのにこんなこと言うのはひどいかもしれないけど……」
「裏を返せば、それを教えてくれた時が私達を信頼するに値するって思ってくれた証ってことになるのね！」
ファ!?　会長さん何言うてはるんですか!?　あれ？　でもそういうことになるの？　どうなの？
「話してくれる時を楽しみに待っていますね、ユウさん」
ナナリーもやめて！　純粋な心の目で僕を見ないで！
今後はしっかり考えて発言をしようと誓い、今日の買い物は幕を閉

じたのだった。

晩御飯はルルーシュとナナリーに誘われて二人と一緒にとることとなった。ルルーシュは甲斐甲斐しくナナリーの食事を手伝っている。

「どうした？　顔がにやけているぞ」

おっと見ていたらつい顔がにやけてしまっていたらしい。

「ごめん、昔を思い出して……」

「ユウさんにも妹さんがいたのですか？」

「いんや。どっちかっていうと僕が弟って感じだったかな」

『ほら、口の周りについているぞ』

小さい頃、そういって僕の口を拭いてくれたっけ……。またしんみりしてしまった。

「家族に会えないというのは……やっぱり淋しいですか……？」

「そうだね……昨夜どころか今朝まで少し泣いちゃったよ」

ナナリーが暗い顔をして俯いてしまった。自分がルルーシュと離れ離れになった想像でもしてしまったのだろうか。

「大丈夫だよ。君達兄妹なら離れていても、きっと心は繋がってるはずだよ」

僕と彼女は繋がっていないけど、きっとこの二人なら。

「ユウさん……。はい……！　ありがとうございます」

良かった笑顔になってくれて。かわいい子には笑顔が一番ってね。あ、これロイさんの台詞でした。あの時は最高にカッコよかったよね。リリウムに対してのセリフじゃなかったらだけど。王の爺さんの額に青筋が立ってましたよ。

「ユウ」

食事も終わり二人におやすみを告げて部屋を出るとルルーシュに呼び止められた。

「さっきはすまなかったな」

「こっちこそごめんね。なんか重い空気にしちゃって」
「お互い様さ。気にするな」
そこには最初の時程警戒は感じられなかった。少しは信用してくれたのかなと思うと妙に嬉しかった。ナナリーのことがあったからかな？
「それじゃあ……また明日」
「あぁ……また明日」

不安だった。この世界で上手くやっていけるか。でも少なくとも生徒会の皆とは上手くやっていけそうだ。
彼女の居ない世界。まだまだ色々と不安は残ってるけど、前向きに生きて行くことが出来そうな気がする。
寝巻に着替え、首輪を外しベッドの傍の机に置く。

今日はぐっすり眠れそうだ。
そんな気がした。

０４話　ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅ

グッドモーニング。初登校日和ですね。
朝起きたらまずは軽くストレッチ。そしてシャワーを浴びる。本当ならランニングもしたいのだが、まだ地理に疎いのでもう少し慣れてから始めよう。
制服に着替え首輪を付け朝食をとる。今日の朝御飯はメロンパンに牛乳。この組み合わせは最強だよね。
時間になったので部屋を出る。
さぁ今日から頑張ろう。

もう一日あった休みは端末を弄っていた。パイロットスーツの左腕についているやつだ。これは取り外して持ち歩くことも出来ます。携帯電話みたいにも使えるよ。ただ異世界の物であるため、位置情報等この世界の電波が拾えていなかった。なのでハッキングとかしてみました。もちろん痕跡を残すような馬鹿な真似はしてません。その辺はセレンさんとかメルツェルさんにきっちり叩き込まれたので万全である。そんなわけで今は地図も位置情報もしっかり確認できるよ。
夕方になるとルルーシュが尋ねてきた。僕の制服と身分証明書を持ってきてくれた。戸籍も出来上がったそうだ。身元引受人は理事長がしてくれるらしい。……あれ？　ちょっと待って。いくらなんでも早すぎない？　戸籍作ろうって話昨日出たばっかだよね？　確かに大体の内容は昨日で決まったけど。一体どうやったのだろう……。まぁ知らない方が幸せなこともあるよね、うん。そう自分を納得させておいた。

まだ学園内の地理を把握していないので迷った。ふらふらしてたら校門まで出てきてしまった。あれれ？　おかしいな。とか思ってたらスザクを発見した。ナイスタイミング。
「おはようスザク」

「あ、おはようユウ。こっちの生活には慣れた？」
「御陰様で大分慣れてきたよ」
「良かった。でも何か困ったことがあったら遠慮なく言ってくれていいよ。皆もきっと僕の時みたいに力になってくれるはずだし」
「スザクも編入学だったの？」
「うん。右も左もわからないような状態だったけど、色々と親切にしてもらったんだ」
　思ってたより優しい人が多いのかしら。そうだといいなぁ。
「そっか……うん。ありがとう」
　そんな話をしていると後ろから声がかかった。
「よう、二人共おはよう」
「おはようリヴァル」
　男三人になりました。女三人寄ればかしましいというけど、男三人集まると何になるんだろ。……暑苦しい？
「お前……今変なこと考えてない……？」
「何故ばれた」
「たった数日しか会ってないけど、お前が常に変なこと考えてるってのはわかったぜ……」
「あぁ確かに。何となくわかるよね」
「えー」
　そんなわかりやすいのだろうか。不味いな、このままでは知的でクールを売りに学園生活出来なくなってしまう。
　そんなくだらない思考をしていると校門に黒塗りの高そうな車が止まった。と同時に校舎から大量の男子生徒が出てきた。
「何あの軍団？　男祭り？」
「お前はまたそうやっておぞましい想像を……ほれ、あれ」
　車を見てるとカレンが出てきた。あぁそういうことか。
「カレンさん！　おはようございます！」
「今日も良い天気ですね！　お加減はよろしいのですか？」
「重いでしょう、僕が鞄をお持ちします！」
「いやいや、僕が！」

「何というか……すっごいね」
「名門シュタットフェルト家のご令嬢だからな。美人で頭もスタイルも良い。おまけに体が弱いときたら、大体の男はあぁなるだろうなぁ」
「へー、そういうリヴァルは？」
「お、俺は……」
「成程、他に意中の人がいると」
「ばっ……！　そんなんじゃ……なくはないけど……」
「まぁ確かに人気なのもわかるよね」
体は（弱った）僕が負けるほど強いけど。と思ってたらカレンがこちらへ向かってきた。
「みんな、おはよう」
三人共挨拶を返す。僕に馬乗りになった人と同一人物とは思えないほど優しい笑顔。あの後マウントポジションで徹底的に叩きのめされると思って少し怖かったです。
「ユウ、体調はどう？」
「もう大丈夫だよ」
「そう……良かった」
カレンと話していると物凄い視線を感じた。何と言えばいいんだろう、妬み？　殺意？　とにかく凄いの。
「じゃあそろそろ時間だし行こうか」
スザクナイス。さっさとこの場から去ろう。

職員室の場所がわからなかったので正直に話すとカレンが案内してくれた。その間もすげぇ視線を感じていました。
職員室で理事長と話し、担任になるという先生を紹介してもらい、現在教室に向かって移動中です。やだ……ドキドキして体が火照っちゃう。まぁ緊張とは無縁の人間なんですけどね。
教室に着くと廊下で待っているように言われた。うーん一人ぐらい知り合いが居てくれると良いんだけどなぁ。呼ばれたので入ると視線が一斉に向けられた。そんなに見られると僕蒸発しちゃうよ？

教壇に立ち周囲を見回すと見知った顔が大体いた。というか二年の生徒会メンバー全員いるね。理事長が気を利かせてくれたのかな？

生徒会メンバー以外の人は皆僕を見て驚いていたり、隣とひそひそ喋っている。そこかしこからイレブンという単語が聞こえた。まぁ想像はしていたので何とも思わないけど。

無難に自己紹介を終えると指定された席へ向かう。一番後ろの方、スザクの隣だった。知り合いが隣なのはありがたい。席に座るとスザクが小さな声で「よろしくね」と言ってくれた。

最初の授業を受けている間もチラチラこちらを見ている人がいた。目が合ったのでにっこり笑ったらすぐさま前を向いてしまった。なによー。

とりあえず最初の授業も終わった。ふぅ、セレンさんに勉強を教わったりしていたとはいえ、世界が違うと習うことも違うね。特に歴史とか最初から勉強しないとな。

さぁまだ色々聞きたいことあるし生徒会の皆と話そうかな。というところでよそのクラスの生徒が入ってきて、僕を見るなりにたにたと気味悪い笑みを浮かべていた。いつ来るかと思っていたけど情報の伝達は早いもんだね。

「君か？　編入してきたとかいうイレブンは」

見下したような態度、目付き、口調。どこにでもいるよね、こういう手合。

「うん、そうだよ。よろしくね」

まぁ最初から喧嘩腰だとイメージも悪いしね。丁寧に返す。

「君みたいなみすぼらしく汚らしいイレブンがいるとこっちも迷惑なんだよ。学校やここに通う生徒の品位も落とすことになるしねぇ」

「あ、そうなんだ。で？　それが何か問題？」

「なっ!?」

イレブンなら軽く脅せば下手に出ると思っていたのだろう。一切動揺せずに返すと向こうさんが怯んだ。当然ながらこんな状態だと

クラス中の視線を集めるわけでして、皆ハラハラしてるね。こういう状況は楽しまないと損だよ？
「イレブンっていうのは耳だけじゃなく頭まで悪いのかい？　僕の言っていることが理解できなかったかな？　良い病院を教えてあげようか？」
　おいおい、苛立っているのが目に見えて分かっちゃうよ？ほらほら、笑って。笑顔笑顔。
「僕の体を心配してくれるの？　ありがとね。でも君も病院行った方が良いんじゃない？　頭の方の」
「何だと……！」
　これでもかってくらいの笑みで言ってあげる。僕優しいからさー。あらら、顔真っ赤にして震えてる。風邪かな？　お大事に。
「だってこの学園ってブリタニア人も日本人も区別しない校風なんでしょ？　それ知ってて入ってきていざ日本人居たら出てけって……そりゃ頭の心配もしちゃうよ」
「貴様……言わせておけば……！　僕の家は名門貴族だぞ……！　唯で済むと思うなよ……！」
　出たよ。僕の一番嫌いな台詞。
「ノブレスオブリージュ」
「何……？」
　一人の誇り高い貴族を思い出す。
「”高い地位にある者は、高い徳を備え、重い責務を果たす必要がある”。まさか知らないわけじゃないよね？　名門なんでしょ？　まぁ君の家が名門かは知らないけど、少なくとも君自身は貴族とは思えないよね。とても貴族としての誇りを持ち合わせていなさそうだし」
　カラードを抜ける前に一度だけ会って話した。彼はとても優しく、気高い人間だった。
「生き易そうだね、羨ましいよ」
「なっ……!?　このっ……！」
「僕は会ったことあるよ、本当の貴族に。彼は民を守る為に命をかけて戦っていた。でも君はどうだい？　家の名前を持ち出し、汚すだ

け。自分じゃ何も出来ない」
彼とは敵対することになったけど、僕は彼も彼の生き方も尊敬している。
そんな彼とこんなクズが同じ貴族だというだけで反吐が出る。名門？　勘違いも甚だしい。
「君自身じゃ僕には何一つ勝てないよ？　人を見下し馬鹿にすることしかしてこなかった人間には」
――絶対勝てないよ

……あら？　ちょっと言い過ぎたかな？　涙目になって今にも殴りかかってきそう。まぁまぁ落ち着なさいな。ってところで鐘がなり、先生が入ってきた。助かった。ほら、君も涙目になってないで帰った帰った。
前を向いたら皆がなんか凄い目で僕を見ていた。……やり過ぎた……。だってああいう奴嫌いなんだもんしょうがないじゃん！

お昼はクラスの生徒会メンバーと食堂でとることになった。カレンが僕を誘った時は周りの反応が面白かったな。男子は皆凄い目で僕を見るし、女子は心配そうにカレンを見るし。
「いやーそれにしても朝のお前凄かったな……」
「何て言うか……ユウって……」
「もっと口下手で頭悪そうって思ってた？」
「いや、そこまでは……」
「ごめん……僕もつい楽しくて……」
「楽しんでたのかよ……」
「僕はあーいう奴が嫌いなんだ。権力を傘に着て上から物言う奴」
「それには同感だが……少しやりすぎたな」
「目をつけられたかな？」
「かもな」
「へーきへーき。彼小心者っぽいし何にも出来ないよ」

例え何かしてきても問題ないけどね。力じゃ僕には勝てないし。
「出来ても小さい嫌がらせ程度でしょ」
「形振り構わず親の権力で潰してくるかもしれんぞ？」
「その辺は大丈夫。叩いて埃が出ない人間なんて滅多にいないから」
「何か今サラッと恐ろしいこと言ってないか……？」
「気のせい気のせい」
御飯が美味しい。
「強いのね……あなたは」
カレンが少し物憂げに言った。
「強くないと生きられなかったからね」
強くならざるを得なかった半分の理由はセレンさんだけどね！
「ユウの世界はどんなのだったの？」
「んー……長くなるからまた放課後に生徒会室ででも話すよ」
てな感じでお昼は過ぎて行った。

食事を終えて戻ってくるとクラスの子達が集まってきた。
「カレンさん……大丈夫だった？」
「編入生のイレブンと食事してたんですって？　知り合いなんですか？」
「えぇ、彼この辺に詳しくないから生徒会のメンバーで世話をしてるのよ」
「生徒会で……!?　危険じゃないんですか……？　今朝だって……」
確かに今朝は凄かった。入ってきた男はここら辺でなら知らない人間はいないくらい名のある名門貴族の跡取りだった。そんな人物がユウの元に来て横柄な態度をとっていた。はっきり言ってむかついた。日本人を見下し馬鹿にするその態度に。でも彼は怯むどころか最後には相手を涙目にさせていた。胸がスーッとしたわ。
もし日本人が皆、彼のように強ければ……無駄な想像か。
「でも、彼は何一つ悪いことはしてないし、言ってることも正しかった

わよ？」
「それは……確かに、相手の人が一方的に突っかかってきてましたけど……」
　気分良くしてくれたお礼に、彼が早くこちらに馴染む為にも少しくらいフォローしておいてあげよう。
「それに……内側も外側もあの貴族のお坊ちゃまと比べるのも失礼なくらいよ？」
　あの男の容姿はあんまり……ね。突っかかっていった理由は自分より容姿が良かったのもあるんでしょうね。結果は散々だったけど。
「あー……それは確かに……」
「どっちが良いかと言われれば……」
「比べるべくもないわね」
　外が駄目なら中を磨けば良いのに、あの男は中身も駄目だった。確かに彼の言うとおりだ。何一つ彼に勝てそうにないわね。
「そういえばイレブンには珍しく白い髪だったわね」
「動物の耳みたいなのもあったよね……」
「首輪もしてたよね……何かうちで飼ってるペットみたい」
　よし、これで放っておいても大丈夫そうね。見た目は良いんですもの、女子とはそれなりに早く打ち解けるでしょうね。
　まぁあのお坊ちゃんはブリタニア人の生徒にもあまり良く見られてなかったし。そんな人物を完膚なきまでに叩き潰したんだもの。男子も大丈夫でしょう、この会話にも聞き耳立てているみたいだしね。

「ていうことがあったんですよ～」
「初日から飛ばすわね～ユウ」
　放課後、生徒会の仕事をしながらユウの世界について話を聞くことになった。今はシャーリーが会長に今朝の出来事を説明している。
「じゃあユウの世界について聞きましょうか」
「あんまり面白い話じゃないのでその辺は理解しといてくださいね？

さて……じゃあ何から話そう」
「お前が言っていた”国家解体戦争”というのを是非とも聞いてみたいな」
　国家解体戦争……そういえば言ってたわね。その言葉が存在してないことからここが異世界と分かったってことは相当大きな戦争だったのかしら。
「じゃあそれを話す前にＡＣの話からしようか」
「エーシー？」
「僕らの世界の兵器だよ。こちらの世界にも似たようなのを見かけたけど……人型の奴」
「もしかしてナイトメアフレームのことかい？」
「へー……ナイトメアフレームって言うんだ。初めて見た時はＡＣかＭＴだと思ってた」
　彼によるとＡＣというのは”アーマードコア”という名の人型兵器のことだそうだ。こちらのＫＭＦと違いサイズは１０メートル程とかなり大きい。ちなみにＭＴというのは”マッスルトレーサー”という、簡単に言えばＡＣよりも安価な兵器ということらしい。
「僕らの世界は国民国家政府っていう機関が世界を治めてたんだ。要は国が一つだったって感じかな？　色々とあってそこが統治能力を失っちゃってね。そこで力をつけてきたのが企業、特に６つの巨大企業グループが先頭に立って新たな秩序を作ろうということになった」
「そこで起こったのが国家解体戦争か……。だがいくら大きいとは言え、たかが企業が集まったからといってたった一つしかない国を潰せたのか？」
「確かにね、国側には国家軍隊があったし、レイヴンだってたくさん居ただろうし」
「レイヴン？」
「ＡＣを使用している傭兵のことだよ。でも、そんな戦力相手に国家はたった２６機の機体に壊滅させられたそうだよ」
「２６機!?　たったそれだけで可能なのか……？」
「その時投入されたのが最新鋭兵器”ネクスト”。今迄使われていた

ＡＣとは比べ物にならない性能を持っていたんだ。特に脅威となったのがコジマ粒子と呼ばれる特殊な物質で機体を覆うＰＡ、”プライマルアーマー”。生半可な攻撃では本体に届く前に消滅してしまう。たとえ届いたとしても、かなり威力が殺されてしまう」
「そんなすげぇ技術があるのかよ……」
　もしそんなものがあれば日本を簡単に取り戻すことができるんだろうな……。そんな考えを見透かしたようなユウの一言で現実に引き戻された。
「でもそのせいで、人が住むのに向かない世界になってしまった。コジマ粒子は汚染物質だった」
「どの程度なんだ？」
「環境を破壊し、人体にまで悪影響を及ぼす。広範囲かつ長期的に。しかも除去する方法もなく遮断もできない」
「その物質、今は？」
「今でも使用され続けてるよ。コジマ技術は軍事的に有用だし、発電効率も高いからね」
「それで地上が汚染され尽くした……？」
「地上が汚染されつくした原因は”リンクス戦争”にもあるそうだけどね。この戦争についてはまたそのうち話すよ。その戦争後に人々は汚染され尽くした大地を捨て、空に生活拠点を移した。高度７０００メートルに高空プラットホーム”クレイドル”を作った」
「最初の日にあなたがここと勘違いした場所ね？」
「そうだね。クレイドル一つにはおよそ２０００万人が住んでいる」
「２０００万!?　そんなに人が入る施設を上空に作ったのか!?」
「そう、超巨大航空機。５機で１グループ。クレイドル０１から３０までの３０グループ、約３０億人が上空で暮らしている」
　２０００万人も生活している航空機。想像もつかない。
「でも全ての人がクレイドルで生活できるわけじゃない。汚染された地上で生きなければいけない人達もいる。当然ながら、地上で生活する人の寿命は短い。汚染物質の影響でね」
「そんな……酷い……」

「僕の世界はエリア11と似ているよ」
「え……？」
日本と……？
「クレイドルに住めるのは富裕層、地上には貧困層。ブリタニア人と日本人。どちらも勝者と敗者、持つ者と持たざる者……でしょ？」
皆黙ってしまった。確かに、面白い話ではなかった。
「それで、お前はどちらだったんだ？　勝者か、敗者か」
「その辺は……ごめん、言えない。どっちつかずだったとだけ言っておくよ」
申し訳なさそうにそう言った。話題を変える為に今朝言っていたことを聞いてみた。
「あなたの言っていた民の為に戦った貴族っていうのは……？」
「ローゼンタール社最高戦力”ノブリス・オブリージュ”パイロット、ジェラルド・ジェンドリン。彼はクレイドルを支えるエネルギー供給施設であるアルテリアのうちの一つ、カーパルスの防衛を担っていた。一度直に会って話したことがあるけど、彼のことを本当の貴族って言うんだと思うよ。それくらい素晴らしい人物だった」
そう言ってその人の話をする彼は、どこか悲しそうだった。
「さーて、話も生徒会の仕事も区切りとして丁度良いから今日はこの辺でお開きにしましょうか！」
会長もそれに気付いたのか話を終わらせた。

ここと同じく勝者と敗者が明確に分かれている世界。その世界の住人。
あなたの目には……エリア11はどう映っているの……？

『民を守ること。それが貴族の務めだからね』
『その為にこの命を差し出すことになっても後悔はないさ』
カラードの首輪を外された時点でたくさんのものを失くしてし

まった。
『匪賊には、誇りもないのか？』
『生き易いものだな、羨ましいよ』
人との絆も、信頼も。……誇りも。
ここにいる人達も、全てを知ったら……。
また全てを失くすのかな……？

全て失くした時僕は……。

ナニニ……ナルノカナ？

０５話　一発確殺

「ユウ君、スザク君、今度の日曜日に会長とニーナと河口湖行くんだけど、一緒に行かない？」
　スザクと会話中にシャーリーから旅行のお誘いが来た。スザクは仕事があるらしく行けないと断っていた。
「ごめん……僕もどうしてもやりたいことがあって……」
「そっか……」
　僕みたいなのでも誘ってくれるなんて何て良い子なのでしょう。でも僕がいるとニーナが怖がっちゃうかもしれないし、何よりもやらなければいけないことがあった。
「誘ってくれてありがとう……僕の分まで楽しんできてよ」
「うん、お土産色々買ってくるね！」
「三人のセクシーな写真もあると嬉しいな！」
「相変わらずだねユウは……」
　いつかはみんなと旅行行けたら良いなぁ。全てを打ち明けた上で受け入れてもらえたら……ね。

　そして日曜日はあっという間にやってくるのです。
　僕がどうしてもやらなければいけなかったこと。それはあのハイブリッドで不可解な点があることに気付いたからだ。それに気付いたのは旅行に誘われる前日だった。僕はこちらの世界に来る前のことを考えていた。記憶が確かなら、僕はこちらに来る前は寝巻を着て寝たはずだ。だが気が付いた時にはパイロットスーツを着ていた。異世界に飛ばされるだなんて不可思議なことが起こるのだからパイロットスーツを着ていても不思議でないと言えばそうなのだが、何かが引っ掛かる。そもそも本来僕が着用していたスーツは白色だったはずだ。だがこちらに来て僕が着ていたのは灰色。
　そして最も気にかかったのがコジマ汚染だ。端末を調べても汚染

は一切確認できない。それがおかしい。通常、コジマ粒子は遮断出来ない。故にネクストに乗っているリンクスは、機体に積まれたコジマ技術を流用したジェネレーターやＰＡ等による高濃度汚染の影響で短命であると言われている。いくらハイブリッドとかいうわけのわからない代物でも、ＰＡ機能が付いていたからにはネクスト用のジェネレーターと同じくコジマ技術が使われているはず。ならばＰＡやＯＢ等を使わなかったとしても、最低限の汚染物質は機体から出ていてもおかしくないはずだ。なのに一切の汚染が検知されなかった。故に調べなければならない。

そうしてＡＣを隠してあるゲットーまで出て来た。隠し場所に着いたので端末でステルスを解除する。そして現れる僕の愛機、ストレイド。乗り込んで起動してみる。起動を確認した後に汚染を調べてもやはり検知出来なかった。

こうなると可能性としてありえるのは……コジマ粒子による汚染物質を完全に遮断出来る技術が完成していた……？　その技術を用いることで汚染を防いでいる……？

……考えていた一つの説が現実味を帯びてきた。

――記憶の欠落。

有り得ない話ではない。見知らぬ場所、色の違うパイロットスーツ、ハイブリッドなる特殊な機体。これらを踏まえて考えると、僕の記憶が欠落している可能性は十分にある。だがいつから？　それがまったくわからない。容姿の変化がほぼ見られないことから、どんなに長く見積もっても記憶の欠落は１年といったところか……。

今考えても手がかりがないのでどうにもならない。端末の日付表示も狂っていたし、他の物からも何も知ることはできなかった。徐々に欠落した記憶を取り戻していくしかないか……。このことは生徒会の皆に話すべきか？　いや、余計な心配をかけるだけだ。自分の心に留めておこう。

とりあえず今日は、いつでも戦闘に使えるようにこの機体について

把握しておくか。わからないことも多いしね。
えへへ。実はこの左腕の端末、テレビの電波も拾えるようにしてあるからテレビ番組まで見れてしまうのだ。んでもって機体内のモニターに表示させるように端末を弄ればＯＫ。食べ物も持ってきたし、今日はゆっくり機体について調べよう。

端末や機体を調べてわかったけど、ネクストと似て異なる点がいくつか見受けられた。特に顕著なのがジェネレーターだった。何故気付かなかったのか？　この機体、ジェネレーターが二つある……？
いや、厳密に言えば二種類を組み合わせて一つとしている。一つは当然コジマ技術を用いたタイプ、もう一つはコジマ技術が一切使われていないタイプのものだった。そして前者の方が小さく、大半は後者のタイプで占められていた。しかも重量機用の大きさ。いやこいつ重量機だけどね。考えるに、通常時は普通のタイプを使い、必要に応じてコジマタイプを起動させるという感じか？　でもコジマタイプも一応起動はしている……。おそらくフル稼働はしてないのだろう。ＯＢやＰＡを使う時にフル稼働するのかな？　しかしこの世界に汚染物質を撒き散らすのは不味い。そう考えると使うべきではなさそうだ。だとすると戦闘や移動に随分制限がかかってしまう……。どうしたものか。
お？
ジェネレーターのエネルギー供給先を見てみると、通常タイプの方の供給先がメインブースターの他に、サイド、バック、それからもう一つ背部のＯＢ用のブースターに繋がっていた。ＯＢ用にはコジマタイプも接続されてる。これから考えるに、ＱＢにコジマ粒子を使用しないで済む？　そうなれば随分と戦闘が楽になる。そしてモニター表示された”Ｇｌｉｄｅ　Ｂｏｏｓｔ”の文字。ＯＢとは異なるようで、両方とも表示されていた。
おそらくは、
ＧＢ　↓　通常ジェネレーターのみ使用
ＯＢ　↓　両方のジェネレーターを使用

であると思われる。
ＧＢがコジマタイプを起動させなくとも使えるようならＯＢを使用しなくても高速移動ができそうだ。ネクストでなかった時はどうなることかと思ったが、この世界にはこのハイブリッドの方が適していそうだ。サイズも小さいからＫＭＦとかいうのに思われるだろう。そうすればこの機体に目を付けられる確率も減るはず！　いやー良かった良かった。女神様、この機体をくれてありがとう。

気付くと結構時間が経っていた。テレビを付けたは良いけど何にも見てなかったよ。今は何がやってるかな？
《こちら、河口湖のコンベンションホテル前です》
ほえ？　どうしたの？
《ホテルジャック犯は日本解放戦線を名乗っており、ジェームズ議長を中心とするサクラダイト配分会議のメンバーと居合わせた観光客、及び数名の従業員を人質にとっています》
あらら、可哀そうに。日本解放戦線ってのはレジスタンスみたいなもんかな？
まぁ、自業自得でしょ。力で押さえつけてるんだもん、反抗されても仕方ない。人質の皆さんにはお悔やみ申し上げるよ。運がなかったと諦めな。
《これが犯人から送られてきた映像です》
人質の姿が映る。
あーあー可哀そうに……若い子まで……え？　おかしいな、知った顔が見える気がする。待って。え？
会長……シャーリー……ニーナ……？　何であの三人がいるの……？　唯の他人の空似だよね……？
『今度の日曜日会長とニーナと河口湖行くんだけど……』
『《こちら、河口湖のコンベンションホテル前です》』

気付くと機体の調整に入っていた。
念の為にパイロットスーツを持ってきておいて良かった。急いで

着替え、機体の構成を確認する。
機体は前から変えてないのでブレードとバズーカのままだった。このままの装備で行くのは少し心許ない。装備を変えてから行こうと端末を弄る。現場付近には近寄れない可能性もある……右腕は狙撃用の武器に変えておこう。
狙撃用武装に見たことのないモノを発見する。非常時に未使用の武装を使うのは有り得ないことだろうが、動かす機会が少ない以上動かせる時に使わねばなるまい。
R・A・UNIT：USC―26／H　SALEM
ん？　そういえば武装変えたのは初めてだけど、どう変わるんだ……？　確かこの機体は空から降ってきたけど……。……まさか……？　傍に物凄い音を立てて何か落ちてきた。やっぱり……。
煙が晴れるとコンテナが落ちてきており、中を開けると折り畳まれたスナイパーライフルが入っていた。だけど口径を見て目が点になった。えーっと……ライフルというか……キャノン？　いやいやいやいや！　何この口径！　え？　300㎜とか余裕で超えてない？　ありえねーよこれで何撃つつもりだよ！　これ作った奴頭おかしいんじゃないの!?　こんなの移動しながら撃てねぇよ！　ばーか！　完全に選択ミスだよ！やっぱり次からは使い慣れたやつにするよ！　ちくしょー、もういいや威力だけなら期待できそうだし。とりあえずバズーカを……Oh……バズーカ隠しとかなきゃ。武装呼んだら前の帰ってくれるのかと思ったけど、機体と同じで帰らないのね。そんなに都合良くいかないか……。そう考えると不味いな。呼べば呼ぶほど置き場に困るようになるぞ。おまけに空から降ってくるってことは……換装も自分ですることになるんじゃないか？　腕部武装ならいいけど、背部武装とかフレームの換装とかする時困るじゃん！　一人で換装できないよ、くそっ。
うむむむ……悩むのは後にしよう……時間もないしね……。左腕だけは変えておこう。
L・A・UNIT：EB―O305
ブレードレンジの長いタイプのレーザーブレードにしておいた。

降ってきたコンテナから武器を取出し左腕に装着する。今回のブレードは前のと違い腕に直接付けるタイプなので手は空いている。これなら前みたいに武装をどこかにやってから手を使う、なんてことしないで済む。
さーて行きますか。
〔作戦目標、テロリスト全員の抹殺、及び人質全員を無傷で救出〕
地図を確認して、目標地点をセット、ルート情報が表示される。今回は街から出なきゃいけない都合上、高い高度で向かわないといけない。
河口湖方面へ向けて機体を飛ばした。
向かっている最中、リヴァルから電話があった。ヘルメットの通信回線で電話に出る。
「ユウ！　良かった……お前は出てくれたか……」
「お前はって？」
「ルルーシュの奴は出なかったんだ……何やってんだよこんな時に！」
「会長達のことだね？」
「あぁ……会長達大丈夫だよな!?　無事に救出されるよな!?」
「どうなるかは神様くらいしか知らないんじゃないかな……」
「お前……こんな時までそんなっ！」
「僕らに何が出来る？　僕らが出来るのは無事を祈ることぐらいだよ」
「それは……そうだけどよ……」
リヴァルは何も出来ない自分がもどかしいのだろう。
「大丈夫……絶対助かるよ……絶対ね」
「そうだよな……すまん、ありがとう」
電話を切り、ブースターを更に吹かす。
そうとも……絶対に助ける……！

辺りは暗くなり始めていた。人質の救出に来たブリタニア軍は、中々手を出せずにいるらしい。
当然こちらも動けずに発見されない程度の距離でステルス状態で待機しタイミングを計っていた。
今はブリタニアの回線をこっそり拝借し、通信を盗み聞きしている。ちなみにどうやったかというと、リコンという小型の情報収集装置を軍用車にこっそりくっ付けてきた。生身で。見つからないでよかったほんと。
にしても……意外だな。人質の被害など考えずに叩き潰すのかと思ってたけど。膠着状態ですね。どうするつもりなんかな？
ホテルは湖の上に建っており、ホテルへ繋がる橋は一つを残して全部落とされている。空及び湖からの侵入も失敗。もう一つの入口である地下トンネルにはリニアカノンがあるらしく接近できず。人質はホテルの倉庫に全員まとめて監禁……。こちらもむやみに行動できずない。さて……どうしたものか。
センサーに反応。……屋上に人？　見せしめか……？
「っ!?」
急いで機体を戦闘モードへ移行させ、ＧＢを起動させた。

ホテルジャック犯が見せしめに選んだのはよりにもよってシャーリーだった。泣きながら必死に命乞いをしているのがわかる。
くそがぁ！　ふざけんなよ!!
そして彼女はホテルの屋上から突き落とされた。
一気に距離を詰める。敵に見つかるとかそんなことはどうでもいい。
全速力でホテルまで急行して左手に仕込まれたエアクッションを展開、すんでのところで左手で彼女を受け止めた。なんとか無事に助けることが出来た。……さすがに今のは肝を冷やした。
カメラで彼女を確認すると泣きながらこちらを見ていた。無理もない……もう少しで死ぬところだったんだから。

ぼやぼやしてると攻撃されかねないのでさっさと退散する。ホテルの正面にある一つだけ残された橋を使い陸地へと向かう。そこでブリタニア軍のＫＭＦがこちらにランス型の武器を向け出迎えてくれた。
「何者だ!?　貴様！」
「人質一人の命を救った者に対して随分な歓迎だ」
外部マイクを使って話す。今回もマシンボイスを使用。
「命を救ってくれたことには感謝する。だが貴様が味方でない以上警戒するのは仕方あるまい。シンジュクではこちらに対して敵意を見せていたそうだしな」
隊長機と思われる機体から声が発せられる。搭乗者は女だと思われるのだが……。うぅ……声は似てないのに口調でセレンさん思い出して腰が引ける……。
「今はそちらと敵対する意思はない。態々敵を増やす暇も、必要もないだろう？」
「……」
さーて目立ってしまったがどうしたものか。前面の相手は明らかに敵対姿勢。左腕にはシャーリー。後ろにはまだ助けなければならない人々。こんな所で揉めてる間に人質が減っちまうよ、くそったれ。
「まぁ良い……。貴様の相手は後回しだ」
そう言って機体を反転させるとその先にはマスコミの撮影車と思しき車が向かってきており、車の上に一人の人物が立っていた。全身黒ずくめで、顔にはフルフェイスのマスク。
「ゼロ……！」
ゼロ？　あぁそういえばテレビで見たな。ブリタニアに刃向ってる人だっけ。こちらにも中々気概のある人がいるじゃないですか。
ゼロがブリタニアの女隊長と色々喋っていた。簡単にまとめると、人質の中には皇族がいるっぽくって手が出せなかった。ゼロが「俺が救う！」発言をしていた。じゃあやってみせろ。という感じになり

ました。
ゼロを乗せた車がホテルへ入っていった。
ブリタニア軍の通信から、地下のリニアカノンをどうにかすれば人質は何とかできそうな感じだという。
ゼロが信用できるかはさておき、一つでも助ける手段を確保しておいた方が良いだろう。
〔作戦目標を更新、地下トンネル内に設置されたリニアカノンの破壊〕
こちらが動き出すとブリタニア軍は銃口を向けてきた。それを無視して歩いて傍の兵士に近付き、シャーリーを託す。シャーリーはこちらを涙目で見ていた。とりあえず彼女は助けた。後は会長とニーナか……。あっちはゼロに任せるしかない。僕はできることをやるか。
スキャンモードで確認したところ、後方に地下トンネルに続く縦穴を発見、そこまで移動する。その間も敵はこちらに銃口を向けてはいたが、発砲はしてこなかった。
入口の傍にいる眼鏡をかけた技術者風の男がこちらをじっくり観察するように見ている。何故か楽しそうに見えるのは気のせいだろうか。
トンネルに繋がる穴を飛び下りる。着地した先にはいつぞやに見た白いＫＭＦ。向こうも警戒している。
「そこを退け」
そこ邪魔、おどきなさい。
幸いにも白いのはこっちの言葉に従って横にずれてくれた。
「何をするつもりだ……！」
向こうのパイロットから声が発せられた。あれー？　どっかで聞いたことあるような……？　まぁいっか。
右膝を突き左膝の盾と折り畳まれた銃身を展開、左手を銃に添え狙撃体制に移る。スキャンモードで敵の位置情報を確認。照準を合わせる。
僕の友人を人質にとり、その上殺そうとしたんだ。この世界から消

え失せろ。
右腕のスナイパーキャノンから一発の銃弾が撃ち出される。射撃の反動で機体が仰け反り、地面に亀裂が走る。トンネル内故に轟音は反響しており、機体外に居たら鼓膜が破れていたのではないかと思えた。放たれた銃弾は真っ直ぐに敵に向かって飛び、リニアカノンに直撃。機体は跡形もなく、文字通り消し飛んだ。

……僕は唖然としていた。
……ばっかじゃないの？　どう考えてもあの程度の敵に撃つ武器じゃねぇ！　どこの変態企業だよこんなもん作ったのは！

やることはやったんだ。後はゼロとブリタニア軍に任せる。
こんなもん使ったらホテルごと人質を吹っ飛ばしかねないのでね。完全に武装の選択ミスですはい。反省します。
トンネルの壁を蹴り上がり、さっさとその場から離れる。
その後、ホテルが内側から爆発を起こして崩れた。人質全員の命は絶望的かと思われたが、ゼロが人質を全員船に移しホテルの陰から出て来た。そこでテレビカメラを使って宣言していた。
「我々は……黒の騎士団！」
ゼロは宣言した。我らは武器を持たない者の味方だと。ブリタニア人もイレブンも関係なく、弱きを助け、強きを挫くと。
これはまた荒れそうだなぁ……。
そんなことを考えながら僕はその場を去った。

ＡＣの隠し場所に戻ってくるとコンテナが消えていた。誰かが持って行ったのかと考えたが、あんなものを持って行けるとは思えない……。気にはなるが、コンテナだけ帰って行ったということで納得しといた。
さて……今後どうするか……？　記憶を取り戻さなきゃいけない

し、パーツの置き場所や換装、弾薬の補給……。どこかの組織に所属するのが一番だけど……。

悩みは尽きないなぁ……はぁ……。

06話　ゲットー

「ふわぁぁぁぁ……眠い……」
　思わず大きな欠伸が出てしまった。黒の騎士団として活動しだしてから朝は学校、夜は騎士団の二重生活で寝不足が続いている。このままでは倒れてしまいかねない。何とか寝る時間を作らないと……。
　生徒会室の前に行くと中が何やら騒がしい。
「ユウ！　おいよせ！　やめろ！」
「足掻くな。運命を受け入れろ」
　ユウが抵抗しているルルーシュに何かをしようとしているらしい。
　え？　何？　何が起こってるの？　もしかして……。

『君は今日から僕のペットだ……』
『駄目だ……俺にはリヴァルという飼い主が……』
　――だがユウは無理矢理ルルーシュに首輪を……

　はっ!?　危ない……変な世界に足を踏み入れるところだった……。それもこれもニーナがっ……！
『ユウ×ルルかなぁ……？　それともスザ×ユウ……？　どっちだと思う……？』
　とか聞いてくるから！　私にはそんな趣味は断じてない！　……ないはず……。わ、私はユウ×ルルかなぁ……じゃなくって！
　頭を思いっきり振って変な想像を振り払う。疲れと寝不足のせいだわきっと……。入ってみればわかる。意を決して扉を開ける。

　中では縛られたルルーシュが顔にネコみたいなひげを書かれていた。他の皆も動物のキグルミを着ていたりしていた。……えーっと……コスプレパーティ？
　会長が言うにはどうやらユウとアーサーの歓迎会らしい。そういえばまだしてなかったわね。アーサーとはスザクが拾ってきた猫の

ことだ。その割にしょっちゅう噛みつかれているみたいだけど。
「カレンの分も用意してあるよ、ほら！」
洋服掛けにはたくさんのキグルミ……え？　私も？
「い、いや……私は……」
「だーめ！　会長命令よ！」
いやいや、よ！　じゃなくって……。
「ほ、ほら……！　ユウだって何にもしてないですし！」
ユウは一切手を付けられていない。
「ユウはほら、何にもしなくても動物みたいだし」
「僕はほら、首輪付き獣だし」
そういってユウはにやりと笑った。
くっ！　この……ケモノのくせに……！
「そ、それより三人共大丈夫だった？　特にシャーリー」
無理矢理話題をそらす。
「もう大変だったよ！　皆に質問責めされて！　特にあの黒いのについて凄い聞かれたんだから！」
私も現場で見た、あの黒いＫＭＦ。シンジュクゲットーにも現れていたけど……あいつは味方なのかしら。それとも敵……？
「報道カメラとか数日前からずっといるよね」
「おかげで全然外に出られないわよね～」
あの事件後からマスコミが校門前に詰め寄せている。そりゃまぁ謎のＫＭＦに救出された少女がいるんですものね。
「でも、だからってなんで俺達まで外出禁止なんですか？」
「ほら、よく言うじゃん。『連帯責任だ！　全員腕立て１００回追加！』って」
「いや……お前それどこの鬼軍曹だよ……」
そんな話を聞きながらスザクは目に涙を溜めていた。
「良かった……またこうしてみんなで集まれて……本当に良かった……」
「ま～たスザクはそういうこと言うんだか……ら！」
「ふぐぅっ！」

ユウがスザクにコブラツイストをかましている。あー……綺麗に決まってるわね……。
「大丈夫だよ……！　皆が死ぬなんてことないから……っ！」
「どうして？」
「皆なんやかんやでしぶとそうだし……！」
「ほほ～う？　今の聞きました～かいちょ～？」
「生意気なペットにはお仕置きが必要ねぇ～！」
そう言ってリヴァルと会長がユウに襲いかかった。

「ギニャァァァァァ！」
口は災いの元……ね。合掌。
「リヴァ×ユウも意外と……？」
ニーナ、少し黙ろうか。

今日はひどい目にあった……。僕が何したっていうんですか！
口が正直なだけじゃないさ！
しかし……最近ニーナが僕に畏怖の視線を向けなくなってきた、それは良い。だけどなんか別の恐ろしい視線を感じるんだけど……？
気のせい？

茜色に染まる空の中、外出禁止令も解除されたので僕は今ゲットーに来ております。初めてこの世界に来た場所、シンジュクゲットー。ここを調べれば何か記憶を取り戻す手がかりがあるんじゃないかと思い来てみたんだけど……。見渡す限り崩れたビル、ビル、ビル……。僕が生まれるより遥か昔に”大破壊”という事が起きたという。その後の世界もこんな感じだったのかな……？
どこへ行ってもいつになっても争いばかりで……平和なんてありえるのかな。例え平和に見えたとしても、それは表面だけ。裏では殺

し合いばかり。反吐が出そう。誰も争わない、平和な……優しい世界なんてものは所詮頭がお花畑な奴の戯言なんだろうか……？
彼女が望んでいた世界。僕は……記憶のない間、理想の為に動いていたのだろうか。

「ユウ……？」
不意に背中に声をかけられる。カレンだった。
「カレン？　こんな所で何してるの？」
「え？　あ、えっと……あなたがゲットーに入っていくのが見えたから……」
「それでこんな所までついて来たの？　危ないにゃぁもう」
「にゃ……？　あ、そ、そうよね……ごめんなさい」
「カレン可愛いんだからこんな所歩いてると悪いおじさんに襲われちゃうよ」
「か、かわっ!?　ちょっと……何言ってるのよ……」
お顔真っ赤ですね、うへへ。まぁカレン強いから大丈夫だけどね。言わないけど。口は災いの元って今日学んだからね。
「それに前ここで戦闘あったし危険だよ」
「え……？　どういうこと……？」
あ、いっけね。心の鍵かけ忘れてた。
「あー……それはあれだ……そのー……ええいもういいや！　……内緒だよ？」
僕が最初こちらの世界に来た時居た場所がここで、その時にブリタニア軍による日本人虐殺があったことをカレンに告げた。カレンは驚いて目を見開いていた後、何かを考え込むように口に手を当て目を細めていた。
「その時にあなたはここにいたのよね……？」
「誰にも話しちゃだめだよ？　なんかテレビで報道されなかったらしいから、下手に話が出回ると裏の怖い人に消されかねないし」
「ええ……わかったわ」
カレンも納得してくれたご様子。一安心。

いやー……それにしても……寒い光景だなぁ……。
瓦礫の上に腰掛け辺りを見渡す。こんな中で一生懸命に生きている人達がいる。
「あなたの目には……ここはどう見える？」
難しい質問だなぁ……。
「ブリタニア人のカレンの前でこんなことを言うのは悪いけど……ブリタニアって頭悪いよね」
「え？」
「あくまで僕の考えだし、ブリタニアのことは詳しくは知っているわけじゃないけど……僕はここがブリタニアの頭の悪さの象徴に思えるよ。だって確か侵攻した理由が希少鉱物欲しさにでしょ？　そりゃ確かに占領すれば供給は賄えるけどさ……。色々方法考えて、取引すれば良かったのに。それを放棄して力で捻じ伏せちゃってさ……頭悪いよね。
たとえ他に方法がなかったり侵略する理由があったとしてもさ、支配方法ってものがあるよね。今みたいに力で押さえつけてりゃそりゃ反抗もされるよ。この街にしてもそうだよ。何で復興させないの？　復興させて使った方がよっぽど利用価値があるのに……宝の持ち腐れだよね」
捲し立てちゃったけどカレン怒ってないかな。怒ってないと良いけど。
だがカレンは微笑んでいた。
「えーっと……どうしたの？」
「いえ、そういう考え方もあるんだ……って思って……」
「きっとこっちの人はこの支配体系が当たり前になってて考えないだけだよ」
「ふふ……そうかもね」
「さぁて、暗くなる前に帰ろうか」
さっさと帰ってご飯だ、ご飯！
「そういえばあなたはどうしてここへ？」
「帰りがてら話すよ」

帰ろうと立ち上がると爆発音と共に揺れが起きた。カレンを引き寄せ物陰に隠れる。カレンが顔を赤くして何か言ってるが気にしない。
黒煙が上がり、煙の中からＫＭＦが数機出て来た。
「我々は黒の騎士団である！　これはブリタニアに対する抵抗の炎だ！　立ち上がれ日本人よ！　黒の騎士団と共に支配者を討て！　ブリタニア人を殺せ！」
「何を言っているの……！　あんなの……！」
「あんなのは黒の騎士団じゃないよ」
「え……？」
「黒の騎士団はブリタニア人、日本人関係なく弱い者の味方と宣言していた。なのに奴らは無差別に殺しているし、助けようという気もない」
テロリストのＫＭＦ（後日知ったが”無頼”という日本側で改造されたものらしい）は地を走行しながら平然と通行人をひき殺している。
「詳しいのね？」
「僕はテレビっ子だからね。そんなことよりどうしよう……どっから逃げたものか……」
警察用のＫＭＦの他に軍も出張っているらしく、いつぞやに見たブリタニア軍ＫＭＦのサザーランドも出てきている。
……そうだ、敵さんの回線を拝借させてもらおう。カレンもいるけど……背に腹はかえられない。
懐から取り出した銃に小型リコンを込め、近くのブリタニアＫＭＦに向かって撃ち出す。リコンはコクピット部分に張り付いた。端末を取出しちょいちょいと弄る。
「何をしたの……？」
「ちょっと待ってね……ここをこうして……ほい」
≪テロリストはＫＭＦを使用！　敵の数は５機と推定！　一機たりとも逃すな！≫

「ブリタニア軍の軍用通信回線!?　あなた一体……!?」
「なーいしょ。まぁ無事に帰れたら少しばかりなら話すよ」
これで上手いこと敵の薄い層を抜けて行けば逃げられるはず。
≪なお、テロリストはゲットー住人に紛れ込む公算大！　包囲内のイレブンは一人残らず皆殺しにしろ！≫
ブリタニア軍機が住民を攻撃し始めた。老若男女問わず皆殺しにする気らしい。
「そんな……!?　酷い……！」
不味いぞ……ＡＣを使えば簡単に抜け出せるし、虐殺を止めることが出来る。だけどカレンがいる状態で使えば正体がばれかねない……。くそ……っ！　どうすれば……。
その時、破壊されたテロリストのＫＭＦがこちらに倒れてきた。すぐさまカレンを抱きかかえ倒れてくる機体に背を向ける。
「ぐっ！」
倒れて来た際の衝撃で瓦礫や機体の破片が背中に刺さる。
「ユウ！　大丈夫!?　背中……血が出て……！」
「大丈夫大丈夫……僕頑丈だしっ！」
すっげぇ痛いけどな！　いくら僕が強化人間でも痛いものは痛いよ！　くそったれ！
あぁもう！　迷ってる時間くらいくれればいいのに……！　さっき背に腹はかえられないとか考えたばっかなのに、もう背中ボロボロだっつーの……！　結局腹もダメージ負うはめになるのか……。
「カレン……こっち……」
今ここでＡＣを呼ぶのは不味い……隠し場所は幸いにも近い。あそこまで行ければ……。
カレンが肩を貸してくれた。もう少し……。
「ここだ……」

「ここ……？　ここに何かあるの……？」

ユウに連れて来られたのは崩れかけたビルの中。ここに何が……？

彼が手に持っていた端末に触れると目の前に黒い何かが突然現れた。

「え……？　これって……!?」

今までで二度見たことがある。一度はシンジュクゲットーでの殲滅戦の時に。二度目は河口湖ホテルジャック事件の際に。

どうしてこの機体が……？　いえ、そもそも……どうして彼が……？

「カレン……こっちに……」

ユウは傷が痛むのか顔が歪んでいる。彼は瓦礫を伝い機体に上り始めた。機体の番号認証と指紋認証を共に終えるとコクピットハッチが開く。

これは……ＫＭＦじゃないの……？　似ているようで全く異なる機体。これは一体何……？

コクピットの中もまるで別物だった。ＫＭＦを動かしたことがあるからこそ、この機体の操縦性の難解さを理解できた。あまりにも違いすぎる。こんなものを本当に人間が操縦できるの……？

ユウがシートに座り、傍のチューブに繋がった機械を手に取ると、そのままうなじの機械に刺した。不快そうに声を漏らす。

彼の首の機械が何の為にあるのか何となくわかった。この機体の為だ……。

【ＡＭＳ装置との接続を確認　パイロットデータを照合】

【メインシステム、戦闘モード起動します】

マシンボイスが流れる。やっぱりこれはＫＭＦとは全くの別物とみて間違いない。

「カレン……外は危険だ……こちらに……」

こっちって……どこに……。まさか……膝の上!?　でもそんなこと言ってる場合じゃないし……あーもうなるようになれ！

「し、失礼します……」

彼の視界を奪わないように膝の上に横向きに座る。

「出来る限り安全運転はするけど……一応掴まってて」
掴める所は……ない。とすればやっぱりここしかないか……。彼の首に手を回す。その際に彼の首に刺さったチューブや機械が手に当たり、複雑な気分になった。
「作戦目標、敵機全機破壊、及び人民の救出」
「行くよ……しっかり掴まってて」

カレンがいる上に僕自身もスーツを着ていないのであまり派手には動けない。派手に動くとカレンの体調に悪影響を及ぼす可能性があるからだ。彼女のことを考慮しつつの作戦。だが今までも作戦に制限の設けられていたことは何度もあった。やってみせるさ。

まず日本人の虐殺を止める為に目立つ。スナイパーキャノンをバズーカに変えてきたので構える動作は必要なく、遠慮なくぶっ放せる。
正面でこちらに背を向け日本人を殺害している機体の足に向けて一発。敵は足を破壊されたことによりバランスを崩し倒れる、と同時に脱出装置を作動させて逃げて行く。
≪所属不明のＫＭＦを確認！　河口湖に現れた機体と同じものと推測される！　全機、注意せよ！≫
≪敵の武装はバズーカタイプのものと思われる。当たるなよ！一撃でやられるぞ！≫
≪イエス、マイロード！≫
これで良い。少なくともこれで敵の注意はこちらに向いた。
背の高いビルを蹴り上がりスキャンモードで敵の位置を探知。その数１０機。
「１０機……!?　無理よ……！　ある程度敵を錯乱させたらこちらも離脱した方が……」
「作戦目標に変更なし。作戦継続」

大丈夫……あの程度なら何機居ても問題ない。カレンの頭を優しくポンポンと叩いて目を見て微笑んでおく。
３時の方向より３機接近。敵のアサルトライフルの射程に入る前にビルの上からバズーカを１発、撃った後すぐさまビルから降りる。
弾は前方の機体に当たり爆散、残る２機が爆炎と残骸に足を取られる。その隙に近付き黒煙から出て来たところへ１機をレーザーブレードで切り裂き、そのままの勢いでもう１機へ膝蹴りをかまし蹴り飛ばす。どちらも大破を確認、残り７機。
後方より２機がアサルトライフルを撃ちながら接近。ビルの陰に隠れやりすごし、反撃にバズーカを１発。コクピットに命中し爆散。１機破壊、残り６機。
もう１機は背を向け走り出した。その先の地形を確認する。開けた場所で物陰になりそうな物もたくさんある。おそらく罠だがあえてその罠にかかりに行く。
つかず離れずでついて行き、広い場所に出ると突然敵機が反転、と同時に四方から敵機が出てくる。合計６機。アサルトライフルの斉射をまともに受ける。しかし威力が足りないのかこちらが硬いのか、弾丸は装甲を削るどころか跳弾していた。
≪て、敵機！　ライフルが効きません！　跳弾してぐあぁぁ!!≫
焦る敵にブーストで近付きそのままショルダータックル。衝撃が強すぎたのか敵の機体の前半分が潰れて吹き飛んだ。その場で反転しバズーカを２発。それぞれ敵に当たり２機破壊。残り３機。
≪うわぁぁぁ！　来るな！　来るなぁぁぁ!!≫
錯乱した状態で銃撃しているためまともに当らない。近付くと敵が腕に装備されたトンファーに武装を変え横薙ぎに殴り掛かる。その腕を切り落としコクピットにブレードを突き刺す。残り２機。
≪下がれ！　後退しろ！　あれは”ミスト”だ！　我々だけではとても太刀打ち出来ん！≫
……ミスト？　何だそれは？
≪後退して援軍を……≫
突如その場にいた２機が爆散した。どこからともなく複数のＫＭ

Ｆが現れ、残っていたサザーランドを破壊したようだ。
　テロリストの援軍かと思ったが、民間人を避難させているところを見ると別口のようだった。
「本命のご到着かな？」
「黒の……騎士団……？」
　黒の騎士団所属と思われるＫＭＦがこちらに銃口を向けている。かなり警戒しているようだ。
「黒の騎士団とお見受けする。ゲットー住民虐殺阻止の協力に感謝する。
　が……こちらに対して攻撃する意思があるのならば、こちらもそれ相応の対応をさせてもらう」
　いつも通りマシンボイス。というかこれをデフォルトに設定してある。
　向こうさんはしばらくこちらに銃口を向けていたが、武器を下ろしてくれた。攻撃する意思がないのを確認したので、ビルを蹴り上がりその場を離れる。
【作戦目標クリア　システム、通常モードに移行します】
「ふぅ……頭の柔らかい連中で助かった」
「背中は大丈夫なの……？」
「刺さっていた破片は抜いたからね。傷はほっとけばすぐ治るよ」
　実際、既に痛みは引いていた。
「そんなわけ……！」
「あるんだよー世の中は広いよー」
　隠し場所まで来てＡＣをいつも通り待機状態にし、ステルスを起動。ストレイドが消えていく。
　カレンが背中を見せろというので見せると唖然としていた。既に血は止まっており、少しずつ傷が治り始めていた。
「あなた一体何者なの……？　回線ジャックと言い、その治癒力と言い、……ミストと言い……」
「ミストって何？」
　さっきも聞いたなその単語。

「何って……あの機体のことよ！　ブリタイア軍が仮につけた名として発表してたわよ。テレビとか見てないの？」
「そこの部分は見てないよ……なに人の機体に勝手に名前つけてんのさ……まったく、失礼しちゃうね」
「あの機体の本当の名前は何て言うの？」
「ストレイド」
「ストレイド……」
　カレンは噛み締めるようにその名を口に出した。
「さぁ、もう面倒はごめんだ。さっさと帰ろう」
「えぇ……そうね。……色々……話してくれる？」
「落ち着いたらでも良いかな……？　今日はもう疲れちゃった……」
「えぇ……怪我もあるものね……」
　二人揃って岐路に着く。辺りはもう真っ暗だった。
「そういえば……テレビっ子って言ってる割に知らなかったのね？ミストのこと」
「あー……あれはほら……あれだ……」
「ふふ……わかってるわ。ホテルジャックの時現場にいたんですものね」
「……今日のことも含めて内緒だよ？」
「はいはい……ふふっ」
　カレンは楽しそうに笑っていた。
　その後二人の間に会話はなかったが気まずさは感じなかった。その雰囲気は何故か懐かしく感じられた。

　カレンを家まで送り届けて今日は解散！　ってところで後ろから話しかけられた。
「ユウ……今日は助けてくれてありがとう」
「どういたしまして」
「また明日ね」
「うん」
　さぁてお家でごはんだごはん。

カレンはユウの姿が見えなくなるまでずっとその背中を見ていた。
一度ゲットーで命を救われ、シャーリーを助けてくれて、そして今日もまた彼に救われた。
「……ありがとうね……ユウ」

「話とは何だ？　カレン」
黒の騎士団のアジトとして使っている大型の車両。その中にあるゼロの部屋にカレンは居た。
「はい、信じてもらえるかはわかりませんが……私の通っている学園に異世界人を名乗る人物がいるのですが……」
「ユウ・ヘイズという人物だな」
「ご存知なのですか……!?」
「なに、私の情報網に入ってきてね。中々興味深い人物だ」
「ゼロも彼が異世界人だと？」
「君は信じているのだろう？　優秀な君が信じているんだ。間違いはないだろう」
「ありがとうございます……それで彼のことなのですが……彼を黒の騎士団に加えたいと考えています」
「ほう、それはまた何故だ？」
「まだ詳しくは言えませんし、彼が我々に協力してくれるかどうかすらわかりません……。ただ……彼は我々の活動を肯定してくれています」
「それだけが推薦理由か？」
「他にも理由がありますが……彼と約束をしました。誰にも話さないと……」
「私にも話せないことか？」
「申し訳ないとは思いますが……」
「ふっ……わかった。こちらでも独自に彼のことを調べてみよう。君

も彼の動向に注目してくれ。もし彼が騎士団に相応しいのであれば、何とかこちらに引き入れてみてくれ」
「わかりました」
カレンは部屋から出て行った。
一人部屋に残ったゼロ、ルルーシュは机に肘をつき思考に耽っていた。
（ユウを黒の騎士団に……？　……調べてみる必要がありそうだな）

０７話　獣を手懐けるには餌付けが一番

ユウは必死に考えていた。どちらを選ぶべきか。選択を誤れば今後の活動に支障を来す。それだけは避けねばならない。どちらを選んでも後悔するのではないか？　そう考えるが両方を取ることは不可能だ。いや、もしかしたら彼ならば両方を取ることも出来るかもしれない。しかしそんなことをすれば取り返しのつかないことになる。どうするべきか……。だが悩んでいる時間はない。決断の時は迫る。

そしてユウは決断し、行動に移った。

カレンは呆れていた。ユウは昼のメニューを物凄く真剣に悩んでいた。たかが昼食一つ選ぶのに今まで見たことないくらい、それこそミストに乗っていた時よりも真剣な表情で悩んでいた。それも今日に限ったことではなく、毎回である。

「ごはんはその後の気分を左右するくらい重要なんだよ!?」

とは彼の弁であるが、いくらなんでも悩み過ぎだろう。まぁユウの食に対するこだわりには頭が下がる思い出はあるが……。

彼の世話係主任を任されてからそれなりに食事を共にしている。だからこそわかるが彼は本当に食に対して真剣である。別段食い意地が張っているわけではない。まるで食事というものを神聖視しているのではないかと思える程大事にしているのである。食べる前には「いただきます」、食べ終われば「ご馳走様でした」を欠かさない。ちなみに今日はミートスパゲティを選んでいた。

（食べ方も綺麗だし……きちんと教育されてきたのはわかるのよね）

「よう！　お二人さんお揃いで！」

そこへ手にお盆を持ったルルーシュとリヴァルが来て隣の席へ座った。

「ちょっと……！　そういう言い方はやめてよ……！」

「なぁーに言ってんの。二人のことは噂で聞いてるぜ？」

「あ、二人ともいたんだ。何の話？」
よほど食事に夢中だったのか、ユウは初めて二人がいることに気付いた。
「お前は相変わらずだな……。昨日のシンジュクゲットーでのテロ騒ぎのことさ」
二人とも食事をしながら、噂について話し始めた。
謎の美形イレブンユウ、そして病弱なカレンお嬢様。二人は危険なゲットーへ……。
そこへ現れたテロ組織！　出動したブリタニア軍との戦闘に巻き込まれ二人は絶体絶命！
ユウはカレンを守り、傷を負いながらも無事生還したのであった！
「ってな話になってるけど？」
カレンはようやく理解した。今日はいつにも増して他の生徒の視線を集めていた。ゲットーでの様子を誰かに見られたのだろう。ミストの話が出ていないところを見ると、そこまでは見られていないようだが。
「……尾ひれ付き過ぎよ」
「でも事実もあるんだろ？　実際カレン無事だし」
「別に僕は怪我してないよ？　どこにも傷ないし痛そうにも見えないでしょ？」
「まぁ確かにな」
これは嘘だった。実際はとっくに治癒してしまっているだけだ。
「どちらにせよ、無事にゲットーを抜けられたことは事実なんだ。礼を言うよ、ユウ。クラスメイトを助けてくれてありがとう」
「当然のことをしたまでだよ」
「学園内はこの話で持ちきりだぜ？」
カレンお嬢様とそれを守った――

――勇敢なペットユウって」
「ふぇ!?」

ユウが素っ頓狂な声を上げた。それはもはや奇声の域で、周りの生徒もびっくりしてユウを見ていた。
「ペ……？」
「ペット……？　えっ、え？　何で？　そこは普通ナイト様～とかそういうんじゃないの？」
ユウがしどろもどろになりながら言葉を紡ぐ。
「いやーだって……なぁ？　ルルーシュ」
「あぁそうだな」
「お前がカレンと一緒にいても、飼い主とペットにしか見えないぜ？」
ケモミミ、首輪、そしていつも一緒にいる。これらからユウはカレンのペットとして学園中に認知され始めていた。
ユウを拾ったのはカレン、世話係もカレン、そうなると飼い主は必然的にカレン、といった感じだ。
さらにカレンには非公認の親衛隊があるのだが、最初の頃こそカレンと一緒にいるユウに対し嫉妬とも、殺意とも取れる視線を向けてはいたが、最近はユウのことをカレンのペットだと認識し始めていた。故に最近はユウに対してはマークが薄くなっていた。
「お前の飼い主になりたいっていう女子って結構いたみたいだぜ？でも今回の件で”カレンが飼い主”ってのが確定しちまったもんだからがっかりさん続出らしい」
「何だろう……この感情……切なさかな……？　ふふっ、うふふふ……」
ユウは燃え尽きた灰のように真っ白になっていた。頭は元から白いが。

食事を終えて教室へ戻る途中、カレンはユウにある提案をしていた。
「ユウ……明日のお昼なんだけど……」
「ん？　どうしたの？」
「昨日のお礼にお弁当を作って持ってこようと思ってるんだけど……どうかな？」

「え？　僕に？」
「ええ」
　その瞬間、ユウは右手を握り絞め高らかに上げて吠えた。ただし可愛くではなく、雄々しくである。カレンはビクッと体を震わせた。
「……何それ」
「ん？　ウォークライだよ。前知り合いに教えてもらったんだ。使い時とか全然合ってないけど」
「そ、そう……」
　まぁ嬉しいんだろうなということはわかった。
「あぁそうだ。放課後時間あるかな」
「ええ、大丈夫だけど……？」
「昨日のこと。話せるだけ話すよ」
「！　……わかったわ」
　そうして昼休みは過ぎていった。

　放課後の屋上にペットと飼い主、ではなくユウとカレンが居た。
「さて……何から話したもんかな……でもその前に」
　ユウが端末を弄る。
「これでよしっと」
「何をしたの？」
「妨害電波だよ。他の誰かに聞かれると困るしね、念の為」
　盗聴等を警戒してＥＣＭを展開しているという。
「それじゃあ……疑問があったら聞いて。可能な限りは答えるよ」
　そこからカレンは疑問をぶつけていった。ストレイドのこと、体のこと。ユウもそれに対し一つずつ答えていった。
　ストレイドのことについてはユウ自身も詳しくはわからなかったのでそのことを正直に答えた。ＡＣであることに間違いはないのだが、自分の知っている物とは異なっている。その際に記憶の欠落についても話しておいた。記憶については話そうかどうか迷ったが、カレ

ンには知っておいてほしいと思い正直に話しておいた。
　ユウは自分が傭兵で強化人間であることも話した。
「強化人間って言うのは……」
「体をサイボーグ化したり、薬物投与や手術で体を強化された人間のこと」
　カレンは聞いているだけで泣きそうだった。普段は能天気なユウが、実際はとても辛い人生を送っていたことが不憫でならなかったからだ。しかしユウは自分で望んでこうなったことをカレンにはっきりと告げた。
「理由を聞いても……？」
「ＡＣに乗る為には必要なことだったからね……ハッキングが出来たのも傭兵として生きて行くのに必要だと感じたから教わったんだ」
　ＡＣに乗る為に体を弄る必要があった。だから強化人間になり、首にも機械を埋め込んだ
　――なら何故ＡＣに乗る必要があった？
　そう聞こうと思って……止めた。それは聞いてはいけない気がしたし、何より話している彼の顔が辛そうに見えた。
「もう一つだけ聞きたいんだけど……どうして私にそこまで話してくれたの？」
「もちろん色々知られてしまったからってこともあるけんだけどね……」

（君は彼女にどこか似ていたから……）

「私もね……あなたに隠していることがあるの……。近いうちに話せたら良いなぁ、とは思ってるんだけど……」
「待つよ。それで僕に手伝えそうなことがあったらいつでも言ってよ」
「……私は信頼出来ないような人間かもしれないわよ？」
「はっはっは！　何なりとお申し付けくださいご主人様！」
「もう……それやめてよ……ふふっ」

ユウは自分のことを正直に話したことで気分が少し軽くなり、カレンもユウのことを知れて少し距離が近くなったように感じた。
「それじゃあ今日は帰ろうか」
「ええ」
屋上から去って行くカレンの後ろを歩きながら思う。
（信頼出来ないような人間は……きっと僕の方だ……）

翌日、私は早めに起きて弁当を作って持ってきた。ユウの口に合うかはわからないので、そこが少し不安ではあるが……。美味しいと言ってくれるかな？　ちょっとドキドキしている。
教室でユウに会った際に弁当のことを伝えると、とても楽しみにしていてくれたようだった。尻尾があったら思いっきり振ってるんじゃないかってくらい。そこまで喜ばれるとこちらも嬉しくなる。
早くお昼にならないかと考えながら授業を受けていった。

ついにお昼がやってきた。天気が良かったので中庭で一緒に食べることになった。
「えー……それでは頂かせていただきます」
「そう畏まられるとこちらも緊張しちゃうわね……どうぞ」
お弁当の中身はからあげ、出汁巻き卵、ホウレンソウのおひたし、かぼちゃの煮付け、ごはんにはおかかをまぶしてある。
「大変美味しそうでございます」
なんか口調おかしくない？
「それでは……いただきます」
すると突然校内放送がかかった。
「ユウ・ヘイズ君！　生徒会室まで来て！　至急！　今すぐ！」
今まさに箸をつけようという寸前に放送で会長に呼び出しをくらってしまっていた。目に見えてしょぼりしているのがわかる。凄まじいまでのバッドタイミングね……。

「うぅ……ちょっと行ってくるね……。先に食べててくだされ……」
そういってユウは全力で走って行った。
私としても早く食べてもらって感想とか聞きたかったんだけどなぁ。一緒に食べれないのは残念ではあるけれど、先に食べておいてくれということだし食べながら彼を待つことにした。
結局昼が終わるまでにユウは戻ってこなかった。

ユウは次の授業にはギリギリでやってきていた。会長の用が何だったかはわからないけど長引いていたようだった。ということは昼食は食べずに午後の授業を受けるのか……。可哀そうに。
ユウは後ろの方の席なのでどういう状態かは窺い知ることはできないが、机に突っ伏して項垂れているのだろうな……。というか小さい唸り声が聞こえてくる。ユウ、うるさいわよ。
そして授業が終わった。今度こそ食べてもらいたいものだけど……。
「おーい、ヘイズ！　ちょっと手伝ってくれないか？」
今度は先生がユウを呼び出した。ユウの顔に絶望が浮かぶ。心なしか頭の耳も元気がなさそう。ユウが呼ばれた理由は、どうやら理事長との取り決めらしい。学費等は学園側負担の代わりに、ユウは学園側の手伝いをするという約束なんだそうな。異世界人のユウがお金の心配をする必要がないのはありがたいことだろうし、ユウも手伝いを積極的に行ってはいたのだが今回はそれが裏目に出たご様子。
またユウは弁当にありつけなかった。

授業の合間の時間は昼休み程あるわけではないので当然弁当を食べることは出来ない。結局全ての授業が終わるまで食べられなかった。
ようやくＨＲも終わり、これで食べれるかな？　と思ったら……。
「すまん！　ユウ！　少しだけでいいから手伝ってくれ！」
リヴァルに頼み事をされていた。ユウにとっては今日は厄日ね。こういう日に限って事ある毎に手伝いを要請されている。

あー……ユウの目が死んだ魚のように……。なんか可哀そうになってきた……。
「生徒会室で待ってるから……。ちゃちゃっと終わらせて来なさい？」
そういうとユウの瞳に少しだけ光が戻った気がした。

「や、やっと……」
会長達に今日の顛末を話していると、ふらふらしながらユウがリヴァルと共に生徒会室に入ってきた。だ、大丈夫かしら……？　結局朝食以降何も食べずに放課後を迎えてしまっているようだった。食事が大好きな彼には苦痛だっただろうに。今楽にしてあげるわ。……これ何か悪役の台詞みたい。
イスに座らせて弁当を出して渡す。
そこへルルーシュが入ってきて今のユウに言ってはならないことを言ってしまった。
「あぁユウ、すまんが手伝ってもらいたいことがあるんだが……」
ルルーシュ……！　あんた空気読みなさいよ！　ほら、ユウを見てみなさ……あー……ユウの瞳から光が消えてるわ……。
「……は……はははは……！」
「ユ、ユウ？　どうしたの……？」
ユウが突然肩を震わせて静かに笑い出した。俯いているせいで顔を見ることは出来ないが、ただいつもと雰囲気が違うことだけはわかる。
すると突然何時ぞやのようにイスを吹き飛ばすほどの勢いで立ち上がり叫んだ。
「どいつもこいつも！　手伝いに、次などあるものか！」
ユウが今まで聞いたことのないくらい低い声で怒鳴っている。というか怒っているの初めて見た。
皆オロオロしだした。ルルーシュも何が起こっているのかわからず狼狽えている。あんたのせいよ！　あんたの！

「どこまで貴様らは私をコケにするつもりだ!?　どこまで私のごはんを邪魔すれば気が済む!?」
わ、私？　一人称も変わってない!?　というか普段温厚な分すっごい怖いんだけど！
「貴様らも！　教師の連中も!!　私のごはんの邪魔をするものは、皆死ねばいい!!」
そう言って机に置いてあったおもちゃのハンマーを手に取った。

その後は大変だった。会長はニーナを、ルルーシュはナナリーを庇い、シャーリーはその傍でオロオロし、スザクとリヴァルが暴走するユウを何とか止めようとする。まさに地獄絵図だった。
「本当にごめんなさい……」
今はユウが全力で土下座中である。
「僕空腹に耐えるのはそれほど苦痛じゃないんだけど……。ごはんがあるのに食べられないと暴走してしまうみたいで……」
「口調とか一人称もおかしくなってなかったか？」
「ごめん……その間全く記憶にないんだ……」
そうよね……普段のユウからは想像もつかないような声と言葉遣いだったし。おもちゃのハンマー（所謂ピコピコハンマー）で襲い掛かってきたのはさすがに想定外だったけど。
「さぁ、また暴走する前にお弁当食べさせてあげなさいな」
会長に言われて弁当のことを忘れていたのに気が付く。
そうよね。また暴走されても困るし、何より可哀そうだし……え？　もしかして皆の前で弁当の感想とか聞かされるの？　凄い恥ずかしいんだけど。
「ようやく食べられる……いただきます」
ユウは一口食べて飲み込むと箸を置いてしまった。もしかして……美味しくなかったのかな……。
そう思っているとユウの目から一筋の涙が零れ落ちた。
「ユユユユ、ユウ!?　どうしたの!?　そんなに美味しくなかった!?」

「いや……そうじゃなくて……こんなにお預けを食らったのは久しぶりで……そのお預けの先に食べたこのお弁当が凄い美味しかったから……」
「ひゃあ～！」
会長とシャーリーが顔を赤くしている。そんな目で見ないで……すっごい恥ずかしい……。
その後ユウは無言で、そして夢中で食べ進め、綺麗に完食した。
「ご馳走様でした」
「お粗末さまでした」
なんだか胸の奥がじんわりと暖かかった。好きな人にご飯を食べてもらったらこんな気持ちになるのかな……。……なななな何を考えてるの私!?　落ち着け！　落ち着くんだ紅月カレン！
「とても美味しかった。ありがとう」
ユウはとても嬉しそうにお礼を言った。
「どういたしまして」
きっと私の顔も嬉しそうに笑ってるんだろうなぁ……あぁ……恥ずかしい……。
「なぁ～るほど～、こうやって餌付けするんですねぇ会長！」
「参考になるわねぇ～」
「え、餌付け!?　何言ってるんですか二人とも！」
こうして慌ただしくなってしまった一日は暮れていった。

（成程……胃袋を掴んでこちらに引き入れる作戦か……カレンも中々考えているようだな）
ルルーシュの勘違いを訂正してくれる人物は誰もいない。

０８話　黒の騎士団

「ふむ……」

クラブハウスの一室でルルーシュがイスに腰掛け思考に没頭していた。

――ユウ・ヘイズ。

異世界から来たという俄かには信じ難い人間。普段は温厚、すっ呆けたような性格で天然なのか？　と思えるような言動もしばしば。だが嫌いな人間には容赦がない。食に対しては真剣で先日暴走したが本人は覚えていないという。

そんな人間をカレンは騎士団に推薦しているが、はっきり言えば何故あいつを推薦したのか理解出来ない。普段のあいつを見ていれば誰でも思うことだ。では何故カレンはあいつをあんなに推す？　それについて自分なりに考えてみた。

まずあいつが来た時の場所。クロヴィスがシンジュクゲットーでイレブンの殲滅を命令した際にあいつはその場に居たらしい。そして生き残った。初めて来た場所で兵士に見つからずに行動することが可能だろうか。勿論クロヴィスの放送が入る寸前にこちらに来て見つかったという可能性もあり得るが……。逆にあれだけの包囲網の中でも見付からないように行動する術や、武器を持った集団に対処する方法を会得しているということも考えられる。

次にあいつの格好や体格。あいつが着ていたのはブリタニア軍のＫＭＦ搭乗者が着るようなパイロットスーツに似ていた。それから考えるに、向こうの世界の兵器のパイロットだった可能性が考えられる。さすがに何に乗っていたかまではわからないが。向こうの世界はコジマ粒子とかいう物質に汚染されているという話だから、もしかしたら防護服の可能性もなくはない。

体格についても見た目よりも筋肉は付いているらしい。背丈が近いので俺の服が着れるかと思ったが、少しきつかったようなので大きめの物を貸した。ただ鍛えているだけという可能性もあるが、格好と

合わせて考えれば軍属の人間ということが考えられる。
一番気になるのがあいつの口から出たいくつかの言葉。特に気になるのが企業連と呼ばれるものとそれに対する態度。あいつの話では世界を治めているのは企業だったはずだ。そして名称からして企業連とはそれらを統治している組織、もしくは企業のお偉方の集まり。そんな連中に対して敵愾心を見せていたり、発した言葉から考えるにおそらくそれらから逃げていた節がある。そこから導き出せるのは、一つは裏切り者として追われている。一つは犯罪者として追われている。首の機械のことを考えると実験体として捕らわれていたところを逃げ出した、ということも考えられないことはない。
他にもあいつは兵器等についてやたらと詳しかった。向こうの世界の常識と言ってしまえばそれまでだが……。
そしてカレンからは聞けなかったあいつの推薦理由。カレンにしか話していないのは世話になっている礼か、信頼したからなのか、それとも……秘密を知られたから……？　余程知られたくないことであれば、何としても情報漏洩を食い止めようとするはず。それこそ殺してでも。殺していないことを考えると、あいつが犯罪者という線は薄くなる。それともさほど重大な秘め事ではないのか、情が移って殺すのを躊躇っただけか、いずれにしても秘密とやらを聞かないことには判断しかねる。少なくともギアスのような記憶を操作する力がないのだけは確かだ。

あいつに対する考察はまだいくつかあるが、気がかりなのはこのあたりか……。
ユウが来てから一月程度……あいつを知るにはまだまだ時間が――。
一月……？　待てよ……そうだ……同じだ……。あいつが来た時と、あれが出現し始めた時期は。
あいつが初めて来た場所はシンジュクゲットー、そしてその場に現れた謎の黒いＫＭＦミスト。丁度日時も同じ。圧倒的な性能を誇っていたのもＫＭＦではなく異世界の兵器だから……？　ではホテル

ジャック事件の時は？　人質に生徒会の三人が捕らわれていた。ミストは態々その姿を衆目に晒してでもシャーリーを助けた。そして先日のテロ騒ぎ。あの時もカレンがいた……。自らの命とカレンの命を救うためにミストを使った……？　そしてそれをカレンに知られた……？　そう考えると辻褄が合う。パイロットスーツを着ていたのも、ゲットーで生き残れたのも頷ける。だがあいつが言うにはＡＣは確かＫＭＦの２倍ほどのサイズがあると言っていたが、ミストはＫＭＦと同程度のサイズ……。ユウが嘘を付いている可能性も考えられるが……。

もしあの機体が知られたくないことだとしたら、納得がいく。あれ程の物をブリタニアが放っておくとは思えない。だからカレンに秘匿しておくように頼んだ？　そしてカレンもあの機体があれば黒の騎士団の活動が有利になると考え推薦した……？

俺の考え過ぎか……？　だがユウがミストの搭乗者である可能性はゼロではない。

……もしもユウがミストの搭乗者であるならば……。

（是非とも手に入れたい駒だ……！）

ブリタニアとの戦いにおいて有利になるなんてものではない。考えていたプランを大幅に修正を加えることが出来る。勿論良い方向に、だ。

たとえ違ったとしても、あいつは騎士団の考えを肯定していると言っていたし、ゲットーの戦闘で二度生き残ったことを考えると場慣れしていることも大いに有り得る。どちらにしても得難い人材だ。

（いいぞ……！　運が向いてきた……！）

ルルーシュはとても嬉しそうにほくそ笑んだ。

「随分と嬉しそうだな？」

そんな嬉しそうなルルーシュを見て、ベッドの上でピザを頬張っている少女が話しかけた。少女は拘束具の外れた拘束衣を着ている。

「なに、素晴らしい手駒が手に入る可能性を思うとつい……な」

「何を考えているのかと思えばそんなことか……。それで、どんな奴

なんだ？」
　そんなことと切って捨てるわりには少女も気になるのか、興味深そうにルルーシュに尋ねた。
「なんでも異世界人だそうな」
「はっ、異世界人とはな……馬鹿馬鹿しいものだ。お前はそんなものを信じているのか、坊や？」
「黙れ魔女め……。お前のような得体の知れない奴がいるんだ、異世界人がいたとて不思議ではあるまい」
　少女はムッとしつつも、確かにそうかもしれないと納得した。
　異世界人とやらがどんな奴なのか気になるのか、珍しくピザを食べる手を止めルルーシュのＰＣに表示されている写真を覗き込んだ。
「ほう……こいつか」
「知っているのか？」
「何度か学園で見かけたな。まるで飼い犬みたいな風貌の奴がいると思ったが……」
　こいつもペットとして飼いたいとかいう口か？　ユウも色々な奴に目を付けられているものだな。
「こいつには注意しろよ、坊や」
「……何故だ？」
　言われずとも最低限ユウの言動は常に警戒はしているつもりではあるのだが。
「こいつを白い犬だか猫だと思っていると痛い目をみるぞ？　こいつは――
　――もしかしたら獰猛な白狼か白虎の類かもしれんぞ」
　そう言って少女は意味深に笑うと再びピザを頬張り始めた。
（あいつが……獰猛な獣……？）
　少女の言葉はルルーシュを更なる思考へと誘うには十分だった。

あくる日の放課後の生徒会室。全員が見守る中、ユウとリヴァルがチェスの勝負をしている。開始数分であるがもう勝敗がつきそうな状況にある。なんとか巻き返すかと思ったが呆気なくキングを取られて終了となった。
「いやーユウって……ほんっとに弱いな」
「だから言ったじゃん！　僕弱いって！」
涙目で吠える獣が1匹。
「ここまで弱い奴は俺も初めて見るな……」
ルルーシュも呆れ気味である。黒の騎士団に入るかもしれない人材なので戦略面ではどうかと少し期待して見ていたのだが……。チェスはてんで駄目らしい。
「何もそこまで言わなくても……くっそ、それもこれもメルツェルさんが悪い！　そうに決まってる！」
「誰かは知らないけど人のせいにしないの」
ユウに意見するカレンはまるでペットを叱る飼い主である。もはや上下関係が出来上がりつつあった。
ユウは涙ながらにメルツェルとの出来事を語る。
いつだったかメルツェルが息抜きにチェスをしないかと誘ってきたことがあった。チェスをやったことがなかったユウは最初は断ったのだが、教えてくれるというのでやってみることにした。
ルールも大体分かったので一度手合せしてみようということになったのだがそこで悲劇が起こった。
「相手の駒一つも取れずに全滅したんだ……」
これは全員がさすがに話を大袈裟に語っていると思ったのだが、あまりの落ち込みように事実だと気付いた様子。
「えーっと……それはユウが弱かったの？　相手が強かったの？」
「……両方……僕が弱すぎて相手が強すぎただけ……」
今にも泣きそうなユウはもうチェスは二度とやらないと固く心に誓った。

生徒会が終わった後、ユウとカレンは夕日を眺めながらぼんやりとしていた。
「ねぇ……ユウ」
カレンは意を決したように真剣な声と表情でユウの名を呼び、ユウもそれに気付き気持ちを切り替え次の言葉を待った。カレンはユウの方を向き手に持っていた1枚の紙を渡した。
「今日の22時頃に、その紙に書いてある場所に来て欲しいの。その時に……全て話すわ。勿論、来るかどうかはユウ自身に任せるけど」
そういうとカレンは返事を待たずしてその場を離れていった。渡された紙を見るとゲットーのとある場所の座標が書いてあった。
ユウはその場でしばらくぼーっと考え事をした後、自室として使っているクラブハウスの部屋へと向かった。

自室でごはんを食べ終えベッドで横になりながら考える。カレンに呼び出された座標はストレイドの傍のビルであることは端末で確認した。カレンが全てを話すと言ったのは、おそらく以前言っていた隠していることとやらだろう。
彼女が普通ではないのは分かっている。武術もそれなり以上の腕前、ゲットーでのテロ騒ぎの際も割と落ち着いていたし、自分の話をした時も憐憫の情を感じはしたものの終始一貫して僕の目を真っ直ぐ見て話を聞いてくれた。僕が傭兵と知っても変わらず接してくれたことは嬉しいかったが、それは彼女が堅気の人間でないことを示していた。おそらくではあるが彼女自身も戦いに身を置いているのではないかと思う。彼女はやたらと日本の現状や日本人の扱い等について僕の考えを求めてきたことから、日本側のレジスタンスにでも参加しているのではないかと思う。そして今日話すというのは多分それだろう。そして多分……抵抗活動に参加してほしいと言われると思う。
確かに僕は日本という国が好きだから、この世界の日本という国の

現状を看過することは出来ないし、したくない。組織に所属することで換装や補給等の面でも随分楽になるだろう。でもそれは良いように使われるだけではないだろうか？　ＫＭＦと比べてＡＣの性能は圧倒的で、そんな戦力が自分達に加われば日本の奪還も夢ではない。

勿論彼女が僕を利用しよう等と考えているとは思わないが、だからと言って彼女より上の人間がそう考えていないとは限らない。今日話を聞けばすべてがわかることではあるが……。

『良いか、ユウ？　覚えておけ――』

……そうだったね……ごめんセレンさん、本当に色々忘れちゃってたみたいだ。

彼女の一言を思い出しただけで迷いは吹っ切れた。やはり僕の中で彼女の存在は大きいようだ。

忘れてたけどね……。

シンジュクゲットーのとある区画、辛うじて崩壊を免れているといったような感じのビルの前で、カレンが瓦礫の上に膝を抱えて座り俯いていた。それもそのはず、既に２２時を２０分も過ぎているのにユウが来る気配がない。ユウの身に何かあったとは思い難い、ということは来ないことを選んだのだろう。ユウが来ることを信じて疑わなかったカレンにはショックが大きかったのか目から一筋の涙が零れ、そのことにカレン自身が驚いていた。

（なんでこれだけのことで……）

今日他のメンバーにユウを連れて来ることは伝えた。彼が来ることを疑問視しているメンバーもいたが必ず来ると説き伏せた。だが結局来なかった。自分が勝手に思い込んでいただけなので思いが裏切られた、というのはおかしいことであるが、やはり信じていたのにこのような結果に終わったのは辛かった。

（結局……私の独り善がりだったのかな……）

結局３０分になっても来なかった。カレンも諦めて皆の元に戻ろうかと考えた時に足音が近づいてきた。顔を上げると全力で走ってきたのか膝に手を付き肩で息をしているユウがいた。
（来てくれた……）
また涙を流しそうになったところを必死で抑え、半分笑いながら、半分恨めしそうに話しかけた。
「随分と重役出勤じゃない」
「ほんっとーにごめん！　……ベッドで考え事してたら寝てた」
カレンは色々深く考えていた自分が馬鹿らしくなってしまった。やっぱりどこまで行ってもユウはユウだった。
「私の感傷を返しなさいよほんと……」
「ごめんね。泣かせちゃったみたいで」
「なっ、泣いてないわよ別に！」
（なんでこういうところは鋭いのよ……ケモノのくせに……）
「その格好……やっぱりあの時いたのは君だったか。ゲットーの倉庫でブリタニアの装甲車に追い詰められていた時に居たよね」
「気付いてたんだ……。うん、あの時はありがとう。御蔭でこうしてちゃんと生きてる」
そう言って見せるようにクルッと一回転する。その動作を見て心の中で可愛いを連呼する獣が1匹。緊張感の欠片もない。

カレンについて来るように言われビルの中へ入って行くと地下へ向かう階段があり、それは地下道へ続いているようだった。中は店があったり人が生活しているわけではないので当然暗く、カレンが懐中電灯で照らしながら進んで行き、ユウも後ろから無言でついて行く。
しばらく歩くと天井が崩落して月明かりが差し込んだ明るい開けた場所に出た。そこに黒い服に身を包んだ複数の男女がおり、特に目を引いたのはマントを身に纏いフルフェイスのマスクで顔を隠した一人の男だった。
「例の人物を連れてきました」

カレンが敬語でマスクの男に話しかけた。
「ご苦労だった、カレン。そして……初めまして、ユウ・ヘイズ」
（なぁ～るほどね。僕の想像は大体当たってたけどこれは予想外だわ）
「初めまして、ゼロ。僕のことを知っているとは驚いたよ」
河口湖以降、テレビで見ない日がないくらい取り上げられていたゼロ。ユウはまさかカレンの所属が黒の騎士団だったとは思いもよらなかった。
「それで……彼女はどこまで話してくれたんだい？」
ユウは普段のように能天気に振舞ってはいるが目が笑っていなかった。
「心配する必要はない。彼女は君との約束を守り我々には何一つ漏らしていない」
それを聞いたユウが少し安心したように見えてカレンもほっとした。
そしてカレンが本題を口にした。
「私の本当の名前は紅月カレン、日本人よ。あなたには是非とも、私達”黒の騎士団”に入って欲しいと思ったの」
「それはやっぱりあれがあったから？」
「それもあるわ……だけど、あなたと話して、あなたと一緒に行動して感じたの。あなたにも私達と一緒に戦って欲しいって。あなただって今の日本の状況を良く思っていないはずよ。あなたには日本を救うだけの力も実力ある。だから私は今日あなたをここへ呼んだの」
「我々は君の秘密とやらは知らない。だから何故カレンが君をここまで推薦するのかはわからないが、彼女の気持ちに嘘偽りはないことは君にも伝わったはずだ。ユウ、我々に君の力を貸しては貰えないかな。……言っておくが、もし拒否するというのであれば我々も秘密を守る為の処置を講じねばならん。不本意ではあるがね」
「わかりやすい脅しをどうも……。それじゃあ最初から僕には拒否権はないじゃん」
そう言いながらもユウの顔は笑っている。

「条件付きでならその誘いを受けるよ」
「条件……？　何だ、言ってみると良い」
「一つ、僕は傭兵だ。タダで働く気は毛頭ない」
「なっ!?　テメェ！　金でもせびろうってのかよ!!」
　黒の騎士団の一人、玉城がユウの条件に噛付いた。玉城は短気な性格であるため、度々周りと衝突することがあった。
「師の言葉だけどね。『傭兵がタダで働くな』　そう教えられたんだ」
『良いか、ユウ？　覚えておけ。傭兵がタダで働くな。もしタダで働くならそれは――だけだ』
「それはつまり自分には報酬を受け取るだけの価値がある、ということか」
「報酬分くらいはしっかり働くさ」
「テメェがそこまで役立つようには見えねぇけどなぁ！」
　実際のところ、ユウの事情を知らない騎士団の面々にはただの学生にしか見えない。そんな少年が一体何の役に立つというのか。
「ユウ、あれのこと……もう話してもいいんじゃない？」
　カレンに言われユウはしばらく考え込んだ後、端末を弄り始めた。皆何をしているのかわかっていない。
　だが次の瞬間、ユウの後ろに空から何かが降ってきた。風圧で砂煙が立った為何が落ちて来たかは見えなかった。煙が晴れた瞬間にユウとカレンを除いた全員が息を呑んだ。煙の中から赤い光と共に黒い巨体が姿を現した。
「ミ、ミミミ……ミストォ!?」
「これで満足？」
　カレンが衝撃で吹き飛ばされ転がっている玉城に向かって話しかけた。
「これが僕の戦力だよ。……それともこれじゃ不満？」
「いや。ではその条件を呑もう」
（不満などあるものか……！　最高の戦力だよ……お前は！）

他の騎士団メンバーは度肝を抜かれ呆然と立ち尽くし、夢を見ているのかと自分の頬を抓る者もいた。恐ろしいほどの戦闘能力を誇るあのミストが目の前にいる。
「すっげぇ……本物だよな……」
「中に誰か乗っているのか？」
「いや、ここまではリモートコントロールで来させた」
「遠隔操作かよ……ってことは異世界人ってのは本当なのか……？」
カレンが新しくメンバーに加えたいという人物が異世界人だと聞いた時、皆笑っていた。異世界などあるはずがないと思っていたから当然だ。しかし小型端末を弄るだけでＫＭＦを操作できる技術などは聞いたことがなかったので強ち嘘ではないのかもしれないと思い始めていた。
「見惚れてくれるは良いけど、まだ話しは終わってないよ」
水を差すようにユウは他の条件を話し出した。
機体の弾薬の調達や修理の費用は騎士団持ちとすること、機体を置いておく場所を設けること、機体の整備を手伝うこと、自分が居ない時には機体に一切触れないこと、
そして機体を使う時以外は自分は騎士団の活動には話し合いを除いて参加しないこと、等の条件を突き付けた。
「機体を使う時以外は参加しないというのは？」
「僕こんな見た目だから姿を見られるとすぐ身元ばれるしね。あ、報酬は任務に参加しない時の分はいらないから」
（ふむ……クリア出来ない条件はなさそうだな）
資金はギアスを使えばいくらでも確保出来るし、何より自分達の活動を肯定して資金提供してくれる者達もいたので問題ないと判断。機体についても問題にはならないだろうと考える。
「良いだろう、条件を呑もうじゃないか」
そう言うとゼロは手を差し出したが、ユウはその手に応える前に最後の条件を突き付けた。
「最後に……絶対裏切らないこと」
そう言ってユウはゼロと握手をした。

「まさか……裏切るなどしないさ」
「そう願っているよ。もし、仮に、万が一、裏切るようなことがあれば……」
そう言ってユウはにっこりと笑った。
『つまらない裏切りを後悔させてやる……良い見せしめだ』
昔、任務を受けた際にＡＦのスティグロが共同任務を放棄しこちらに攻撃してきたことがあり、彼女の言葉に従いこの世から消してやったことを思い出した。あの時のセレンさんの怖さったらなかった、等と考える。
「歓迎しようユウ。ようこそ黒の騎士団へ！」
こうしてユウは黒の騎士団の一員となった。
戦力の大幅な増強に皆も喜びカレンもユウが入ってくれたことに心の底から喜んでいる中で、ルルーシュは自分にギアスの力を与えた少女、Ｃ・Ｃ（シー・ツー）の言葉を思い出していた。
『もしかしたら獰猛な白狼か白虎の類かもしれんぞ』
戦力としては申し分ない。だがどうしてもあの言葉が不安の種となる。
（あいつの言葉が当たっていないと良いが……）
今は自分の心配が杞憂に終わることを祈るしか出来なかった。

０９話　母

騎士団入りしてから少し後、訪れましたは黒の騎士団のアジト。なんでも金持ちの貴族がくれたという大型の車両をアジトとして使っているらしいけどこちらの貴族は随分太っ腹っすね。車自体を大きな倉庫に入れてあるので見つかる心配もなさそうだし、ストレイドもしまえそうだった。いいねいいね、適度に広いから今までの武装もそのうち運び込もう。他にもＫＭＦが何機かいるので換装も手伝ってもらえれば完璧。ようやく背部や四肢のアセンブル解禁、好き放題出来るよ。

機体から出ると皆ストレイドをじっと見ていた。

「珍しいのはわかるけどそんなに見ないでよ、この子恥ずかしがり屋なんだから」

「彼結構適当なこと言うけど皆あんまり気にしないでね」

カレンは隠す必要がなくなり本来の自分を出してくれていて嬉しい反面言葉に手厳しさが増した気がする。

「ちなみに今のは本当だったりする」

「……それも冗談よね？　お願いだから冗談だって言って」

トーラスの変態共曰く、うちのＡＲＧＹＲＯＳたんは恥ずかしがり屋な女の子なんだってさ！　全然わかんないけどね！　でもあいつらにはわかるらしいね、流石変態。あ、女の子なんだからデカいとか太いとか言っちゃだめだよ？　ちなみに銀翁のはオカマだって聞いた。アサルトキャノン積んだ巨体のオカマ……、ノーコメントでお願いします。

それにしても皆ずっと見てるな。じろじろ見られるのもかわいそうだからステルス起動させちゃる。いきなり機体が消えたから皆びっくりしてるね、にゃはははは。

車両の中は2階部分もあるくらい広く、テレビとか冷蔵庫もあったりした。何この素敵空間、貴族がくれたものだけあって想像以上に居心地が良い。そんな車内に心惹かれながらも騎士団メンバーと自己紹介していきました。皆僕の容姿やら異世界やらに興味があるみた

いで色々聞かれた。異世界人を自称するような変人だからもっと入団に反対されたり邪険に扱われるかと思いきや、皆意外とフレンドリーだった。カレンの推薦があったり、2度のゲットーでの出来事等が評価に繋がっているご様子。僕に噛付いてきた玉城さんも、騎士団に入ると普通に接してくれた。どことなくダン・モロと同じような雰囲気というかにおいが漂う人物である。この人とは思いの外仲良くなれそうな気がする。色々と話しているとゼロが来て次の作戦のことについて話し始めた。

「リフレイン？」

どうやら日本人の間に蔓延している違法薬物らしいく、なんでも「幸せだった過去に戻ったような気分」になるんだそうな。今現在苦しい生活を強いられている日本人には売れそうですね。今回の任務では取引現場に強襲をかけるということらしく、ＫＭＦとの戦闘になるかはわからないが僕もストレイドで参加するようにとの御達しだった。今回の戦闘を試金石として今後の作戦を決めるのかな。作戦は数日中に決行ということで今日はそんなところでお開きとなった。

帰る前に武装だけ運び込んでいると、そんな姿を見てゼロとカレン、騎士団の前身となるグループのリーダーをしていた扇さんが武装について聞いてきた。なんでもＫＭＦでこれらの武装を使うことは出来ないか、ということらしいのだが……。

「無理でーす！　あ、別に意地悪で言ってるわけじゃないですよ？ＫＭＦについて詳しく知ってるわけじゃないから何とも言えないけど、はっきり言ってＫＭＦは脆過ぎる。あんなので武装使ったら反動で機体ごと吹っ飛びますよ？　それにレーザーブレードとかも機体からのエネルギー供給を必要とするものだから、ＫＭＦだとエネルギー供給が追い付かないか足りないんじゃないかなぁ」

カレンも扇さんも反動で機体が吹き飛ぶ想像でもしたのか真っ青になっていた。そりゃ相手をぶっ潰す武器でこちらが死んだら笑えないよね。

「反動の軽い武器や実体ブレード等も不可能か？」
勘違いしがちだけど実体兵器でもエネルギーは一応消費される。まぁ一応稼働してるからね。そのエネルギーは機体の腕を通して武器に送られるのでそういう構造がないとまず使えないし、たとえ使えたとしてもエネルギーをどれだけ食うかわからない。ＡＣにとっては微量でも、ＫＭＦにとっては消費がデカい可能性が高い。そういうことを説明しておいた。
「そういう話を聞くと、異世界との技術の差を実感するわね」
「変態企業様々だねぇ」
「……変態企業？」

夢を見た。とても懐かしい夢だ。僕は小さな頃から泣き虫で、些細なことですぐ泣いたりしていた。そんな僕が１０歳の頃、セレンさんにリンクスになりたい旨を伝えた時、彼女は複雑そうな顔をしていた。喜んでいるような、悲しんでいるような、怒っているような、諦めているような……何とも言えない表情だったことを覚えている。
その日からセレンさんによる過酷な訓練が始まった。今ならわかるけど、あの過酷さは僕に諦めさせようとしていたのだと思う。
『ほらどうした、もう音を上げたのか？』
１０歳の僕にはとても辛い訓練に、あまりにも辛辣な言葉。それは日を追う毎にきついものとなって言った。
『その程度でよくリンクスになりたいなどと言えるな。ネクストに乗るからと言って生身で戦う必要がないわけではないのだ。それに……お前自身がやって出来ないことを、ネクストに乗って出来ると思うか？』
僕は泣いた、毎日、毎日……。でも一度たりとも諦めたり、弱音を吐いたりしなかった。したくなかった。
『まぁいい、今日はここまでだ。シャワーを浴びてこい』
でも……彼女は厳しいのと同時に、優しかった。

『……？　どうした、早く――はぁ……まったくお前は』
『フフッ、母様に慰めてもらいたいのか？』
彼女は優しく微笑み頭を優しくポンポンと叩いてくれた。
セレンさんは頑張れば褒めてくれた。怪我をすれば優しく治療してくれた。訓練の後には美味しいご飯を作ってくれた。それが嬉しかった。
だから僕は心に誓ったんだ。絶対にリンクスになって、彼女の願いを叶えると。

三日後の夜、騎士団が使用している倉庫で機体の調整を行っている。今回はカレンの使うグラスゴーとストレイドで先行して強襲をかけ、残りをメンバーが一掃する作戦。屋内戦か……レーザーブレードは良いとしてもバズーカだと危ないな。何か良い武装ないかなぁ～っと……。
Ｒ．Ａ．ＵＮＩＴ：ＣＷＧ―ＭＧ―５００
このマシンガンが良さそう。ノーマルの武装が何故あるのかはわからないけど、威力を確かめる意味でもこれを使ってみよう。……マシンガンなら以前のような失態はないはず。……あ！　しまった……屋内で武装呼んじまった。やばい天井に穴が開いちゃう。と思ったら控えめな音を立ててコンテナが室内に落ちたきた。……え？　どっから？　天井に穴ないしどっから来たの？　皆も驚いて見てるけどこっちも驚きだよ……。ますますわけがわからなくなってきた武装の転送システム。といっても解明のしようがないので諦める。
調整を終えると作戦開始時間が迫ってきたので、場所まで移動。いよいよ僕のこちらでの初仕事が始まる。
倉庫が立ち並ぶ区画の一画、ある倉庫の影で機体から顔を出し待機中です。ゼロは別行動をとっているらしく指示があるまで待機となった。

「調子はどうだ？ユウ」
「いつもと変わんないですよ、ふつーふつー」
「流石は異世界の傭兵って感じだな。若いのに俺達より落ち着いてる」
　そんなに褒められると照れるなぁ。でもリンクス戦争当時には僕よりも若いリンクスがいたって話を聞いたことがある。１３歳だったかな？　リリウムでも１４か１５だったはずだから随分若いリンクスがいたものだ。
「……」
　カレンがやけに静かなので様子を窺うと調子が悪いのか表情が暗く、俯いて考え事をしている。
「カレンどうしたの？　お腹空いたの？」
「大丈夫……何でもないわ……」
　珍しく突っ込んでこず、ほとんど上の空状態だった。……重傷だな、これはちょっと危ないかもしれない。
　真面目な声でカレンに話しかける。
「カレン、今日はもう帰って寝なさい」
「え……？　何を言って……」
「戦場で最も足枷になるのはね、戦えない仲間だよ。どうでもいい人間なら見捨てればいい、でも仲間は見捨てるわけにはいかない。戦えない仲間を庇いながらの戦闘は心身ともに相当な負担となる。君は自身も仲間も殺す気？」
　だから戦場では敵を死なない程度に傷を負わせたりする。ＡＣがまだ存在しない昔の戦場では地雷等で死なない程度に怪我をさせ、その兵士一人に対し数人の兵士を割かせるということもしたらしい。
「おいおい……何もそこまで言わなくてもよ……！」
　他のメンバーが止めに入るが無視して言葉を続ける。
「君がプライベートで何があったかは知らない、でもそれを戦場に持ち出さないでほしい。必要なのはいかに殺すか、守るか……そういう思考だけで十分だ。私情を持ち込めば死ぬのは自分達だよ。頭を切り替えろ、それが出来ないなら戦場に出てくるな。出てこなければ死

なずに済むし、こちらも仲間の死を見ないで済むから。それに……自分のせいで仲間が死んだら……簡単に耐えきれるものではないよ」

『もっとだ……もっと速く……攻撃する暇を与えるな……殺される前に殺せ……全部……そうだ、逃げる奴も全部だ……』

頭を振って記憶を片隅に追いやる。そこへゼロの合図である発光が見えた。

「……ゼロの合図だ。……いける？」

「ありがとう……いけるわ」

カレンの顔には先程のような迷いは見られなかった。キャラじゃないことはやるもんじゃないな、一気に疲れた。

僕が先行して目的の倉庫の前へと行き、レーザーブレードを使ってシャッターを焼き切って中に入ると作業中の奴らがこちらを見てギョッとしていた。その後に歩兵組が中に入りマシンガンを使って殲滅していく。カレンは先行し残存勢力が居ないか確認に向かう。周囲にはビンが入った箱が大量に置いてあった。

これがリフレインねぇ……幸せだった頃の記憶なんか見て何になるんだかさっぱりわからん。美味い飯の味を思い出したって腹は満たされないだろうに……何故そんな無駄なことをするのか理解に苦しむ。前を向いて歩かないとご馳走も見逃すっての。それは僕が戦える人間だから思うことなのか？　自分の居た世界とは全く違う世界。場所が違えば考え方も違う、それはわかってはいるのだけど……。

周囲を警戒していると銃声と爆発音が聞こえた。建物の奥……カレンの方へとブーストを吹かせて向かうと、そこにいたのは白いカラーリングに肩やコクピット後方が赤、青の２色で塗られたＫＭＦ。

「ナイトポリス!?　グルってことか！」

ナイトポリス……警察のＫＭＦか。戦闘を開始したのはつい数分前、通報があったにしては早すぎる。ということはこの件に一枚噛ん

でいた？
　あらわれたナイトポリスのＫＭＦは３機、いや、１機は通常のグラスゴーか。内１機は右腕が破損しているカレン機を追いかけ始めた。しかしカレン機の挙動がおかしい……左手には誰か抱えているようだが……。カレンの救援に回ろうとするが残った２機が邪魔だ。今は目の前の邪魔なごみ２つをさっさと消してカレンに加勢しよう。
　足元にはリフレインでトリップしている日本人が多数、巻き込まないようにしながらマシンガンを片割れに打ち込む。ノーマル用だとさすがに威力が足りないらしく、数発では沈まなかったところを見るとやはり耐久力はＭＴ程度にはあるらしい。敵も反撃に撃ち込んでくるが弾丸は跳弾しているので避けるまでもないし、避けたら誰かに当たってしまう。弾丸を真っ向から受けながらフルオートで撃ち込みようやくグラスゴーを破壊する。
　撃ちながら逃げ回るもう１機を追いかけ、マシンガンで武器を持った右腕を破壊する。一気にスピードを上げブレードを使って後ろから斬りつける。ナイトポリスは上半身と下半身に分かれ、その勢いのまま転がって壁に激突し爆散した。貴様のような悪徳警官には似合いの最後だな。
　カレンを援護する為急いで銃声の聞こえる方へ行くとカレン機は所々破損して倒れており、その後ろから今にもナイトポリスがナイフを使って止めを刺そうとしていた。瞬時にＧＢを吹かせ横から思いっきり蹴飛ばしてやった。敵は回転しながら吹き飛び、傍にあった棚に追突し棚と共に倒れ沈黙した。
　女の子を後ろから挿すなんて卑猥なマネ……おっと字が違う。後ろから刺すなんて卑怯なマネを紳士たる僕が見逃すと思うか間抜け。お前は閻魔様にでも後ろから刺してもらってろ、くそが。ナイトポリスは胴体部分がグシャグシャに潰れていたので生きてはいないだろう。中の状態を考えると検死する人達には同情する。
　カレン機は倒れながらも女性を守るような状態になっていた。機体はおしゃかになったけど、カレンも女性も他の皆も無事だったし気にしない気にしない。

「うわぁ……こりゃひでぇな……」
潰れたナイトポリスを見て皆が顔をしかめていた。そんな姿をよそに機体を降りてカレンの傍に行くと先程の女性が座り込んでいた。
「この人ね……私のお母さん……」
腕に抱えていたのは母親だったのか。挙動がおかしかったのも納得出来た。
「ユウの言った通りだったね……守りながら戦うって……とてもきついし……もし失ったらと思うと……」
「大丈夫……僕が守るから。君も、皆も、全員……」
「ユウ……」
「なーにやってんだよお前ら！　ほら、集合しろ！」
空気読んでよ玉城さん……。

集まった先にあったのは大量のリフレイン、これをどうするかということになり、話し合った結果ゼロの案で焼却する場面を録画し人々に曝すそうということになった。
……過去にトリップする薬物、リフレイン……。これを使えば僕の失くした記憶も辿ることが出来るだろうか……？　少しずつ取り戻していけばいい、それはわかっているのだがどうしても記憶の先で彼女がどうなったのか気掛かりでならない。僕が彼女に依存していたように、彼女も僕に依存している節が多少みられるからだ。
「これがあれば……僕の記憶も戻るのかな……」
つい口から考えが漏れてしまったその瞬間、乾いた音と共に頬に痛みが走った。
「馬鹿なことを言わないで……！　お母さんだけじゃなくて貴方まであんなことになったら……！　これ以上私に苦しめというの……!?」
カレンは目に涙をため本気で怒っていた。今の今まで自分の母親のあんな姿を見ていたのに、意図したものではないとは言え僕の言葉はあまりにも不謹慎だった。先程とは打って変わり、今度はカレンが皆の制止を振り切って僕に説教した。

「記憶の一部がなくて焦るのはわかる……でも、こんな危険な方法でそれを取り戻そうとするのは止めて……！　苦しむのはあなただけじゃないのよ……！」
「ごめん……失言だった」
そうだよね……こんな方法で記憶を取り戻したって、周りも自分も不幸になるだけだ。記憶が戻らないことに対して知らず知らずのうちに焦っていたのだろうか。
……やっぱりあなたが居ないと僕は駄目なのかもしれない……セレンさん……。
頬と心に痛みを残して初めての仕事は終了した。

今日の作戦は成功に終わった。
ユウの使用する異世界の兵器、ＡＣ。想像を遥かに超える性能を有しているようで、たった1機で3体のＫＭＦを呆気なく破壊してしまった。おまけに機体にダメージは見受けられず、エネルギーも機体内部で作り出しているらしく、破壊されない限り永久に動き続ける。攻撃性、耐久性、そして機動性においてＫＭＦを圧倒している。これは想定していたより楽にブリタニアを潰すことが出来るかもしれない、そう考えるとつい頬が緩んでしまう。
注意すべきはユウの心の弱さか。あいつはどうもメンタル面で安定していない。
向こうの世界の家族と会えないことに泣いたりしていたという話を以前聞いたが、あいつは家族に精神的に依存していたのだろう。その心の支えとなっている家族と会えないことから不安定な精神になってしまっている。記憶が一部欠落しているという話も先日アジトで聞いたが、それが拍車を掛けているのではないだろうか。現に今日の作戦で手に入ったリフレインを使って記憶を戻せないかと考えていたらしい。これについては早めに策を講じておくべきだな。
もう一つ注意すべきは敵に対する異常なまでの攻撃性と味方や身

内を身を削ってでも守ろうとする意志。作戦前のメンバーとの会話は無線で聞いていた。あいつは戦いに私情を持ち込むなと言っていたが、あいつの方こそ私情を持ち込んでいる。河口湖でも自分の首を絞めるとわかっていながら、その身を衆目に晒してでもシャーリーを助けた。おそらく今後も味方の救助を優先すると思われる。勿論使える駒は一つでも多い方が良いので助けられる命は助けるべきではあるのだが、もし優先すべき事項が他にあるにもかかわらず救助を優先するような事態になれば作戦をお釈迦にしかねない。かと言って下手にあいつの怒りを買うような言動をすれば、あの敵意の矛先をこちらに向けて来ないとも限らない。

……なるほどな……確かに従順なペットではなく猛獣だな、俺にとってはこれほど扱い辛い奴もそうはいまい。だが……必ず飼い慣らしてみせるぞ。

ナナリーの為にも……ユウ、お前には悪いがせいぜい利用させてもらおう。

後日カレンの付き添いで病院に搬送されたカレンの母親の見舞いに来た。薬の後遺症があるらしくまともに喋ることが出来ず、回復にもかなりの時間を要するとのことだった。また、禁止薬物を使用したことによる罪状として懲役２０年ということらしい。カレンは母親の前で、母が刑を終える前に必ず世界を変えてみせると誓った。

その時、カレンの母親が彼女の手を握り呟いた。

「頑張れ……カレン……私の大事な娘……」

その一言でカレンは涙を流し、母親の手を強く握った。

「うん……私……頑張るから……！　頑張るからね……お母さん……！」

母親……か。

『母様に慰めてもらいたいのか？』

会いたいな……。

１０話　泣き虫けもの

気が付くと辺り一面真っ白な、周囲を見渡しても全く同じ景色が延々と続いている空間に佇んでいた。歩き回っても全力で走っても一向に景色は変わらず、何かを見つけることも誰かに合うこともなかった。時計がないからどれだけ時間が経ったのかもわからない。１時間経った気もするし、１０分と経っていないような気もする。何もない、誰も居ない、今いる場所も、何をしていたかも、何処へ行けばいいかもわからない、そんな空間。

誰も居ない空間で自分一人だけ、そんな状況に淋しさと恐怖を感じ涙が出てきた。膝を抱え子供のように泣き続ける。こんなことをしていても何にもならないとわかっていても涙は止め処なく溢れてくる。どれくらい経った頃だろうか、背中に人の気配を感じて振り返るとまた涙が溢れた。そこにいたのはずっと会いたかった相手、セレン・ヘイズその人だった。急いで立ち上がり彼女へと駆け寄ろうとしたが、いくら走っても一向に彼女へ近づけない。名前を呼ぼうにも、まるで喉に何かが詰まっているかの如く声が出ない。それを彼女はじっと見つめていた。何かするわけでも喋りかけてくるわけでもなく、あの時と同じように複雑そうな表情でじっと見ていた。近くにいるのに、目の前にいるのに、凄く遠く感じられた。

しばらくすると彼女は振り返り、離れて行ってしまった。必死に追いかけても追い付くどころか、距離は離されるばかりでどんどん彼女は小さくなっていく。

（嫌だ、行かないで！　ボクを一人にしないで！　ずっと傍にいてよ！）

力の限り叫びたかったがいくら頑張ったところで声は出ない。結局、彼女は振り返ることなく消えてしまった。

その場に力なく座り込み、また泣いた。

（一人に……しないでよ……）

目を開けるとそこは自室として使っているクラブハウス、どうやら今のは夢だったみたいだ。目を擦ると濡れており、夢を見て泣いていたらしい。
起き上がって首輪を付けながら外を見ると生憎の雨。
こんな憂鬱な朝は生まれて初めてだ。

授業を受けても、食事をしても、憂鬱な気分は晴れなかった。仲の良い生徒会のメンバーと話している時はまだマシだったものの、重苦しい気分は変わらなかった。結局今日の生徒会にも参加せず、ベッドに寝転んでボンヤリと天井を眺めていた。
おかしいなぁ……。この世界でやっていこうって、前向きに生きていこうって決めたのに……、彼女との暮らしを思い出せばすぐこれだ。
ここでの生活は嫌いではなく、むしろ好きだ。皆優しいし、ご飯も美味しいし、戦力としてとはいえ僕を必要としてくれている。でも皆本当の僕を知ったら？　戦うことが出来なくなったら？　戦う必要がなくなったら？
きっとその時僕の居場所は……何処にもない。きっと傍に誰も居ない。
ドアをノックする音で我に返って起き上がり、扉を開けるとルルーシュが居た。
「いきなりですまないが……ナナリーのことを少し見ておいてもらえないか？」
なんでもいつもナナリーの傍にいるメイドの咲世子さんが出掛けており、ルルーシュもこれから用事があるという。ナナリーを一人にしておくのも心配なので僕に頼みに来たそうだ。
「咲世子さんが帰ってくるまでいいんだ。頼めるか？」
はっきり言って今はそんな気分ではないのだが、多少は気が紛れるかもしれないので引き受けた。
今はルルーシュ達が住んでいる部屋でナナリーと一緒にのんびり

折紙なんかをしている。この子は目が見えないというのに器用に鶴を折っていた。
「日本では鶴を千羽折ると願いが叶うと聞きましたが、本当なのですか？」
　ナナリー、少し勘違いしているよ……。叶うのは願いじゃなくて病気快癒や長寿である。でもそれを指摘すべきかどうか……。だってナナリー凄い良い笑顔で僕に聞いてくるんだもん……。でもあえてここは心を鬼にして。
「あーっと……願いが叶うというのは聞いたことがないな……」
「そうなんですか……」
　あぁ、見るからにしょんぼりしてる……。
「でも怪我や病気が治るのを祈りながら折るとそれが叶うってのは聞いたよ。それにいくら同じ日本とはいえ、僕の世界とこの世界は違うから、もしかしたらこちらの世界では願いが叶うかもしれないよ」
「そうですね……そうだと良いですね」
　再び顔に笑顔が戻った。良かった良かった。じゃあ僕はナナリーの目が見えるようになるのを祈って折ろうかな。
　ナナリーとお話しながら折っていると、また昔のことを思い出し始めた。
　そういえば小さい頃リリウムと一緒にこうやって折紙したことがあったなぁ……。思えば彼女は僕にとっては妹のような存在だった。初めて会ったのは6歳の時だったかな。彼女は1つ下で、その時からとても行儀作法が身についており敬語で話していた。王の爺さんの教育の賜物なのかどうかは知らないけどね。
　結局僕はＯＲＣＡに行ったから彼女とは袂を分かつことになってしまったけど、彼女はどうなったのだろう。記憶がないせいで不安でならない。もしかしたら、僕はこの手で彼女を――。
「ユウさん……どうかなさいましたか……？」
　ナナリーが心配そうに訪ねてきた。
「え……？　何が？」
「今日はいつもと雰囲気が違いましたし……今も少し、その……辛そ

うです」
本当に彼女には驚かされる。見えていないはずなのに、ただ一緒にいただけだというのにまるで見透かされているかのように僕の状態が気付かれていた。誰にも気付かれないように努めていたはずだったんだけど……。きっとこの子は目が見えない分人の心に敏感なんだろう。
来た時は慌ただしくて考えている余裕がなかったこと、落ち着き始めた頃から昔の夢を見始めたがあまり考えないようにしていたこと、最近では昔のことを頻繁に思い出しどんどん気分が沈んでいっていること、そんなことをナナリーに話した。当然ながら記憶の欠落や騎士団等の出来事については話していない。
「ご家族のこと……思い出されていたのですね……」
「うん、正直……辛い。会えないこともだけど、心にぽっかり穴が開いたような……何を入れても埋まらない、深い深い穴が空いてるみたいだよ……ははは……」
それっきり会話もなくなり、5分もすれば咲世子さんが帰ってきたので、僕は自分の部屋へと帰った。
ナナリーにはちゃんと謝罪の言葉と感謝の気持ちを伝えておいた。胸の内を吐き出せて、多少だけど心が軽くなった気がした。

最近のユウはどこかおかしい、そう感じ始めたのは母親のお見舞いの後からだった。と言っても口を開けば適当なことを言ってるし、ご飯はしっかり食べるし、能天気に笑っているところはいつもと変わらない。だけど親しい人達、特に生徒会の面子は気付いているようでしきりに私に何かあったのか聞いてくる。何故私に聞きに来るのかは今は追求しないことにする。
先日ゼロに頼み事があると言われ部屋に呼ばれた時は、私を頼ってくれたことが嬉しかったりした。話を聞くとユウのことを気にかけてやってくれという内容だった。彼は心の支えであった家族に会え

ないことで精神的に弱り、このままでは潰れかねないと言う。
『どういった形でも良い、あいつを支えてやってくれないか？』
そう言われ頼まれたのは良いのだけれど、どうすれば彼を元気付けてあげられるのだろうか。支えると一言で言ったってそう簡単なものではない。私は彼のことを全て知っているわけではないし、彼の家族がどういう人達だったかも、何人いたかも、何も知らない。彼は家族を精神的な支えとしていると言っていたけど、だったら支えになれるように、頼ってもらえるようになればいいのかしら……？　一緒にいて安心出来るような……例えば家族……？
そう自分で考えて顔が赤くなるのを感じた。
いやいやいやいや……落ち着け私……何もふ、夫婦だけが家族の形じゃないわ。そう、どっちかというとユウは弟とかペットみたいな感じよ。それにペットだって立派な家族よね、うん。
どちらにしろ一度本人と話してみないとわからない。でもどうやって聞き出すべきか……。
生徒会室へ向かって歩きながら考えていたので気付けば辿り着いていた。中に入るとナナリーと彼女のお付きの咲世子さんだけだった。
「あれ？　他の皆はまだ？」
「こんにちは、カレンさん。はい、まだ私達だけみたいです」
「今お茶を入れますね」
そう言って咲世子さんは出て行ってしまった。あまりナナリーとは話したことがないので少し気まずい。
そんなことを考えているとナナリーの方から話しかけてきた。
「あの……カレンさんはユウさんと仲がよろしいのですよね……？」
「え？　えぇまぁ……生徒会の中では……」
「ユウさんのことでご相談したいことがありまして……」
ナナリーが兄のルルーシュではなくユウのことで？　珍しいと言えば珍しいけど……。
そこでナナリーが昨日ユウから聞いたことを話してくれた。
「話をしている時……とても辛そうでした。私に何かしてあげられる

ことはないでしょうか……」
そう言って彼女はとても辛そうに俯いてしまった。こんな良い子を心配させるなんて、あの獣は一度締め上げた方が良い気がする。
「話は聞かせてもらったわ!!」
突然扉が開くと同時に会長の登場、そしてユウを除いた残りの生徒会メンバーが入ってきた。皆外からこっそり聞いていたらしい。いや、居たなら入ってきなさいよ。

翌日の朝、会長に言われた通りユウに放課後生徒会室に来るように言っておいた。

放課後生徒会室にはユウ以外は既に揃っており、昨日あの後ユウのことについて色々と話し合ったが結局本人と一度話をしてみようということになった。
そしてしばらくしてユウが来た。
「ユウ・ヘイズ、着席!」
会長が珍しく真面目で威勢の良い声を出して着席を促した。ユウはびっくりしながらも言われた通りに席に着いた。
「さぁユウ! 思い悩んでることをここで洗いざらいぶちまけちゃいなさい!」
「えーっと……ナナリー、もしかして喋っちゃった……?」
「ごめんなさい……。でもユウさん、とても辛そうでした……。私に何か出来ないことはと思いまして……その……」
ユウはナナリーに気にしていない旨を伝え少し悩んだ後、現状をポツポツと話し始めた。今度は……記憶の欠落のことも。皆は普段の能天気な姿以外はあまり見たことがないので、ユウが記憶の欠落なんかで悩んでいるとは思っていなかったのだろう。随分驚いていた。
「記憶の一部がねぇ……お前も随分苦労してたんだな」
「どこからどこまで記憶がないのかもいまいちわかっていないんだ……。記憶がない間皆どうしていたのか、今はどうしているのか

……」
だからこそ彼は禁止薬物を使用してでも知りたかった。知れば少しは安心出来るから……かしら。
ユウは思い悩んでいたことを全て話し終えると頭を下げた。
「皆聞いてくれてありがとう……でももうこの辺でいいよ、聞いてくれただけで随分楽になったから。僕なんかの為にここまでしてくれて……」
「そんなに卑下しない！　あなたはこの生徒会のメンバーなんだからもっと胸を張りなさい！」
いつにも増して会長の気迫が凄い。意外と熱い思いを秘めた人だったみたい。
そこへずっと何かを考えていたナナリーが口を開いた。
「ユウさんはご家族に会えないでとても淋しそうでしたので、少しでも支えになれればと思ったのですが……それとも私達じゃご家族の代わりにはなりませんか……？」
「そんなこと……僕は皆のことをセレンさんの代わりとしてみたことなんてない！」
ユウは声を荒げて反論した。
「僕はただ！　……ただ、一人は嫌なんだ……怖いんだ……。両親が死んだ時のことはあんまり覚えてはいないけど……あの時の感情は今でも覚えてる……。両親が死んだ時、周りには誰も居なかった……怖かったんだ……隆文さんに見つけてもらうまで……ずっと一人で……」
話しながら涙を流し始めた。
「そんな僕の傍に、セレンさんはずっと居てくれた……。でもここに彼女は居ない……僕はまた一人になる……」
「一人って……皆がいるじゃない……」
「違う……違うんだ、カレン……皆は僕のことを知らないから居てくれる……。怖いんだ……本当のことを知った時、皆僕の傍から居なくなるんじゃないかって……。仲良くなる前なら良かった、離れて行ってもまだ諦めがついただろうから……。でも……今は想像するだけ

で心が押し潰されそうになる……。もう一人は嫌だ……やだよ……」
そう言ってユウはまるで無垢な子供のように泣きじゃくった。
やっとわかった気がする。彼は家族に会えないこともだけど、何よりも孤独が怖いんだ。そして、自身の全てを知っていて、傍に居てくれた人がここには居ない。
「大丈夫ですよ……ユウさん」
そう言ってナナリーはルルーシュに押してもらってユウの傍まで移動してまるで見えているかのように自然と彼の手を取り、しっかりと握って微笑んだ。
「ユウさんがどんな人だって、ここの皆さんはあなたを嫌いになったり、離れて行ったりなんてしません。だって……ユウさんは優しい人ですから」
「ここに……いますから、いつでも帰ってきてください」
その言葉で耐え切れなくなったユウは大声で泣き始めた。
結局、人の心を救うのは、人を思う純粋な気持ちなのかしらね。私は心のどこかで騎士団の活動にユウが不可欠だから、という気持ちがあったのかもしれない。でもナナリーは純粋に彼を心配していた。そんな彼女の気持ちがユウの心を救ったのかな……。
「ふふっ……ユウさんは泣き虫さんですね」

しばらくしてようやくユウが落ち着いた。
「いやいや……大変お恥ずかしいところをお見せしました」
そう言ったユウの目も顔も真っ赤だったけど、表情は憑き物が落ちたように晴れており、今まで通りどころかそれ以上に良さそうだった。
「皆、今日は僕の為に本当にありがとう……。それで、僕の素性のことなんだけど……」
「ストーップ！　そこまでよ、ユウ。無理に言わなくて良いわ」
ユウが自分のことを喋ろうというところで会長のストップが入った。さすがのユウもこれには焦っている。
「で、でも僕は――」

「でもも芋もないの！　ナナリーがさっき言ったでしょ？　あなたが何者かなんて関係ないのよ。逆に言うことであなたが辛い思いするかもしれないんだったら言う必要はないの、わかった!?」
「イ、イエス！　マム！」
　こうしてユウのメンタル面での問題も解決し無事に終わった。これでしばらくは平穏になるはず、私はこの時はそう思っていたのだが、考えが甘かった。

　翌日、ユウは授業を休んだ。原因はわからないし、電話をしても一向に出る気配がない。最近のユウのことを考えると途端に心配になる。
「そういえば昨日うちに来てナナリーに何か聞いていたな」
　詳しい話をナナリーに聞くために生徒会室で話を聞いてみると意外なことがわかった。
「ユウさんですか？　そういえば……昨日の夜にいらっしゃって変わったことを聞かれました。えーっと……確か『蟲とザリガニと鳥と丸い玉、どれが好き？』と聞かれました。良くわからなかったので丸い玉と答えたのですが……」
　質問の意図が不明だわ……。
　少し心配になったのかスザクとルルーシュが部屋を見に行ってくると言い残し出て行き、５分もすると帰ってきた。
「えっと、扉の前に『Ｄｏｎ，ｔ　Ｔｏｕｃｈ　Ｍｅ！　ＨＡＨＡＨＡ！』って書いた張り紙がしてあったよ」
「中で何かやっているような物音は聞こえたが、何をしているかまではわからん」
　張り紙にいかにもな感じの笑い方が書いてあったし、多分心配する必要はないだろうという結論に達したのだが、本当に何をやっているのだろうか。

　次の日もユウは授業を休んだ。心配する必要はないとは言ってたけど……明日も来なかったら一度部屋に行ってみるのが良いのかな。

そんなことを生徒会室で話していると突然扉が開いた。
「ナナリィィィィ！」
ユウ、大声で叫びながら入ってくるんじゃないわよ、びっくりするから。名前を呼ばれたナナリーもびっくりしてるじゃないの。
何かを小脇に抱えてナナリーの元まで進んで行く。
「ナナリー、はいこれ先日のお礼。本当は皆にも何か渡したかったんだけど、これは材料が一つ分しかなかったから」
そう言ってユウはナナリーにバレーボールで使われている球くらいのサイズの金属の球体を渡した。見た目は少し黒銀っぽい色で、一カ所が目玉のようなレンズになっており、そこから広がるように金色のラインが何本も走っている。
「ちょっと重たいですけど……これは何なのですか？」
確かめるようにペタペタと球体を触っているが、いまいちわかっていない。当然ながら私達もわからない。
「少し待っててね、ここをこうして……」
ユウが少し触るとレンズとは反対側の部分がスライドして中からパネルのようなものが出てきた。そこへナナリーの手を導き触らせると生徒会室には似つかわしくないマシンボイスが部屋に響き渡った。
【指紋登録完了】
「待て、ユウ……それは一体何だ」
さすがは兄のルルーシュ、あまりにも得体の知れない物なので警戒しだした。
「ん？　これ？　ソルディオス・オービットって言うんだけど。ちょっと待っててね、もうすぐ起動するから」
聞いたことのない名前だが、嫌な予感しかしない。
球体はレンズ部分が淡い緑色に光るとフワフワと浮き始めた。皆の状態を言葉で表すなら……茫然自失。うん、これが一番近い。ナナリーだけがいまいちわかっていないので、説明してあげると驚いていた。
「良かった良かった。無事に起動したね」

「で……これは何だ」
「元々は僕の世界の兵器で、もっと巨大なのが空を飛んでコジマ粒子を攻撃に用いたレーザーキャノンを撃ってくる物体だったんだよね」
　待って、今聞き捨てならない言葉がいくつもあったわよ。
「あ、でも心配しないでね？　確かに小型のコジマエンジンは積んでるけど、破壊されない限り粒子が漏れ出すようなことは絶対にないから。まぁ破壊しようにもロケット砲撃ち込まれたって壊れるような装甲じゃないけどね。エネルギーも勝手に作り出すから壊れない限りはずっと稼働してるから、そっちも問題ないよ。自己修復プログラムも入ってるから、中身がどこかおかしくなったら勝手に見つけて勝手に治すし」
「お前なんつーもんを……」
「そもそもお前は何故そんなものをナナリーに渡したんだ」
　そう、それが一番大事。何の為にこんなものをナナリーに？
「一番の理由はナナリーを護衛させる為だよ。ナナリーは目が見えなし、足が悪い分いざという時行動し辛いだろうから。ナナリーは僕を助けてくれた。僕もナナリーを助けたいけど、いつでも傍に居れるわけじゃないから、せめて……と思ってね」
　ユウなりに心配した結果……なんだろうけど、明らかに方向がおかしい。
「あとは盲導犬みたいな役割にもなるし、荷物持ちとかにもなるよ。出力が高いからおそらくナナリーだったら乗っても飛んでくれるんじゃないかな」
　飛べると聞いて想像したのか、ナナリーは少し楽しそうな顔をしている。
「護衛と言っていたが、そんなので護衛の役割が務まるのか？」
「心配ないよ、高度なＡＩが組み込まれているからナナリーに害を与えようとする輩には気絶する程度のエネルギー砲を撃ち出すようになってるし、たとえ銃弾が飛んできてもすぐさま射線に割り込んで防ぐから。さっきも言ったようにかなり硬い装甲だからその程度じゃ壊れないし」

本当にあんたなんて物をナナリーにプレゼントしてるのよ……。
「いやー一昨日の夜に何か恩返し出来ないかと思って端末弄ってたら見たこともない項目が増えててさ。そしたら企業がくれたっぽい追従型の小型機のパーツとかがあってね。何故か部品全部端末から出てきたもんでそれからずっと組み立てたり、設定したりしてたらこんな時間になっちゃって」
「それで授業もサボってたのね……」
今結構際どい発言があったけど、皆フワフワ浮いてる球体に目が釘付けで気付いていないらしい。心臓に悪い。
「ユウさん、ありがとうございます」
「ナナリーが喜んでるから良いが……本当に危険はないんだな？」
「ないよ。その為に徹夜しておかしいところがないか幾度となく確認したし」
ナナリー本人が喜んでるから良いけど、女の子にこんなプレゼントはどうかと思うんだけど、私。
こうしてナナリーの傍に謎の球体が出現したことは学校内でしばらくの間噂になった。生徒会がナナリーの為に用意した物という噂も同時に出ていたので、悪い噂が立つようなことはなかった。

翌日目を覚ますとしばらく降り続いていた雨も止み、快晴。
首輪を付けながら見た夢を思い出す。
またあの白い空間。以前と違うのは少しだけ色がついていたこと。そして……また現れたセレンさんの表情が、少しだけ笑っていたように見えた。
僕頑張るよ。セレンさんが居なくても……何とかやってみるよ。
さぁ今日も1日頑張ろう。
ちなみに寝過ぎていた為遅刻して怒られた。
やっぱダメだね、うん。

息抜回その①　セレンさん家

クレイドル０５のとある区画、ユウとセレンのお家。ユウを引き取ってから2年が経とうとしていたある日の朝、ユウはとても嬉しそうに朝御飯を食べている。理由は簡単、今日は有澤隆文が遊びに来るからである。セレンがユウを引き取ってからもちょくちょくユウに会いにここまでやってくる。有澤に助け出されてから一週間程の間、ユウは有澤に面倒を見てもらっていた。それにより人見知り気味なユウでも有澤には懐いている。同様に、たった一週間ではあったがユウに情が湧いた有澤は今日のように頻繁にユウに会いに遊びに来るのであった。誤解のないように言っておくと、有澤には一つ上の嫁さんと男の子と女の子が一人ずついるので別にセレンと男女の関係であるわけではない。ちなみに嫁さんもユウを気に入っているのでたまに家族揃ってヘイズ家まで来たりする。

セレンが朝御飯を食べながら本日の予定を考えていると、ユウが嬉しそうに尋ねてきた。

「セレンさん、きょうタカフミさんはいつくるの？」

「さぁなぁ……昼過ぎと言っていたからお昼御飯を食べてから少し経ってからじゃないかな」

「たのしみだねー」

そう言ってユウはとても嬉しそうにぱーと笑う。そんな姿を見て小一時間程抱きしめ続けたくなる衝動を抑えるセレン。ショタコンと言われても仕方ない。

「じゃあそれまでにしっかり勉強をしておこうか。その為にも今は朝御飯を食べてしまおう」

「はーい」

言語や算数、道徳や歴史等、マンツーマンでしっかりとユウに教えていく。一生懸命解く姿を見てまた悶える。こういう可愛い姿を見る度に、愛おしい気持ちが募る。自分で産んだ子ではないが、最早自分の息子も同然に愛し、育てている。わからない問題で悩む姿が、自

分の解答が違うことに気付いて一生懸命消す姿が、問題がわかった時の顔が。
（かわいいなぁ……）
親馬鹿かショタコンか、誰にもわからない。

昼も近付いてきたのでお昼御飯を用意する。その間ユウはテレビの「ＡＭＩＤＡちゃんとゆかいななかまたち」という番組を見ている。ＡＭＩＤＡという蟲のような変な生命体とその仲間の冒険をコメディタッチに描いた子供向けの番組である。子供には人気らしいがセレン的にはいまいちよくわからない。興ちゃんや干ちゃん、たいちょー等色々いるらしいが一体これのどこに人気があるのか。ちなみにＡＭＩＤＡちゃんのぬいぐるみは以前有澤がユウへのプレゼントで持ってきた。それを貰った時のユウの顔を思い浮かべるだけで、セレンは料理を普段の数倍旨く作れる気がするそうな。

お昼も食べ終わり、お茶で一服していると有澤がやってきた。一人の男を伴って。

「ふむ、クレイドルというのは中々過ごしやすそうだな」
「久し振りだな、霞スミカ。おっと、今はセレン・ヘイズだったか」
「どこの益荒男かと思ったら……お前か、ローディー」
「む？　ユウは何処だ？　普段だったら笑顔で駆け寄って来てくれるのだが……」

有澤が周囲を見渡しユウを探すと奥の部屋から顔だけ出して様子を窺っていた。

「ユウは人見知りだからな……見たこともないごつい男が居れば警戒もするさ」
「貴様のせいか、ローディー」
「何故私が怒られなきゃならんのだ……」
「ユウ、大丈夫だ。こいつはごついがユウを取って食うようなことはしない。こっちに来て挨拶しなさい」

セレンの言葉に安心したのか部屋から出てきてセレンの後ろに隠れ、ローディーの顔をじっと見つめる。ローディーが屈んでユウの目

線に合わせ、微笑んで自己紹介するとユウもおそるおそる出てきて自己紹介をし、またセレンの後ろに隠れた。

セレンは椅子に座り、ユウが有澤とローディーと遊ぶ姿を優しい目で眺めている。ユウは有澤の持ってきたラジコンを二人と一緒に楽しんでいる。そんな姿を見ると、やはりユウも男の子だな感じる。ただ一つセレンが気がかりになっていることと言えば、そのラジコンが戦車であるということ。しかもかなり重装甲の。ユウが喜んでいるので文句を言うことが出来ないが、後で蹴りをくれてやろうと心に誓った。

「たまには童心に返ってあぁいうもので遊ぶのもいいもんだな」

ローディーがセレンの向いの椅子に座って一息つく。

「戦車なのが気に食わんがな……」

「まぁそう言うなよ。あの子も楽しんでいるじゃないか」

セレンはお茶を一口飲むとユウに聞こえないように声を抑えながら話し始めた。

「……ＧＡ社での地位が上がってきてるそうじゃないか、粗製とまで言われたあのお前が」

「祭り上げられたようなもんさ……。リンクスとしてそれなりの場数を踏んできたことは否定せんがね」

「リンクス戦争か……」

「あの戦争で生き残ったんだ。私も、お前も、有澤も……。それだけでも上出来さ」

「あの時からいるのは？」

「テレジア、王小龍、エイ＝プール、スティレット、ヤン、Ｋ・Ｋ。エンリケも生き残ってはいるがそろそろ引退を考えているそうだ。残りは死んだか引退した」

「アナトリアの傭兵はどうなったか知っているか？」

「わからん。奴のオペレーターをしていたイェルネフェルト教授の娘と共にアナトリアを離れたという話は聞いたが……その後の行方は聞いたことがない」

「やはりあれ以降は表舞台には出てきていないか」
「低いＡＭＳ適正であれだけのことをやったんだ、たとえ生きていてもまともに生活出来んだろう……」
　そんな話をしているとユウがセレンを呼んだ。
「セレンさんもいっしょにあそぼ」
「ほら、行ってやれ」
「あぁ、今行くよ」

　その後も少しずつローディーと打ち解け、帰る頃には手を振り「ローディーさん、またね」と言うにまでなっていた。こうして少しずつユウが他人と打ち解けていって欲しいと願う反面、いつかは自分から離れていくのだろうと少し淋しい気持ちも募らせながら晩御飯を食べるセレン。
（だが今は……せいぜい一人占めさせてもらおう）
「ごちそうさまでした」
「ほら、口の周りについているぞ」
　ユウの口の周りについていたソースを拭ってやる。
（この時に目を瞑る姿もまた……）

　食事を終えたら共に風呂に入る。ユウはシャワーより風呂にゆっくり浸かるのが好きらしく、その為に広い湯船のあるこの住居を態々選んだ。ユウの頭や体を洗ってやり、共に湯船に浸かる。セレンにとってはこの時間が一番の至福の時である。風呂から出たらドライヤーを使って髪を乾かす。髪は乾くとふわふわになり、ユウの頭に獣のような耳が出来る。セレンはそれをもふもふして楽しむ。
　歯を磨いて一緒のベッドに入って寝る。セレンはユウを後ろから抱きかかえるような恰好で寝るのが好きだった。後はその日にあったこと等をユウが寝るまで一緒に話し、ユウが寝たのを確認するとセレンも眠りにつく。
　こうしてヘイズ家の一日は終わるのであった。

11話　ナリタ戦　―前―

黒の騎士団の使用している倉庫内に、複数のＫＭＦと共に黒い制服を身に纏った人々が多数居た。彼らは騎士団に新たに入団した日本人達である。河口湖の事件以降騎士団の人気は高まり入団希望者が増えた。入団には厳しい審査による選別があり、ここに居るのはその審査を無事通過した者達である。

新団員達は憧れの黒の騎士団に入ることが出来たので浮かれているが、その様子は今後殺し合いに身を投じていく者達の態度とは到底思えないものである。浮かれている理由は入団が叶ったことだけでなく、倉庫内に立ち並んでいる複数の無頼と新型ＫＭＦも関連していた。これらのＫＭＦを送ってきたのはキョウトという組織で、ブリタニアに対して抵抗している勢力に兵器等の支援を行っているかなり大きな組織である。そんな組織から支援を受けるということは黒の騎士団もついに認められたということだ、と喜び勇んでいる。喜んでいるのは新入りだけでなく、騎士団の幹部メンバーである扇、玉城、南、杉山、井上、吉田、そしてカレンも新型ＫＭＦを前に興奮を隠しきれない。――紅蓮弐式。赤い装甲をした初の純日本製ＫＭＦで、その右腕には銀色の大きな鉤爪のような腕が装着されている。

そんな倉庫には更に奥があるのか大きな扉があるが閉まっているので何があるかわからない。そんな奥が気になった一人の新入りの少女が幹部メンバーに疑問を投げかけた。

「先輩、あの奥の扉の向こうはどうなってるんですか？」

「あそこは責任者以外は立ち入り禁止だ。もし仮に立ち入ることがあるとしたら責任者の指示があった時だけだ」

「責任者……ですか？　どちらの方なんですか？」

「あーっと……何だよ……まだ来てねーじゃねぇか、あいつ」

玉城がぶつぶつと文句を言っていると、まるっきり場違いにしか見えない人物が倉庫内に入ってきた。

「うわっ、何でこんなに人いんの？」

その若い男の声に全員が振り向くと、そこに居たのはパーカー付き

のシャツに膝丈のズボン、そしてサンダルというラフな格好に赤い首輪を付けた白い頭の青年だった。その姿を見た時極少数は団員ではないかと考えたようだが、新団員の大半が迷い込んだ日本人のガキ、という印象しか持たなかった。
「おい、お前！　ここはお前みたいなガキは立ち入り禁――」
「おせーぞユウ！　何やってたんだよテメー！」
言い終えるより先に玉城の罵声が飛び、喋っていた新団員は慌てて口を噤んだ。
「新入り共、紹介しておくぞ。扉の向こう側の責任者を担当しているユウだ。彼の許可なく奥には絶対に行くな、良いな？」
扇の言葉に新団員は全員目を見張った。どう見たってせいぜい学生だろうというくらいの年の青年なのに、扉の向こう側の責任者だという。
「あーなるほど、この人達が新しく入った人達か。どうもユウ・ヘイズって言います、よろしくね。見た目通りのガキなんで敬語は結構です」
そういうとユウは持ってきた作業着に着替えると言い残し、倉庫の隅へと消えていった。
責任者というくらいだからもっとお堅い、真面目な技術者風の人物かと身構えていた新団員達は一気に体の力が抜けてしまった。実際は口を開けば何とも頭の軽そうな学生だった。新入りの何人かは、あんなのが責任者じゃ簡単に倉庫入り出来るんじゃないかと思った。
「ちなみに言っとくとね、僕以外が勝手に入ると蜂の巣にされる仕掛けになってるから気を付けてね？　まぁ勝手に入るような馬鹿は居ないと思うけど一応警告しとくよ」
ユウは物陰から顔だけだして恐ろしいことを口にするとまた奥に引っ込んでいった。
幹部を含めた全員が勝手に入るまいと心に誓うのだった。

団員達が機材の確認等色々作業している中、ユウは一人小型端末を弄っていた。周りからしてみれば作業も手伝わずに遊んでいるよう

にしか見えないので、新団員達はあまり良い顔をしていない。ユウは騎士団の制服は着ておらず、つなぎに軍手、作業靴、そして首輪。そんな恰好ならより作業はし易いはずなのに、手伝う素振りを見せない。他の幹部達もそれについて一切言及しない。

そこへ黒の騎士団のリーダーであるゼロが現れ幹部達を集め何か話している。だがユウはその話し合いに参加しようともせず、相変わらず端末を見ながら何か考え事をしている。

「なぁ……あいつって本当に責任者か？　ただ遊んでるだけのガキにしか見えないぞ」

「責任者ってことは幹部でもあるんだよな？　何で他の幹部の人達みたいにゼロとの話し合いに参加しないんだ？」

「知らないわよそんなの……」

作業をしながら小さい声でユウと名乗る青年の話をする。自分達よりも明らかに年下であるにも関わらず幹部とも普通に話し、おまけに作業を手伝わなくても何も言われない。余程重要人物なのか、それとも放置されているのか。

話し合いは終わったのか、ゼロはユウのもとへと向かって歩いて来た。

「次はナリタ連山へのハイキングだ、準備は出来ているか？」

「今からだよ？　人手がないとアセンブルに入れないからさ。んじゃあ……カレン、南さん、玉城、手伝ってくんない？　機体整備を手伝ってくれる契約だったよね」

何故か自分が呼び捨てなことに玉城は怒っていたが、ユウの「何となく、玉城は玉城だから」という言葉で一蹴されていた。

「ゼロも時間あったら来ると良いよ。ＡＣについて知っときたいでしょ」

その言葉にゼロは頷き共に奥の倉庫へと向かった。

「随分と嬉しそうね」
倉庫へ向かう途中、僕が鼻歌を歌っているとカレンが話しかけてきた。
そりゃ嬉しいさ、ようやく機体構成を本格的に変えられるんだから。今までは腕部武装くらいしか変えられなかったのが、ＫＭＦがあるおかげで装備を変えることが出来る。こんなに嬉しいことはない。
そういうカレンの方も嬉しそうなので理由を聞くと紅蓮弐式のパイロットとして選ばれたらしい。ということは実質彼女が騎士団のエースパイロットなわけだ。彼女がＫＭＦに乗ったところを見たことがないのでわからないけれど、最新鋭機を任されるということは相当の腕なのだろう。
端末でトラップを解除してから扉を開けて中に入り、すぐに閉める。世間的にはまだストレイドは騎士団と共に行動していることは知られていないので、新団員には見せないようにしている。下手に情報漏れてもやだしね。照明をつけるとストレイドの傍に大きなコンテナがいくつも転がっている。予め用意してあるので今回は何処から来るのか、とか警戒する必要はなし。
ＫＭＦを使ってコンテナを開けた南さんと玉城が驚いていた。
「何だこりゃ、戦車……か？」
「でも砲身が付いてねぇじゃねぇか。おいユウ、こんなもん何に使うんだ？」
「これはストレイドの脚部だよ」
ゼロは仮面を付けているので表情は分からないが、「ほぅ」と声を漏らしていた。
「ＡＣというのはパーツを換装して、その都度戦術を変えることが出来るのか」
さすがにゼロは察するのが早い。しかしそれ相応の設備がないと換装にかなり時間がかかる。今回もまず現在使用している重量二脚型の脚部の接続を切り離す、ＫＭＦに上半身を持ち上げてもらいタンク型の脚部へと移す、そして接続、といった感じになる。
ＡＲＧＹＲＯＳは重量型の機体なのでかなり重い、なので３機のＫ

ＭＦを使って持ち上げてもらう。３０分程かけてようやく脚部の換装が終わった。専用の設備があればもっと手早く出来るのだが、さすがに贅沢は言えない。
　次いで、肩部、背部と装着してもらい、最後に左右の腕に武装を装備すればアセンブルは終了する。見た目だけでは右腕のガトリングガン以外の武装は何かわからない。
「肩も背中もパッと見じゃわからないけど……どういう武装をつけたの？」
「背中のはコンテナ……？　４つに分かれているみたいだが」
　左腕にも箱のような物。
「肩のは効果範囲の広いＥＣＭ、背中と左腕は使ってのお楽しみ。あぁ、あとそれからさ」
　一番大事なことを忘れちゃいけない。
「皆に発信器みたいなの持たせられない？　小型のでもいいんだけど」
　カレン達は顔を見合わせていた。まぁよくわからんわな。

　作戦決行当日、ナリタ連山。胴体付きの戦車という言葉が似合う形態のストレイドが掘削機や人員等を積んだコンテナを牽引して山を登っていた。その後ろには同じくコンテナを運ぶ無頼。こちらは前後１機づつでなんとか運べているという状態。無頼の上やストレイドの戦車型の脚部にも黒の騎士団を乗せて運んでいる。
　今回の詳しい作戦内容を聞いているのはカレンと扇、ユウだけであるが故に、他の団員達は作戦がどういったものなのかは知らないので軍事教練だ、温泉掘りだと冗談を言いながら気楽に考えていた。ゼロは別行動を取っているのに加え通信機も使っていないので、作戦について問いただすことは出来ない。
「ゼロの奴、どういうつもりなんだ？　ハイキングなんて言ってたけど」

「ユウは何か聞いてる？」
「さぁね、でも武装してる時点で大体絞り込めるでしょ」
ユウは今回の作戦を知っているが故にしらばくれつつも返事をする。
ゼロが言うにはここは日本解放戦線の本拠地らしく、それを殲滅する為にブリタニアの第２皇女であるコーネリアが軍を率いるという情報がもたらされたらしい。今回はそのブリタニア軍を叩くのが仕事である。
（そう、〝仕事〟だ。余計なことを考える必要はない。ただ作戦に従事すればいい……私情を捨て、心を殺せ）

山頂でゼロと落ち合い、指定された場所へと掘削機を設置していく団員達。
ユウはコクピットの中で待機していると、レーダーに多数の反応を確認すると外に出てゼロに報告する。
「ゼロ、ブリタニア軍が動き出した！　敵ＫＭＦの反応、最低でも１００機！」
わざと大声で言った為、全員の耳に入り騒然としていた。普通に考えてそんな戦力に勝てるわけがない。おまけにそれを率いているのがあのコーネリアともなれば勝ち目は零だ。コーネリアは自身のＫＭＦの操縦の腕も指揮能力も高い。幹部メンバー達はゼロに作戦をあえて伝えなかったことについて文句を言い始めた。
「ユウ！　てめぇも知ってたんじゃねぇのか!?」
「うん、知ってたよ。それが？」
表情を変えずにケロっと答えたユウの態度に玉城の苛立ちは募る。
「だってさぁ、皆作戦内容言ったらブルって反対したでしょ。だからこうしてゼロが皆のケツに火つけてくれたんじゃん。もう追い詰められたことには変わりないんだからさ、死にたくなかったら戦いなよ。それに武器を持った時点で死ぬのくらいは覚悟してるでしょ？」
「そんな……死ぬ覚悟だなんて、そんなも――」
「『殺しているんだ、殺されもするさ』ってね。今更ゼロに詰め寄っ

たって遅いよ。死にたくなかったら、ほら、準備準備」
そう言ってユウはストレイドへと向かって行ってしまった。
「随分と酷い発破のかけ方ね」
「はて、何のことやら」
向かう途中のカレンからの言葉にとぼけて返す。そんな中思うのは先ほど発した自分の言葉。
『殺しているんだ、殺されもするさ』
どこかの誰かに言われた台詞。それが誰かは思い出せないが、少なくともあまり良い気分はしない。

ブリタニア群の総攻撃が開始された。大量のＫＭＦが山を囲うようにして展開、包囲していく。日本解放戦線側からも無頼や固定砲台を使っての反撃が行われているが、ＫＭＦの性能と数、そして操縦技量の差であっと言う間に破壊され突破されていく。特にコーネリアの部隊やその配下のダールトン将軍の部隊のＫＭＦ”グロースター”の突破力は凄まじく、次々と破壊されていった。
しばらくすると解放戦線の本拠地入口が発見されたのか、信号弾が撃ち上がると共にその地点に敵が集まり始めた。これでブリタニアに刃向うエリア１１の勢力は全滅させたと、誰もが確信したその時、ついにゼロが動き始めた。
「これで全ての準備が整った！　黒の騎士団、総員出撃準備！　これより我々は、山頂よりブリタニア軍に奇襲を敢行する。作戦目的は、ブリタニア第２皇女コーネリアの確保にある！」
団員は半ばやけくそに突撃体制に移る。生き残る為に敵を倒す。自分達にはゼロとストレイドが付いている、彼らが居れば勝てる、そう信じてゼロの指示を待つ。
「ユウ、頼む」
ゼロの命令に従いＥＣＭを展開。効果範囲が広いのでおそらく麓の街まで通信障害が起こっていると思われる。
「カレン、一撃で決めろ」
紅蓮は地面に突き立てられた装置に右腕を押し当てた。

「出力確認。輻射波動機構、外態状態維持」
紅蓮の右手から蒸気のようなものが立ち上がり始める。
「外周伝達！」
トリガーを一気に押し込むと同時に紅蓮の右手から赤黒い稲妻のような光が辺りに走る。光が消えると右腕からは薬莢の如くカートリッジが排出される。何も起こらないので失敗したかと思われたが、直後強烈な地震が起き、崖が崩れ始めた。崩落の勢いは凄まじく見る見るうちに雪崩れて行き、その崩落によりブリタニア軍ＫＭＦの大半が巻き込まれ大きなダメージと混乱をもたらした。
「今だ、一気に突き進め！　総員、計画通りに動け！」
敵の混乱に乗じて一気に叩く。ストレイドの戦闘能力があれば容易に突破できる。そしてコーネリアを捕縛する。
だがその言葉に従わない機体が１機、ストレイドが動こうともしない。
「ユウ、どうした！　今のうちに――」
「がぁぁぁぁぁぁ!!」
突然ユウの機体から悲痛な叫びが通信機を通して聞こえ始めた。ユウは頭に激痛が走り、頭を抱えながら叫びもだえ苦しんでいる。誰からの問い掛けにも答えられず、痛みに耐えきれずに白目を剥き気絶してしまった。ユウとの接続が切れたことでストレイドもまたその目から光が消え、沈黙した。
「ユウ、返事をして！　ユウ！」
カレンが必死に呼びかけるも返事は一向に返ってこない。ユウの作戦参加は不可能と判断したゼロは決断を下した。
「全機、ユウに構うな！　奴の機体は頑丈だ、たとえ敵に見つかっても早々に破壊されることはない！」
「しかし……！」
「優先すべきはユウではないはずだ！　目的を見失うな！」
その言葉に皆が躊躇しつつも動き、ゼロを先頭に山を一気に駆け降りる。
優先すべきはコーネリアの確保。今を逃せば敵が体勢を立て直す、

その前に叩かなければならない。ならば今はユウを捨て置くべき、というのがゼロの考えである。戦力の大幅な減少は避けられないが、精神状態にまだ不安があったことからユウが作戦遂行不可能となることも想定に入れて考えられた作戦である為、たとえユウがおらずとも作戦の完遂は可能だ。ユウの身に何があったかはわからないので歩兵組を数名だけ残して残りでコーネリアを叩く。

ゼロの行動にいち早く気付き、迎撃に向かう機体があった。頭部のファクトスフィアと両肩を赤く塗ったサザーランド、純血派のジェレミア・ゴットバルトのＫＭＦである。ジェレミアは以前は軍内でもそれなりの地位にいる人間であったが、ゼロにより汚名を着せられ地位と名誉、そして信用を失うこととなった。それによりゼロには復讐心を抱いている為、その姿が確認された途端に持ち場を離れゼロのもとへ一直線に突き進む。

「ゼェェェロォォォ!!」

黒の騎士団の無頼を視認するとアサルトライフルの引金を引き絞り前方の２機を瞬く間に破壊した。突如現れたサザーランドにゼロ達は足を止め対峙する形となり、純血派のヴィレッタ、キューエル達もジェレミアに続きゼロのもとへと駆けつた。

「ゼロォ、いるのはわかっている！　この私と、ジェレミア・ゴットバルトと戦えぇ!!」

「お久しぶりですね。ですが今はあなたに構っている暇はないのですよ、〝オレンジ〟君？」

「オ!?　オ、オオオオオレンジだとぉ!?　貴様ぁぁぁ!!」

ジェレミア卿は決してＫＭＦのパイロットとして弱いわけではないが、ゼロのこととなると頭に血が上り無謀な行動を取るようになってしまっている。また〝枢木スザク強奪事件〟の際に、ギアスによって操られる直前にゼロがジェレミアに放った「オレンジ」という言葉のせいで軍内で不信感を抱かれると共に〝オレンジ〟という不名誉な徒名を付けられてしまった為、その言葉を聞くと気に障り、今回もその言葉に激昂し我を忘れて突撃するという愚行を犯した。

その突撃をゼロの機体を飛び越え手前で食い止めた赤いＫＭＦ――紅蓮弐式。ブリタニア側は見たこともないＫＭＦの出現に動揺した。
「全機手を出すなよ！　これは私の決闘だ！」
「しかし……!?　こいつは未確認のＫＭＦです！　ミストの件もあります、どうか冷静になってください！」
ヴィレッタの言葉は届かず、ジェレミアは両腕のスタントンファを展開し突撃する。右腕で薙ぎ払うが紅蓮の異様な右腕に容易く止められる。追撃に左腕を振り下ろす、横に避けられる。ランドスピナーを用いた水面蹴りを放つ、跳躍で避けられる。機体の速度もさることながら、パイロットの反応速度も並ではなく掠りもしない。
紅蓮は着地と同時に左手にナイフを持ち切り掛かる。寸でのところで受け止めるがパワーに差があり押し返すことが出来ず抑え続けるのがやっとである中、紅蓮はその右腕を弓のように引き絞り構える。
（あの右腕……何かある！　不味い、距離をとらなくては……！）
紅蓮のナイフの重心をずらし、すぐに距離をとった、が。紅蓮の右腕が突如伸びその巨大な腕で頭部を掴まれた。
「……ごめん、さよなら」
カレンは輻射波動のトリガーを押し込むと赤黒い光がサザーランドを襲う。ジェレミアのサザーランドが内側から膨れ上がりボコボコと異様な形へと変貌していく。輻射波動は要は指向性を持った強力な電子レンジである。それを真面に食らったＫＭＦは内側から暴発・膨張を起こしていく。当然中のコクピットが無事なわけもあるはずがなく、ジェレミア自身にも深刻なダメージが蓄積していく。
「こんな……ゼロが目の前に居るのに……この私が……ゼロを――」
機体が吹き飛ぶが先かジェレミアの死が先か、というところで機体の脱出機構がオートで作動して後方へと飛ばされて行き、その後サザーランドは爆散した。紅蓮は右腕の機構を戻し、カートリッジが排出する。
「いける……！　この紅蓮弐式なら……！」

その後キューエル卿も紅蓮によって破壊された後、純血派の部隊はヴィレッタが指揮を執ったことにより持ち直し始めた。カレンはゼロの命により別行動をとっており、今現在ゼロ達は純血派の足止めを受けている。他の場所でもブリタニア軍が少しづつ体制を整え次第に押され始めた。特に歩兵組の負傷による戦線離脱や戦意喪失、死亡等苦戦が著しかった。それは幹部の女性メンバーである井上が指揮していた部隊も例外ではなく、負傷者数名を抱えた状態で身動きが取れなくなっていた。

「先輩……私達のことはいいので逃げてください……」

「馬鹿なことを言わないで……!」

新入りの少女を激励しつつ怪我の治療を進め、以前ユウに言われた言葉を今更ながら実感する。負傷した仲間がこれほどまで負担になるとは思ってもみなかった。

このままここに居ればいずれ必ず見つかり殺されるということはわかっているが、動くことが出来ないでいる。いっそ彼女の言葉に従って逃げてしまえればどんなに楽か。だがそんなことは許されないし絶対したくない。せめて1機でもいいから味方のＫＭＦが来てくれれば……。だがその願いは最悪の形で叶えられることとなった。現れたのはブリタニア軍のＫＭＦ、それも2機同時に。

「負傷した黒の騎士団のメンバーを発見、いかが致しますか」

「捕虜にする必要はない。殺せ」

「イエス、マイロード」

サザーランドに銃口を向けられ井上は死を覚悟し少女を抱きしめ目を瞑った。

突然空から複数の何かが降って来て地上に突き刺さる音が聞こえた。目を開けると自分達と敵のＫＭＦとの間に筒状の物体が地に3本突き立っていた。物体が動き出し形を変えていき、くるりと一回転した後筒の先に開いた穴をＫＭＦに向け――。

「しまっ――!?　撃てぇ!」

ＫＭＦが撃つよりも先に３本の筒が火を噴き２機を纏めて破壊した。
「これは……セントリーガン……？」
警戒しながら３本のセントリーガンの様子を窺うがこちらを攻撃してくることはなく、まるで自分達を護るかの如く右に左に首を振って周囲を警戒していた。
「もしかして……ユウ？」
落ちてきた空を見上げて我が目を疑った。

ナリタ連山一帯にけたたましい音が響き渡ったことによりブリタニア軍、黒の騎士団関係なく音の聞こえた上空を見上げた。その瞬間、背筋が凍る者、血の気が引く者、絶望して死を覚悟する者、生を諦め笑い出す者、意地でも生き残ろうと決意する者、何が起こったか理解出来ない者、理解したくない者。そこには無数の小型ミサイルが降り注いできていた。
「全機、生き残りたくば死ぬ気で撃ち落とせ！」
ブリタニア軍人は必死に声を絞り出して叫んだ。ゼロも軽く絶望しつつも同じく撃ち落とす様命令を下そうとした時にあることに気付いた。ミサイルはこちらに向ってきている様子がなく、全てブリタニア側へと向かって行っている。
（まさか……ユウか!?　……だとするなら今が好機！）
「あれはユウの援護射撃だ！　総員、ミサイル着弾後生き残りを殲滅せよ！」
つまりはユウが復活したことを意味している。
（この戦い……貰ったぞ……コーネリア！）

12話　ナリタ戦　―後―

――それは山の崩落後のことだった。

カレンの操縦する紅蓮弐式の右腕から赤黒い光が走ったのを目撃した後地震が起こり、山は崩落し大量の土砂が多くのブリタニア軍と一部の日本解放戦線のＫＭＦを次々と巻き込んでいった。

この作戦については事前に聞いていたが、聞いた時に不安が過った。大量のＫＭＦを巻き込む程の大規模な土砂崩れ、そんなことが起これば麓にあるという街はどうなるのかと。崩落の規模にも因るがまず間違いなく街と一般人を巻き込むと思われる。それをゼロは意図しているのか、それともゼロの見通しが甘く気付いていないのか。それらを一度考えたがすぐにやめた。ゼロはクライアントで僕は傭兵、金を貰って従事しているだけの僕には騎士団の方針等に口出しする気も権利もない。当然自分に火の粉が降りかかるようなら遠慮なく文句垂れるが今回は僕に直接影響しない、ならばあえて何も言うまいと今回はその作戦を受け入れた。

結果は予測通り土砂は街まで達し甚大な被害をもたらした。建物が次々と巻き込まれ、押し潰されたり倒壊したりしている。

そんな様子を見ていると心臓の鼓動が一度強く打たれるのを感じ、頭に一瞬酷い痛みが走った。更に違和感を感じヘルメットを執り鼻を拭うと血が付いていた。

「鼻血……？　でもどうして……？」

巻き込まれていく街の光景を見ているとどんどん心臓の鼓動が強く、そして速くなっていくのを感じ、同時に頭にも血が昇っているのかとても熱い。理由はわからないがこのまま見ているのは不味い、でも目を離すことが出来ない。何かを思い出そうとしている、でも思い出すべきではない気がする。怖い、怖い。

『おねが――助――』

『何――どうし――』

『――たくな――』

「がああああああ!!」

頭に途轍もない激痛が走り始め頭を押さえ悶え苦しむ。

痛い、痛い痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い！　頭が割れる脳が焼かれる眩暈がする吐き気がする眼球が飛び出る！

顔の穴という穴から血が吹き出そうだ。自分が今どんな状態になっているのかもどうなるのかもわからない。延々とハンマーで頭を殴りつけられ続けているみたいに痛い。あまりの痛みに意識が遠のく――。

『――、――』

「あ゛、あ゛、あ゛、あああああああ!?」

絶叫と共に意識を取り戻すと、息も絶え絶えになり全身汗だくになっている。覚醒と同時にストレイドが機能を回復して再起動し、それに気付いた騎士団のメンバーが話しかけてきた。

「ユウさん！　無事ですか!?」

どうやら痛みに耐え切れず気絶してしまったらしい。まだ頭は酷く痛むが我慢して機体の傍に居た団員に尋ねる。

「僕は何分ぐらい気を失っていた？」

「１５～２０分といったところです！　それより急いでください！皆苦戦しています、このままでは……！」

そんなにも気絶していたのか……!?　不味い……まずは戦況を把握しないと……。

スキャンモードを起動して周囲を確認すると味方の反応がいくつか消えていたり、固まったまま動かない反応があった。相当手酷くやられているのか？　だが今は考察している分だけ時間が無駄だ。集まったまま動かない味方反応の所へ２機のＫＭＦが向かうのを確認

したので、まずはそちらに向かって左腕のセントリーガンを撃ち出す。一つ撃つ毎に冷却時間を設けなければいけないがそんな余裕はないので無理矢理追加で２つ撃ち出す。
無事ＫＭＦを破壊したのを確認。
【左腕、熱暴走により破損　継続使用不可能と判断、パージします】
使えなくなった左腕の武装を捨て去る。武装は減ったが味方を守れたので良しとして、次いで背部武装のコンテナミサイルを起動、展開し上空に向ける。右端の一つを除いて撃ち出すと真っ直ぐ空に向かって３つのコンテナが飛んで行き、一定の距離を進むとコンテナから大量の小型ミサイルが発射される。この小型ミサイルはＡＳミサイルと同じでノーロックで発射後、自動的に敵を追跡するものである。ミサイルは敵の元へと降り注ぎ、敵の反応が次々と消えていき残ったのは１０機前後といったところか。ゼロに発信器を用意してもらっといて本当に良かった。おかげで味方には一つとして狙いを定めていない。
【背部、残弾１】
止まっていた味方ＫＭＦの反応も動き始めた。こちらも作戦行動に復帰する。

「我々の勝ちだ」
崖の谷間に両腕を失い跪いたコーネリアのグロースターを崖の上から見下ろし、無頼の中で勝ち誇るゼロのマスクを外したルルーシュ。グロースターの前には紅蓮、崖の上にはゼロと扇、玉城の無頼。この場にはブリタニア軍の機体はコーネリアのみ、援軍も間に合わない。この形になった時点で勝ちは確定した。後はコーネリアを捕縛するだけだ。
しかしコーネリア本人に捕まる気はなく、最後まで戦うつもりでいるらしい。
「貴様ら如きに捕まってやるつもりはない……皇女として最後まで戦

い抜くのみ！」
その言葉を皮切りに紅蓮に突撃を敢行した。
「ふん……つまらん選択を」
紅蓮は身構え――。

突然谷間の壁を突き破って何かが飛来した。その壁の穴は遠く離れた森から一直線に作られており、その間の木々も全て薙ぎ倒されている。砂煙が立ち周囲を隠し、しばらくして煙が晴れるとコーネリアの傍に白いＫＭＦが現れた。
崖に穴が開いた影響で崖が崩れ、上から一方的に攻撃出来るというアドバンテージはなくなると同時に敵に増援。戦況が一気に変わり始めた。
「総督、救援に参りました。ご無事ですか？」
シンジュクや河口湖に現れた最新鋭の白いＫＭＦ、ランスロットという名はあるが騎士団がそれを知る由もない。
「また貴様か……白兜！　紅蓮はそいつを破壊しろ！　そいつの突破力は邪魔だ、今ここで仕留めろ！」
「はい！」
紅蓮は左手にナイフを構えランスロットへと突撃する。共に最新鋭の高性能機、パイロットとしての操縦技量も並外れた二人。そんな両者が本気でぶつかり合う。
右腕の爪で薙ぐ、ナイフで急所を狙う、回し蹴りを仕掛ける。
後退し避ける、ＭＶＳを起動しいなす、スラッシュハーケンを地に打ち込み飛んで避ける、同時に相手の上を飛び越えながら更にハーケンを打ち込む。
ハーケンを輻射波動で消し飛ばし、一気に距離を詰め相手の体を掴みにかかる。それを避けながら至近距離でヴァリスの狙いを定める。
（貫った！）
しかし紅蓮はランドスピナーを巧みに操り避けると同時に一時距離をとる。まさか避けると思っていなかった為ランスロットに乗っているスザクは動揺した。あの距離で避ける反応速度も脅威だが、自

分の操縦するランスロットにも負けずとも劣らずの機動性を有していることが焦りを募らせる。さらに右腕から発せられる赤黒い光、あれを食らえばいくらランスロットといえど一溜まりもない。一撃必殺の武器と機動性を兼ね備えた敵の新型ＫＭＦ。非常にやりにくいことこの上ない。

「お前さえ倒せば……我々の勝ちだ！」

２機は縦横無尽に動き回り相手の隙を窺いながら攻撃を繰り出し合う。お互い一歩も譲らずの攻防戦、まるで暴風のようで近付くだけでも破壊される恐れがある。

しかし戦いは幕を閉じることになった。崖際で戦っていた為足場が崩れ紅蓮が体勢を崩すと、それを好機と見たランスロットがヴァリスを撃ち出すが、それすらも輻射波動で防ぎ切った紅蓮。しかしその時の衝撃で崖が崩れ、紅蓮はそのまま滑り落ちて行った。

崖の下、カレンの許に扇と玉城の無頼が近付く。

「カレン、大丈夫か」

「扇、紅蓮は？」

ゼロからの通信に扇が紅蓮の状態を確認する。

「右手が破損していて修理しないと使い物になりそうにない」

紅蓮の右腕からは火花が散っており、これ以上輻射波動を使うことは不可能と判断出来た。

ルルーシュが忌々しげに唸り声をあげる。あと少しでコーネリアを捕縛出来たというのに……。だが紅蓮の最大の武器である輻射波動と、最大戦力であるユウの行方がわからない為今は諦めるしかない。

「全軍を撤退させろ、脱出ポイントまで向え！」

ルルーシュは腹立たしさを覚えるが、今は脱出を優先させなければならない。

味方の救援と移送に大分時間を取られてしまった。撤退命令は出たが、まだゼロの反応が戦場に残っている。傍には……ゼロを執拗に追跡している高速機の反応。急がなければ取り返しのつかないことになりかねない。そう思った矢先にゼロの無頼の反応が消滅した。心臓が止まりかけたがまだ死んでいるとも限らない。

ゼロ機の反応が消えた位置まで行くと無頼の残骸を発見、コクピットがないことから脱出したのはわかるが……。機体の状態から飛んで行った方を索敵すると付近にＫＭＦの反応。

「見つけたぁ！」

ゼロは脱出機構で逃げた先で、あの白い奴に追い詰められ対峙していた。

ブーストを吹かせて一気に白いＫＭＦとゼロの間に割り込み、ガトリングガンを掃射するがさすがに機動力が高く掠りもしない。

「ゼロ、無事か」

「あぁ、さすがの私も肝が冷えた。お前にはあの白兜の破壊を任せる、最悪脱出の時間だけでも稼いでくれ」

「白兜……良いネーミングだな。了解、脱出を支援する」

今までもそれなりに高機動機を相手にしてきたつもりだ。特に苦戦したのはアスピナ機関のＸ―ＳＯＢＲＥＲＯ、フラージルだ。最早骨と皮だけと言っても過言ではない位の装甲の薄さに、下手をするとＶＯＢ以上のスピードを出す速度特化型のネクスト。あの時ほどイラついたことはなかった、何しろ弾が当たらないのだから。あれとやりあって勝てたのが奇跡とも思えるくらい当たらない敵だった。

今もそんな気分だ、何だこの変態機動は。跳んで避けてかわして防いで、とにかく当たらん。高性能のＫＭＦとなるとこれほどまでの運動性能を有するのか？　まるで一流のアスリートが自身の体を自在に操るように縦横無尽に機体を動かしている。しかも避けるだけではなく、こちらの機動性の低さを逆手にとって後ろへ後ろへと回り込もうとする。ＱＢを吹かせたりＱＴをしてなんとか白兜を捉え続けるが、想像以上にきつい。

当然避けているだけでなく攻撃もしてくる。右腕に持ったライフルが放たれたのを見た時に不味いと感じた。おそらくこの機体の装甲も易々と削ってくると思われる、そんなものを修理のきかないこの機体に当てさせるわけにはいかない。発射が確認されればすぐにＱＢで回避する。他にも備え付けられたスラッシュハーケンを地に打ち込み飛んだり、こちらに打ち込んで目くらましとしたり、時には腕からレーザーブレードのような物を出して切り掛かってきたりする。しかもそれらを全て後ろに回り込みながら、だ。

そもそも、こいつにこれほどの実力があったとは思いもしなかった。過去2回こいつと遭遇し、そのうち1回は真正面からぶつかっている。あの時はこれ程の技量のある奴ではなかったはずだ。パイロットが違う？　いやそれはないはず。だとするなら操縦者の実力が上がっている。こちらが機動性の低い脚だということもあるが、そんなものは言い訳にならない。最初の対峙でこいつの機動性はわかったはずだ。そしてこいつの所属している軍と敵対し戦っている、ならいつ白兜が出てくるかなんざわからない。それならばそれを想定したアセンにしておくべきだった。それを怠ったのは自分、ならば今回の苦戦は全て自分の責任。セレンさんが居たら怒られそうだな、「良かったな、また一つ賢くなれて」とか皮肉を言われそう。

それなりに時間が経過し、互いに致命傷となる攻撃を与えられないでいる。そうなるとお互いに切れるものがある。白兜の方はエネルギー。当然だ、機械なんだから。こちらが切れそうなのは弾でもエネルギーでもない。ガトリングガンに関しては３５００発というアホみたいな弾数を誇っているし、エネルギーに関しては言わずもがな。切れそうなのは僕自身――僕の堪忍袋の緒だった。

あまりにも当たらないことに苛立ちが募り集中力が散漫になってきた。おまけに白兜のこちらの後ろに回り込もうとする戦い方も腹立たしさを助長させる。

もっと冷静に。そうだ、何時も通り気楽にやれば良い。そう考えても先ほどの頭痛が尾を引いていることもあり苛々とした感情が堰を切ったように止まらない。

そしてついに我慢の限界に達した。
「このっ……！　ＡＣもどき風情が……調子付くんじゃねぇ!!　テメェ如き、Ａ（アサルト・アーマー）　Ａで消し飛ばしてや――」

普段では使用しないような粗暴な台詞を吐きながらＡＡを起動しようとした瞬間に我に返る。誓ったはずだ、この世界を汚染するような行為はしないと。歯を食いしばり怒りを抑え上空に向かって最後の１個のコンテナを撃ち出し、白兜がミサイルの相手をしている間にＧＢを使って戦線から離脱する。

そもそも必ずしもこいつを破壊する必要はない。ゼロの脱出の時間さえ稼げば良いのだから。戦闘に没頭しすぎたか、それとも怒りで我を忘れたか。まだまだ未熟者だ……もっと精進せねばなるまい。

反応が残っていることから白兜は生き延びたらしい。さすがにあれでは破壊は不可能か……。口惜しいが、次こそは必ず息の根を止めてやる。楽しみに待っていろよ。

その後ブリタニア軍は戦闘状態を維持しつつ緩やかに撤退、日本解放戦線は途中から参戦したＫＭＦの部隊と合流しナリタ連山を脱出、黒の騎士団は両軍の隙を突き離脱。こうして今回の戦闘は幕を下ろした。残ったのは三勢力の損害と疲弊のみ。

ナリタ連山から少し離れた場所で、黒の騎士団の団員達は喜びに沸いていた。作戦が無事に終わったことに、生き残れたことに。そこへユウのストレイドが合流し、その姿を見て団員達はまた喜んだ。

作戦開始後すぐに様子がおかしくなったことから、幹部メンバーは心配そうにストレイドから降りてきたユウに尋ねた。
「ユウ、お前あの時一体どうしたんだよ」
「それよりゼロはどこに？」
「一緒じゃないのか？」
ゼロがこの場に居ない、その事実にユウは考え込む。誰に聞いても

知らず、連絡もないという。
「全軍を速やかに撤退させた方が良い。こんな所でぐずぐずしてたらブリタニア軍の事後処理の部隊に見つるかもしれない。ゼロが居ない今指揮権は扇さんにあるから判断は任せるけどね」
　ユウの言葉にまだ作戦行動自体が終わっていないことを思い出し、全員が気を引き締める。扇はその忠告を受け入れすぐに撤退準備にかかった。
「ユウ、あなたはどうするの？」
「ゼロはまだこの辺に居ると思うから、回収し次第僕もここを離れるよ」
　そう言ってユウは細かく指示を出した後、再びストレイドに乗り込み森の中へと消えて行った。
　カレンからすればゼロの捜索を一緒に手伝いたかったのだが却下されてしまった。破損した機体はさっさと帰れ、だそうだ。色々と聞きたいことはあったが、それは次の機会にしよう。そう考えて他の団員と共に警戒しつつ帰路についた。

　白兜との戦闘が始まった時にゼロの傍に女性が居たことをユウは思い出した。そしてその女性が戦闘の際に生じた瓦礫の破片からゼロを守って負傷していた。ということは負傷者を連れての逃走だったということ。ということはそんなに遠くまでは逃げれない、ならばどこかに隠れている可能性がある。
　近辺を捜索すると血の跡を発見、それを追うと洞窟へと続いていた。ストレイドでは入っていけないので機体から降り先へ進む。そして大声で叫ぶ。
「ゼロォォォォ！　居るかぁぁ!?　居るなら返事ぃぃ!!」
　あの血がゼロ達のものではないかもしれないだとか、敵がいるかもだとか、野生の肉食動物がいるかもだとかそんなことを全く考慮にいれずに叫ぶ。まぁそんなものが居たところで武装した強化人間に勝てるわけもないのだが。
「そんなに叫ばなくても聞こえているよ。それで、首尾は？」

洞窟の奥からゼロが歩いて来て、ユウに戦況を尋ねた。
「全勢力が撤退。日本解放戦線は無事離脱、騎士団は先に帰した。ブリタニア軍も撤退はしたけど多分後詰の部隊がすぐにでも来るよ。コーネリアの確保は失敗、白兜の破壊も失敗。こりゃ報酬減額だな」
やれやれといった感じで溜息をつく。そんな姿を見てゼロはユウがいつもの調子に戻っていることを確認して少し安心を覚える。
「そんでそちらの人は？」
ゼロの後ろに居た拘束衣を着た女性について尋ねる。
「心配するな、彼女は私の大事な仲間だ。それよりもお前だ、一体何があった？」
「それについては帰ってから報告するとして、今は一刻も早くここから帰ろう。ただし帰り道は戦車の上ですのでご勘弁を」
「帰り道は楽しそうだな、乗り心地を考えると涙が出そうだよ」
生き残ることが出来たからこそ吐ける皮肉のきいた台詞に、両者揃って軽く笑った。

帰り道の最中、今日の頭痛のことについて考えていた。
頭痛が起きる前に見ていたのは土砂に巻き込まれていく街並み。それを見た途端にあの激痛が始まった。仮定ではあるがあれは記憶が戻りそうになっていたのではないだろうか？　その際の負荷で頭痛が生じたのではないかと。だが何故あんなもので記憶が戻りそうになる？　大量の土砂？　建物の崩壊？　……それとも多くの人々の死……？　一体どれが僕の記憶に関係するというのか……？
そして目が覚めるきっかけとなったあの言葉。
『殺しすぎる、お前らは』
おそらくあの声はインテリオル・ユニオン所属ウィン・D・ファンション、あの人のものだと思う。あまり会ったことはないがセレンさんの知り合いらしく一度だけ話したことがある。真面目そうな人ではあったけど優しい声で話しかけてきてくれた。だがあの時聞いた

声は静かなものであったが、聞いただけで背筋が凍るような殺意や侮蔑等、たくさんの負の感情が滲み出していた。僕はＯＲＣＡ側だったから彼女とは敵対していた。だから命を狙われるのは当然ではあるのだが、僕はそこまで怨まれるようなことをしていたのか……？　”お前ら”というのはＯＲＣＡのことなのであろうか……？　考えるとまた少し頭が痛む。

思い出さなければいけない記憶。だけど思い出してはいけないような気がしてならない。

僕はどうすれば良いのか？

果たして僕は思い出しても僕でいられるのか？

この疑問は以後しばらくの間寝ても覚めても付き纏い、僕を不安に晒し続けた。

13話　傭兵として

ナリタ連山から帰還後、とりあえず僕は帰って寝た。行動不能になった時のことについて色々と話したかったのだが、まだ頭が痛かったので報告は後日すると言っておいた。

首輪を外してベッドで横になった時にウィン・Dに言われたことの意味を色々と考えたが、あの言葉だけではよくわからなかった。可能性としては〝クローズ・プラン〟が無事次のステップに進み、アルテリアのエネルギーが〝衛星破壊砲エーレンベルク〟に流れたことによりクレイドルが墜落、それにより大量の人間が死んだ。その前後に対峙したウィン・Dに言われた、と言ったあたりだろうか。それならばあの言葉も納得がいく。ということはテルミドールの、ＯＲＣＡの皆の悲願は叶ったということなので、その点については素直に喜ばしかった。

一つ頭から消えていた記憶を思い出してほっとする。あの頭痛もおそらくクレイドルが落ちた際に死んだ人々のことを、崩落に巻き込まれる街を見て思い出してからだろう。だがこの言葉に出来ない不安はなんだ？　僕は何に怯えている？　セレンさん達のその後がまだわからないからか……、それとも決定的な何かを見落としている……？　悩んでも悩んでもわからない、不安も消えない。

その日僕は不安から逃げるように再び首輪を付けて寝た。

翌日の夕方、騎士団のアジトの中でゼロと幹部メンバー達にウィン・Dの言葉を除いて大体のことは報告した。

「ってことはあれか？　また戦闘中に記憶が戻って行動不能になっちまうかもしれねぇってか？」

「多少記憶が戻ったから前よりはなりにくいとは思うんだけどね」

まだ穴抜けはあるにしても多少は思い出したのだ、あそこまで酷いことにはならないだろう。

「だがまだまだお前は不安定だ。今後もしばらくはお前を作戦の主軸にはしない。構わないか？」

「居たらラッキー程度に考えてくれた方がこちらとしてもありがたいかな、皆には悪いとは思うけど」
「お前中心の作戦を立てたのに気絶された、よりはいいさ」
　早いとこ記憶が全て戻ってくれるとありがたいんだけど。
「それよりも、だ。白兜に苦戦したと言っていたな？　お前とあの機体なら楽に潰せると思ったが……」
「要因としては頭の痛みが尾を引いていたのもあるけど、何よりも僕の慢心が原因だ。初めて戦った時それほど問題でもないと感じた。だから今回僕は最初なめてかかった、奴は最初から全力で潰しに来てたのに。だから当たる弾も当たらず苛立ちだけが募って余計に弾を外した。僕が未熟者だったせいだ」
　心のどこかでノーマル程度の性能であるＫＭＦに本気でかかることもないと考えていたのだろう。以前は僕がへまをしそうになると必ずセレンさんの叱責の言葉が飛んできた。だが彼女が居ない今、彼女に頼り切っていたツケが回ってきた。その結果があの無様な敗走だ。金を貰って協力しているのにも関わらず手を抜いた。僕は傭兵にとって大事な信頼を裏切ったんだ、これは許される行為ではない。故に今回の報酬は受け取れない旨を伝えておいた。
「誓うよ、もう二度と油断しない。どんな奴が相手でも最初から全力で叩き潰しに行く」
　牢記しなければならない。戦闘で彼女のサポートがないという意味を。
「そう願っているよ」
　おそらくゼロを落胆させてしまっただろう。当然だ、傭兵だからと自信満々に金をせびって結果がこれなら誰でも失望する。だが必ずこの汚名は返上する。あの白兜、僕が油断しているうちに潰せなかったことを後悔させてやる。次こそは必ず――。
「はりきっているのか落ち込んでいるのか知らんが肩の力は抜いたほうが良いぞ、ユウ」
　そう言いながら扇さんが手紙を持ってやってきた。
「扇さん、その手紙は？」

「ラブレター、デートのお誘いだ」
そう言って手紙をゼロに差し出した。
「まさか扇さんにそんな趣味が……!?」
僕の一言にカレンと玉城が同時に噴き出し、カレンは口に片手を当て俯いて肩を震わせ、玉城は腹を抱えて大爆笑していた。僕今そんなおかしなこと言った？
「キョウトからの勅書だよ。直接俺達に会いたから是非来てくれってさ」
「ふーん、大変だねぇ。行ってらっしゃい」
キョウトっていうと確か紅蓮とかをくれたデカい組織だったかな？　騎士団には入ったがあくまでも雇われて協力している僕には関係なさそうだ。最近あんまり寝れてないからその間はたっぷり睡眠時間をとろうかな。
「何を言っている？　お前も一緒だ、ユウ」
「なにゆえ!?」
何で僕まで行かなきゃいけないんだ！　僕の貴重な睡眠時間が減るじゃないか！
「キョウトからのご依頼だ。是非ともミストのパイロットにも会いたいということらしい」
「はぁ……こういうの今回だけだと良いけど……」
心底げんなりする。というかあんまり顔見られたくないんだけど……その組織本当に大丈夫なのか？

早朝のゲットーにキョウトから迎えの車が寄越された。こういう長い車って何て言うんだっけ、リムジン？　中には外が見えないよう窓にカーテンがしてある。向うメンバーはゼロ、カレン、扇さん、玉城、そして面倒なことに僕。本当だったら今頃寝てるのんだけどなぁ……。せっかくなので車に乗って早々寝ることにした。
目的地に着いたのかカレンに揺り起こされ車から降りると何とも無機質な場所だった。所々にパイプが走っていたりコンテナが置いてあったり。側面がガラス張りになっており外を見ることが出来た

ので、そちらに向かい場所の確認をする。山の形からここは富士山だということがわかり皆が驚いていた。富士山には大量のサクラダイトが埋蔵されており、それが原因で戦争になったほどだ。故に富士山には立ち入りが禁止されており、侵入者は尋問なしで銃殺とのことだ。そんな所に入れるということはそれほどまでにキョウトという組織の力は大きいのだろうか？　富士山を見ると半分は建物か何かで構成されてしまっている。

「醜かろう……これが今の富士の姿よ」

老齢の男性の声に振り返ると輿があり、そこに座っている袴姿の男。垂れ下がった幕で顔は見えない。

「顔を見せぬ非礼を詫びよう。だがゼロ、それはお主とて同じこと。儂はお主が何者なのか見極めねばならん。その素顔を見せよ……！」

その言葉で４機の無頼がこの場に現れた。なるほど、見せなきゃ殺すって？　やっぱ家で寝てればよかった。

カレンが必死にゼロを庇っているが爺さんに一蹴され、扇さんにゼロの仮面を外すよう命じた。扇さんはゼロに一言謝った後、ゼロの仮面を外した。すると出てきたのは――。

「お、女!?」

中から出てきたのは髪の長い女性、この人は確かナリタの時にゼロと一緒に居た人だ。名前は帰り道で教えてもらったな、確か……。

「あれ？　Ｃ．Ｃ．さんじゃないの、何してんの？」

「ユウ……知り合い？」

「ゼロの協力者の一人、ゼロと一緒にいるのを見たからゼロ本人ではないね」

「お前……日本人ではないな……何者だ」

「Ｙｅｓだ。キョウトの代表、桐原泰三」

へぇ、あの爺さんそんな名前なんだ。物知りだねＣ．Ｃ．って。

「御前の名前を知る者は生かしておけぬ！」

そういうとお付きのグラサン達が懐から銃を取り出し、無頼達もこちらに銃口を向けた。

なかなかに不味い状況。相手にばれないようにこっそりと腰の

ポーチに手を回そうとしたところで1機の無頼がスラッシュハーケンを打ち出し、その攻撃で2機の無頼がアサルトライフルを落とした。更にその無頼はスタントンファで隣の無頼のアサルトライフルを叩き落とすと、爺さんの輿に近付き銃口を向けた。その無頼からはゼロが出てきた。というかいつの間にゼロはあの無頼の中に潜んだんだろうか？　潜入工作とかあるかはわからないけど、秘訣を聞ければ今後に役立ちそうだな。とか色々考えてたらゼロとかの話をほぼ全部聞き逃した。なんかゼロが日本人じゃない、ということだけはわかったが。そのことについて皆は驚いていたが僕にとってはどうでもいい。

まぁとりあえず話し合いも終わったし敵対もされてないみたいだし帰ろうよ。僕は眠いのだ。

「ではもう一つの要件、ミストの操縦者のことだ」

くそ、覚えていやがったか……ゼロでのインパクトで忘れててくれればさっさと帰れたものを……。

「首輪の小僧、お主だな」

何故か一発でばれたので、とぼけても無駄だろうと思い正直に頷いておく。

「何故僕だと？」

「お主は先ほど銃口を向けられても怯むどころか何か仕出かそうとしておった」

この爺さん、良く見ている。伊達に長生きしてないな。

「お主とあの機体について聞きたい。聞いた話ではお主は正式な団員ではなく傭兵として騎士団に身を置いているそうだな」

「一度対峙した相手に油断して敗走するような三流傭兵ですがね」

下手に目を付けられても厄介なので自虐の言葉で少しでも自分の価値を下げておく。でもまぁ事実なんだけどね。

「調べてみたがお主の戸籍は偽造されたものだった。それにあの機体についてもどこかで製造されたという情報は出てこぬ。小僧、お主何者だ？」

チッ、とっくに調査済みらしくこれでは誤魔化しようがない。ゼロ

に目線を向けると小さく頷いた。仕方ないか……。
自分とストレイドのことについて簡単に話しておいた。僕が異世界の日本人であろうこと、ストレイドが異世界の兵器であること。爺さんのお付きの奴らは如何にも馬鹿馬鹿しいという感じであったが、爺さんの方はさも愉快そうに話を聞いていた。
「なるほど、異世界の兵器か。それならあの性能にも合点がいく」
「意外ですね。小僧の与太話と切って捨てると思っておりましたが」
「嘘か誠かなど問題ではない。お主は成果を出しておる、それだけでも十分よ」
「成果については十分なものだったとは思えませんが」
「謙遜することもない。長く生きた分、それなりに人を見る目は持っておるつもりだ。お主ならやってのけるだろう」
「そりゃどうも……」
変に期待されるても困る。いくら二度と油断しないと誓ったとはいえ僕だって人間だ、ミスもするし道も誤る。だがもしこの爺さんの目が本物で、それを見越した上でそんなことを言うのだとするならば……その期待に応えられるように、今後いっそう精進しよう。そう誓って今回の遠征は幕を下ろした。

その日の夜、ベッドで横になりうとうとしているとノックの音が聞こえたので出てみると会長だった。話しを聞くとシャーリーのお父さんが亡くなられたらしく、埋葬が行われる日時と場所が伝えられた。
「黒の騎士団って知ってるわよね……？　ナリタで戦闘があったらしくて、その時の山の崩落に巻き込まれたそうなの」
その言葉を聞いた途端に頭が真っ白になった。あの時の崩落で……シャーリーのお父さんが……？
そこからのことはあまり覚えていない。気付いたら会長は帰っていたし、外は明るくなり始めていた。

埋葬日当日。雨が降りそうな曇り空はまるでこの場にいる人達の

心情を表しているようだ。棺を埋め始めるとシャーリーのお母さんが泣き崩れていた。この光景を生み出した原因の一端は僕にある、そう考えると今すぐこの場から逃げ去りたい気持ちに苛まれる。
　そうだ……僕のせいで彼女の父親は……。
『だったらそいつらも同じ所へ送ってやれば良いさ。そうすりゃ悲しむ必要もなくなるぜ？』
「っ!?」
　突然頭に過った恐ろしい言葉に動揺して声が出てしまった。
　何だ今の言葉は……？　以前どこかで聞いたことがある声だったような……。
「ユウ……大丈夫……？」
　気付くと皆が心配そうに見ていた。
「大丈夫……大丈夫だとも……」
「そんなわけないじゃない、酷い顔色よ……」
　結局皆に先に戻る旨を伝えた後カレンに付き添われその場を離れた。
「本当に大丈夫……？」
「心配ないよ……僕よりも君の方が心配だ。……あまり自分を責めないでね」
　命令を下したのはゼロでも、あの土砂崩れを起こしたのはカレンの操縦する紅蓮だ。
「私は大丈夫……平気よ」
　そう言った彼女の顔はとても辛そうだった。

　港の傍の倉庫内で次の作戦についての説明が行われていた。ディートハルトというブリタニア人の男からもたらされた情報。コーネリアが海兵騎士団を用いて海外への逃亡を画策している日本解放戦線の片瀬少将の捕獲を目論んでいるとのこと。しかし片瀬少将を逃がすよりもコーネリアの捕獲を優先した作戦内容であることにメンバーの一部は困惑しているようだったが、最終的にはゼロの一言で皆の迷いは吹っ切れたようだった。

ブリーフィング終了後、カレンはゼロに用があったみたいだがゼロはやることがあると足早にその場を去った。僕も少し話したいことがあったのでカレンと後ほどゼロの所へ共に向かうことにした。
辺りは暗くなりもうすっかり夜になった。ゼロが居ると思われる倉庫へとカレンと共に向かう。
「っ!? 誰だ?」
ゼロは上半身が裸でマスクを外し頭にタオルをかぶっていた。倉庫は真っ暗なので素顔は見えない。見ようとも思わないが。
「僕とカレンだ」
「どうした」
「少し話を……と思ってね」
壁に寄りかかり俯きながら話始める。
「友人の父親が……ナリタでの作戦に巻き込まれて死んだよ……」
カレンとゼロが体を震わせたのを感じた。
「自らが行ったある行動のせいで人が死んだ時、もう二度と誰かを巻き込むまいとその行動をやめるのか。それともその犠牲を無駄にするわけにはいかないとその行動を続けるのか……。僕はね、後者だ。彼女の父親を殺したんだ、もう止まることは許されない。今後もひたすら戦い続け、殺し続ける。そして役目を終えたら彼女に全てを話して……銃を渡すよ」
それくらいしか償う方法がないのだから。
「あの土砂崩れを起こしたのは私よ……! あなたが何かしたわけじゃない……」
「……そしてあの作戦を考えたのは私だ。裁きを受けるとするならば私だと思うが」
カレンもゼロも気丈に振る舞っていても、罪のない人々を巻き込んだことを悔やんでいるのだろう。だからこそ裁かれるべきは自分だと主張する。
だが――。
「知ってたんだ……あの作戦であれだけの被害が出るだろうっていうのは。でも僕はあえてそれを言わなかった、自分には被害がないから

という理由で。それに平和になり戦いが終わったとしても、君達はこの世界には必要な人間だ。僕は……戦うことしか能のない、平和な世界には不要な人間だ」

それに……セレンさんが居ないなら無理に生き続ける必要もあるまい。優しい言葉をかけてくれたナナリーや生徒会の皆には悪いとは思うけど、僕はあの中には居てはいけない人間なのだから。

話は終わったのでその場を去ろうとすると後ろから言葉を掛けられた。

「やはりお前は今回は前線には出てこない方が良い」

「……何故？　白兜が出てくるかもしれない。今回は必ず潰すって――」

「以前のお前なら任せたさ、必ず始末するだろうという確信の持てる決意が見て取れたからな。だが今のような心の弱り切ったお前では刺し違えてでも始末しかねない。お前は必要な人間だ、こんな所で死んでもらうわけにはいかない。以前話した通り今回お前は後方から敵を狙撃しろ、いいな？」

僕は今そんなに危なっかし状態なのだろうか。だが命令された以上は従わなければならない。

「わかった……今回はゼロの言った通り狙撃に徹するよ」

作戦が開始された直後、日本解放戦線の船が爆破したことにより大規模な爆発音と爆風が吹き荒れる。

「流石だな、日本解放戦線。敵を巻き込んで自決するとはな」

どうやら片瀬少将達は船ごと爆発させることで船に取り付いていた敵を巻き込んだらしい。その話の真偽は定かではないが今はどうでもいい。

隠れていた建物の陰から狙撃用の装備で組んだ機体でブーストを使ってコンテナの上へと飛び乗り、後ろ脚に備え付けられたアンカーを打ち込み機体を固定し両腕のスナイパーキャノンを展開して陣取る。船で敵陣へと突っ込んだ味方へと銃を向けるサザーランドに一発ずつ交互に撃ち続ける。今回使用しているのは四脚なので、以前河

口湖で二脚で行った狙撃よりも大分安定して撃つことが出来る。使っているのは以前と同じスナイパーキャノンなので掠るだけでも四肢を吹き飛ばし、直撃すればそのまま爆散する。
今のところ精神的に不安定になることはなく、しっかりと狙撃を続けることが出来ている。殺し続けることを改めて決意したのも安定した要因だろうか。
港の敵は大方殲滅したところで港から少し離れた所から爆発が起こったかと思うと、コンテナの上に紅蓮と白兜が躍り出たのを見て思わず顔がほころぶ。まさかいきなり雪辱を果たすチャンスが巡ってこようとは。奴は今現在紅蓮との交戦に気をとられこちらに気付くこともない。
紅蓮に当てないように奴の背中のコクピットにしっかり狙いを定めトリガーを引く。弾丸はまっずぐ飛んで行き、コクピットに――当たることはなかった。当たる瞬間に僅かに紅蓮の攻撃で押されてよろけたことにより左腕だけを吹き飛ばして、その衝撃でコンテナの向こう側へと落ちていった。追撃して止めを刺したいところだがここから離れるわけにもいかない。
「後ろから撃つのは卑怯だと罵るかい？　ランスロットのパイロットさんよ。だけど殺すと決めた以上こういった手口も使わせてもらう……許せ」
仕留められなかったことを悔やみつつも、今回は相手の運が良かったのだと自分を納得させ港に残っている敵の狙撃に戻る。
「聞こえるか？　全軍撤退する」
扇さんからの通信が入った。……撤退？
「何かありましたか？」
「ゼロが負傷したらしい」
「……了解、味方の撤退を支援します」
ゼロの怪我の程度は気になるが、今は狙撃で味方の撤退を援護しよう。と思ったがいうほど敵の攻撃はなかった。どうやら敵もかなりの被害を受けているらしく、こちらを追撃するほど余裕はなかったためと思われる。

結局この作戦でもコーネリアの確保には至らずに終わった。後ほどゼロが無事が確認されたのでほっとしたものの、作戦終了後に会ったゼロはどことなく焦っているようにも見えた。僕が気にかけても仕方がないので触れないでおく。何かあったらゼロから話を持ちかけられるだろう。

その夜にまたあの夢を見た。空間は以前からは何も風景は変わっていない。変わったところがあるとるれば声が出せるようになっていたところか。ようやく自分の思いを伝えることが出来ると目の前のセレンさんに話しかけた。

「今後の目標は決まったよ、セレンさん。そっちに戻ることが出来るならばもう一度会って話がしたかったけど、多分それは叶わないだろう。僕はこの世界で傭兵として戦い、傭兵として死ぬ」

セレンさんは悲しそうな表情をし、口を動かした。おそらく何か喋っているのだろうが声が聞こえてくることはなく、喋り終えると彼女は消えてしまった。だが口の動きである程度はわかった気がする。

「思い出すな……？　それって……どういうこと……？」

そう遠くない未来で僕は彼女のこの言葉の意味を知ることとなった。

１４話　片鱗

ある日の午後、ルルーシュとスザクに会うと何故か凄い感謝された。なんでも不審者がナナリーのことを襲おうとしたらしいのだがソルディオスのおかげで事なきを得たんだそうな。２人がナナリーの許へ向かおうとした時に男の叫び声を聞き、急いで駆けつけるとソルディオスから攻撃されていたらしい。不審者は２人がしっかりと始末したそうだし大丈夫だろう。怖い意味に聞こえるけど普通に警察に渡しただけだと思う、多分。

「お前には感謝してもしきれないよ」

「気にしない気にしない。僕もナナリーに助けられたし」

「僕からも礼を言うよ。僕にとってもナナリーは妹みたいなものだし」

そう言ってスザクからも心から感謝された。こうやって最低限身近なところだけでも守っていければ良いのだけれど。もうシャーリーの時みたいなことは御免だ。

シャーリーと言えば最近ルルーシュと喧嘩中らしく、他人ごっこなる状態になってるらしい。何やってんだか。

翌日の休み時間にゼロから電話がかかってきて、日本解放戦線の生き残りが騎士団に接触してきたらしいことを聞いた。

「んで、彼らとの顔合わせがあると？」

「お前は彼らを信用出来ないと判断したら無理に顔を出す必要はないがな。それから紅蓮を作った人物とも会うかもしれん。そちらの方はストレイドにも興味を示していたから機体の整備状態で不十分に感じるところがあるのなら見せてみるのも良いかもしれんぞ」

「考えとくよ。それなら今からアジトへ向かってみるよ」

「お前は学生だろう、授業はいいのか？」

「さーぼーりー」

「……ほどほどにな」

初めてのさぼりに少しワクワクしてたりもするのだよ。

機体置場として利用いる倉庫へ着くと扇さんと一緒に軍服を着た人達がいた。

「あぁ、ユウ良いところに……お前学校は？」

「さぼった！」

満面の笑みで答えたら何とも言えない表情になってしまった。というか何故皆そんなに学校のことを聞くのかね。いや確かに大事だけどさ。

「ゼロから電話もらったからもんで、ついつい気になって来ちゃいましたよ」

「その少年は……？」

白髪頭の如何にもベテラン軍人といった風貌の男性が僕を見ている。

「あぁ、彼は――」

「ストップ、僕が自分で言います。黒の騎士団所属、ユウ・ヘイズと申します。以後、お見知りおきを」

自己紹介をし頭を下げる。下手に他人に紹介を任せて余計な情報まで相手に与えてもらっても困る。

こちらの自己紹介が終わると向こうも一人ずつ名前を教えてくれた。最初に話した白髪の男性が仙波さん、右目に傷があり眼鏡をかけているのが朝比奈さん、一番背が高い卜部さん、そして唯一女性の千葉さん。彼らは”四聖剣”と呼ばれ日本解放戦線で藤堂中佐と共に凄まじい活躍をしているという話を以前聞いた。

「あなた方が四聖剣でしたか、お噂はかねがね伺っております」

相手がどういう目的で接触してきたかわからない為、成る丈丁寧に話す。隣で扇さんが驚いた顔をしているのが気になるが……。いや、僕だってこういった対応とれますよ？

「騎士団にいらっしゃった要件は？」

「藤堂中佐の救出に力を貸して頂きたい」

どうやら潜伏していたところを敵に見つかったらしく、彼らを逃が

す為に藤堂中佐が一人犠牲になったそうな。ちなみに救出についてゼロはすでに承諾済みとのこと。
「それなら僕がとやかく言う必要もありませんね」
後は彼らとどういった距離を保つかが問題だ。
「それで、君は何者だい？」
朝比奈さんが鋭い瞳で僕を見据えた。その瞳を無言で見つめ返し、そのまま一人一人の目を見ていく。少なくとも彼らは純粋に藤堂中佐を助けたくてここに来ているというのを感じる。どっかの爺さんじゃないけどそれだけは確信出来る。それほどまでに藤堂という人物は慕われているのであろう。
貴重な戦力であるし実戦経験も騎士団のメンバーとは比べ物にならないことから、おそらくゼロは藤堂中佐を救出後そのまま彼らを騎士団に誘い入れると思う。ならば今下手に溝を作って距離を空けておくよりはこちらから近寄っておいた方が良いと思われる。
「ここで雇われてる傭兵です。救出作戦にもおそらく参加しますのでその時はよろしくお願いします」
にっこり笑って答えると、向こうの警戒も少し緩んだ。
「ほう……？　その年で傭兵とは珍しいですな」
仙波さんが感心しながら僕を見ていた。
「これでも彼は騎士団の最高戦力ですよ。……色々と問題も抱えていますが」
「え、もしかして暗に性格悪いって言ってます？」
「いや、そうじゃなくてだな……。はぁ……お前と話してると時々異様に疲れる時があるよ……」
「まぁわざとやってる時もありますしね」
「なかなか良い性格をしているな。はっはっは！」
ト部さんは見かけによらず朗らかな人なのかな。それに反して朝比奈さんと千葉さんは僕を見定めるように鋭い視線を送り続けている。この二人には注意した方が良いかもしれない。まぁガキの身分で傭兵だ最大戦力だなんて信用出来ないのもわかるが。
「もしや……君がミストの搭乗主かい？」

「ご不満でしたか？」
「どちらかというと驚いているよ。君のような少年が乗っているとは思いもよらなかった」
「へぇ～、アンタがあれの搭乗主なの？」
　後ろから歩いてきて会話に交じった一人の女性。白衣を着こみキセルを咥え額にはチャクラの化粧、肌は浅黒く髪は長い。東南か南アジアの人間だろうか？
「彼女はラクシャータ、紅蓮弐式の生みの親で今回提供された新型機のデータ収集のために来ている」
「ふぅん、予想以上に若いわね？　まぁそれはいいわ、アンタの機体……何だったかしら、ミスト？　あれを少し見せて頂戴」
　この人がゼロの言っていた人物か。今会ったばかりなのに直感でわかったが、多分この人は僕の苦手なタイプだ……。まぁ苦手でもそれなりの対応はとれるのだけど……。
「正確にはストレイドという名前です。作戦の為の調整があるのでよろしければどうぞ。それでは四聖剣の方々もどうぞごゆっくり」
　一礼して機体の許へ向かう。

　機体を見たラクシャータさんの目が先ほどまでとは打って変わって真剣なものとなり、色々な方向からストレイドを観察していた。その間何も喋らずじっとストレイドだけを見ていたので、彼女を放置し機体の調整や武装の変更等を行った。
「コクピットも見せてもらえるかしら」
「……どうぞ」
　彼女はコクピットを軽く見渡すとすぐさま満足したように去って行った。彼女のような人間ならこの機体のことについて根掘り葉掘り聞いてくるかと思ったが特にそのようなことはなかった。特に興味がないのか、それとも今は新型機のことに集中する為にあえて聞かなかったのだろうか。まぁ何にせよ作戦前にあれもこれもと色々聞かれるよりはマシか。

今回の作戦はブリタニア軍の基地にて処刑が予定されている日本解放戦線の生き残り、”奇跡の藤堂”の異名を持つ藤堂鏡志朗の救出。作戦にはゼロの無頼とカレンの紅蓮弐式の他に、日本解放戦線の四聖剣にてデータ収集が行われる紅蓮弐式の量産型である”月下”、そしてストレイド。

イシカワゲットーにて武力蜂起が起こった為、コーネリアの部隊はそちらに駆り出されているので救出と月下のデータ収集には大変都合が良いと言える。

「ユウ、お前は正面ゲート前の敵を破壊後は周囲の警戒と援護程度で構わん」

「まだ安定してるとも言えないからねぇ」

「それもあるが今回の作戦は月下のデータ収集も含めている。何か問題が起こったらお前は遊撃として臨機応変に対応してくれ」

「りょーかい」

基地から少し離れた地点にて最終確認の最中である。そんな中最終チェックを終えて待機していたユウの前に四聖剣が近付いてきた。

「なるほど。これがミスト……いや、ストレイドだったか？　確かに今迄に見たことのないタイプの機体だな」

「こんな重量機であの高速度を出すというのも俄かには信じ難いものだな」

ストレイドを見上げながら千葉とが仙波が呟く。

「あの右肩に付いているのは何だ？」

ト部が興味深そうにストレイドの右肩についた物体を指差しユウに尋ねる。それはまるで輪っかから切り取ったような湾曲した金属の板に取っ手を付けたような武器。

「何となく近接武器だというのはわかるんだが……切るにしては刃に鋭利さがないし、かと言って突き刺すにも叩き潰すにも向かない形だ」

「月下に装備された廻転刃刀のような刃がついているわけでもないし

ね」
　廻転刃刀はチェーンソーのような刃が刀身に付いており、それを高速回転させることにより切れ味を格段に上げることが出来る武器である。ストレイドの近接武器にはそれのような刃がついているわけではない、かと言って普通に切ったり刺したり叩き潰したりする武器にも見えない。
「あれは刃の部分からエネルギーを形成して相手を切り裂く武器、要はエネルギーブレードです」
「エネルギー兵器とは……そんなものまであるとはな」
「あながち異世界人というのも嘘ではないかもしれませんな」
　その言葉にユウはあっけにとられてしまった。自分はそんな情報を相手に示した記憶がないのにそれを知っていた四聖剣の面子。
「……どこでそれを？」
「あぁ、騎士団の幹部やキョウトから聞いてね」
　別にそこまで徹底して秘匿するつもりもないが、この話はどこまで広がっているのか考えたくもないとユウは頭を抱えた。

「全機、作戦行動開始。ユウ、任せたぞ」
　戦闘開始の合図と同時にストレイドが正面ゲートへと突っ込む。ゲートで検問中の軍用トラックの列に向けガトリングガンのトリガーを引き絞り破壊してゆく。異変に気付いたサザーランド計５機、手始めにこちらに向かってきた２機をガトリングガンで蜂の巣にする。２機ともコクピットごと穴だらけとなり脱出装置が作動することもなく吹き飛んだ。
　次いで右腕を肩に備え付けたハンガーの湾曲した武器と交換しながら一気に近付き、離れた位置にいた機体を左腕のレーザーブレードで切り裂く。ＯＲＣＡ旅団の真改が使っていた武器である。
（相変わらず彼は頼りになるな）
　ユウは少し頬が緩ませるが、残りの２機がこちらにアサルトライフルを乱射してきたので気持ちを引き締める。持ち替えた右腕の武器を並んで撃ち続ける２機に近付き思いっきり振るうと敵はまとめて

破壊され爆発した。したのだが、その光景は切り裂いたというよりも吹き飛ばすとか消し飛ばすという言葉の方が近く感じられた。ブレードを振るった途端強力なエネルギーが発生し、２機まとめて爆散させたのだ。

「正面ゲート前確保」

淡々と結果を報告するユウ。この間わずか１８秒。

「まさか本当にたった一人で制圧してみせるとは思わなかったよ」

「優秀でしょう？　うちのユウも」

一瞬で片付いたゲートを見て感嘆の息を漏らす朝比奈に、カレンは自分のことのように喜びながらユウを自慢する。

「よし、次だ。四聖剣は敵の陽動と撃破を頼む。カレンは私と来い」

全機がそれぞれ散っていく中、ユウは外壁を登り周囲を警戒する。その最中四聖剣の月下に目をやる。

「凄いな」

思わず口から言葉が漏れた。月下はそのスピードを活かし右へ左へと移動して敵の攻撃を避けながら接近し、手に持った廻転刃刀で次々に敵ＫＭＦを切り刻んでいる。流石は紅蓮の量産型であるが、何よりも四聖剣の連携がとても上手い。一人が近接を仕掛ければ、すぐにそれに呼応して片割れが側面から回り込みアシストする。その機動力に惑わされ隙を見せればすぐに別の月下が左腕に装着された連射砲で風穴を開ける。結局目立った損傷もなくたった４機で大半を破壊し尽くしてしまった。

（彼らみたいなのが向こうに居なくて助かった）

月下は合図を送り、それを見た騎士団のトレーラーが外壁を破壊して中に入ってくる。それとほぼ同時に無頼と紅蓮がこちらに戻ってきた。無頼がトレーラーの許に来るとそのコクピットから凛々しい顔立ちの男性が出てきた。

（なるほど。あれが藤堂中佐か）

藤堂はトレーラーに積み込まれた指揮官用の月下へと乗り込む。通常の月下が灰色なのに対し、こちらは真っ黒なボディにまるで髪の毛のような赤い衝撃拡散自在繊維が二房ついている。後はこの基地

をある程度攻撃して退却するだけ。だがそれを良しとしない機体が高速で接近する。
「白兜……！」
何たる僥倖であろうか。この場に白兜が出てきたことにユウは歓喜した。別に殺しを楽しむような趣向は持ち合わせているわけではないが、あの機体が出てきた時だけは興奮を抑えきれない。すぐに外壁から下り白兜の許へ向かう。しかし既にゼロ達と白兜の戦闘は始まっている。7対1での戦闘、にも関わらず白兜は一歩も引かずに戦い続ける。避けて防いで反撃して……だが7機を前に勝てるわけもなくまんまとゼロの策にはまり、ユウが辿り着く頃には藤堂の攻撃でコクピットの上部を切り裂かれてしまった。そしてそこから現れたのは――。
「なっ!?」
「ええ!?」
「スザク君……なのか?」
白兜のコクピットにはゼロことルルーシュやカレン、藤堂が知る枢木スザクがそこに居た。三人とも反応は様々ではあるが、皆驚きを隠しきれていなかった。ルルーシュにとってはかけがえのない親友、カレンにとっては生徒会の大事な仲間、藤堂にとってもスザクが幼い頃に面識があり知らない仲ではない。
「ゼロ、指示を……！　どうしますか、ゼロ!!」
動揺するカレンの声はルルーシュには届いていない。ずっと殺そうと考え続けていた相手がよりにもよってあのスザクだった。今迄自分達を邪魔し続けていたのも、危うく殺されかけた相手も全て……。
（何故……どうしてお前がそこに……!?）
指示を出さなければいけない状況と立場であるにも関わらず思考が追い付かない。体が震え、指先一つすらまともに動かすことが出来ず、心臓の鼓動が早くなり息も荒くなる。
（お前はそこに居ていい人間じゃないのに……！）

「く……くっはっは……！」
その時その場に誰かの笑い声が漏れる。その声は他ならぬストレイドから漏れていた。
「あっはははは……！　あっはっはっはっはっは!!」
外部スピーカーになっているからか、その場に居た全員に声は届いている。まるでどこかが壊れたかのように笑い続けるユウ。その声はマシンボイスによるせいでより一層不気味さを際立たせており、そのあまりの異様さにルルーシュが我に返る。
「最高だ……！　最っ高に最悪な気分だ……！　あっはっはっはっは!!」
言っていることと声のテンションがあまりにも食い違う。味方どころか敵であるスザクですら困惑している。
「上等だぁ!!　テメェが俺の目的を阻むってんなら……！　この世から跡形もなく消滅させてやらぁな!!」
「やめろ!!」
白兜に切り掛かろうとブーストを全開にして突撃する寸前にゼロの制止がかかりすぐに機体を抑え込む。
「全機……白兜に構うな……！　目的は達成した……撤収だ……！」
空路から敵の増援が近付きつつあるのを確認するとユウは軽く舌打ちをし、白兜と距離をとり右腕のブレードを突き付けて宣言する。
「次は……殺す」
ありったけの殺意を込めた言葉。
月下達はチャフ・スモークを発しながら撤退し、ストレイドもその煙に紛れてその場から姿を消した。

カレンはアジトに戻るとすぐにユウの許へと向かった。あまりにも普段とかけ離れた言動に心配になったことと、スザクのことで話がしたかったからだ。しかし機体から出てきたユウの目があまりにも恐ろしく話しかけるのを躊躇してしまった。日頃の優しい瞳はどこにもなく、その目は睨むだけで人を殺せそうなくらい鋭く殺意をまき散らしていた。だがその反面、顔は笑っていた。

結局話しかけることが出来ず、ユウはゼロの部屋へと向かって行った。

アジトにある自室に着くと椅子に座ってマスクを外し一息つく。
よりにもよってあの白兜のパイロットがスザクだった。ブリタニア軍に所属しているのだから最初から敵対しているのはわかっていたことだが、まさか前線に出て戦い、おまけに自分達を最も苦しめている存在であったとは。これから自分はどうするべきか。あいつが白兜のパイロットとして戦い続ける限り今後も邪魔になってくるのは間違いない。であればあいつを殺すしか――。いや駄目だ、あいつを殺すなど……。であればギアスを使うか、それともＫＭＦを操縦出来ない程度に怪我をさせるか……？　駄目だ、今はとてもじゃないがまともな思考が出来るような状態じゃない。
解決策が思い浮かばない難問に頭を悩ませていると扉を叩く音が聞こえ慌ててマスクをつける。入室を促すと入ってきたのはユウだった。しかしとてもユウとは思えないような目つきをしていた。
「……酷い表情だな」
「そんなに酷いかな……？」
「あぁ……誰彼構わず睨み殺しそうなくらいにはな……。大丈夫か？」
「大丈夫……じゃないね。白兜……あれのパイロットさ……友達だったよ」
「それにしてはきつい言葉を浴びせていたな」
あの時のユウの言葉には明確な殺意を感じた。
「もう決めたからさ……どんな犠牲を払ってでも騎士団に協力して日本を取り戻すって。……どうする？　命令してくれれば直接殺すけど」
そう言ったユウの表情に迷いはない。おそらく命令されれば躊躇いなくスザクを殺すであろう。

「いや……奴にはまだ手を出すな。私にも考えはあるのでね」
「そっか……うん、わかった……」
そう言ってユウは立ち上がって扉へと向かい、こちらに顔を向けずに信じられない言葉を発した。
「迷う気持ちもわかる……でも決めなければならない。僕も君も……もう戻れない」
ユウはそのまま部屋から出ていった。
……待て、今あいつは何て言った？　君……？　あいつは俺個人に対してそんな言葉を使っていたか……？　まさか……正体がばれた……!?　いや待て、あいつに対して正体がばれるような言動をした記憶はない。ただの思い過ごしか？　だったら今のあいつの言葉は何だ。俺が考え過ぎなだけなのか。ギアスを使って聞き出すか？　駄目だ、もしそれで正体がばれていたのなら記憶を抹消することが出来なくなる。だったら俺の正体の記憶だけ消しておくか？　だがそれだといざという時にあいつにギアスをかけることが出来なくなる。
「くそっ……！」
問題が多すぎて頭が痛くなる。やはりお前は俺にとってもイレギュラーだったか……ユウ。

自室のベッドで横になりながらユウの顔を思い出す。あんな怖い表情は見たことがない。ユウの記憶が戻って欲しいとは思う、けれど戻ったらユウがユウでなくなってしまう気がしてならない。
「大丈夫だよね……？　ユウ……」

15話　翻弄

藤堂中佐救出作戦以降誰とも会っていなかったユウは、ゼロに呼び出されてアジトに使っているトレーラーへとやって来た。アジトに入ると言い争う声が聞こえた。中では藤堂、扇、ディートハルト、ラクシャータ等の主要なメンバーとゼロが話し合っており、ユウが入ると皆の視線を一斉に浴びた。場の雰囲気は非常に険悪でユウはそんな時に入ったことを後悔した。

（入らなきゃよかった……）

「おや……ちょうど良い、是非あなたの意見をお聞きしたい」

そう言ってディートハルトはユウに質問を投げかけた。

「あなたは枢木スザクをどうすべきだと考えますか？　私としましては暗殺するのが妥当かと考えております」

話はこうだ。スザクがブリタニア皇女の一人から騎士として選ばれたことでブリタニアに恭順した日本人の旗印になる可能性が出てきた。それはゼロが日本を取り戻すという目的には邪魔でしかない、だから暗殺するのがベストであると。これに対し藤堂や扇は反対しているという。

「それについてはあの日作戦後にゼロと話しました。今は奴には手を出さないという考えをお聞きしました、ならそれに従うまでです」

「しかしそれはあの時点での話でしょう。今現在彼はブリタニアの第3皇女ユーフェミアの騎士となりました。状況が違います」

ディートハルトとしてはさっさとスザクに消えてもらいたいという気持ちが強く、ユウもそれを感じ取っていた。

「奴が何になろうと僕には関係ありません。僕は傭兵ゼロは雇い主。命令に従うだけ、これが僕の意見です。他に何か？」

「いえ……あなたの意見はわかりました」

ディートハルトは食い下がることもなくすぐに話しを終えた。

そんなユウに鋭い眼差しを向ける藤堂。藤堂からすれば救出作戦以降会っておらず他人から人物像を聞いた程度である。作戦時の言

動を見ると警戒するに越したことはないのだが、騎士団のメンバーからは信頼されているらしくあまり悪い話は聞かない。
（こうして見ている分には普通の青年だが……）
スザクとは同じ学園で友人だというのだが、スザクを見た時の反応からはとてもそんなことは想像出来ない。藤堂は時間をかけてユウを見定める必要があるという判断を下した。

「あぁそうだ、一つ大事なことがあったんだわ～。忘れるところだった」
とりあえずスザクには手出ししないことが決まり解散となるかと思ったらラクシャータが話を切り出した。
「ＫＭＦに関することか？」
「ちょっと違うわ、そこの首輪の坊やのことについてよ」
ユウにとってラクシャータは苦手な人物であるためその彼女から名前を出され何事かと少し身構える。
「アンタの機体だけど、少し調べさせてもらったわ」
「……倉庫のセキュリティにトラップしかけておいたはずなんですけど」
「ンフフッ、あんな程度私には児戯にも等しいわよぉ」
ユウは頭痛に耐えるように頭を抱えた。
「機体の性能は素晴らしいわね、ただのＫＭＦじゃ敵わないのも無理ないわ。でもその上で言わせてもらうけど……アレに乗るのはもう止めておきなさい」
茶化すような雰囲気から一転、真面目な顔つきでとんでもないことを言い始めたラクシャータに扇が食って掛かる。
「ちょ、ちょっと待ってください！　いきなり何を言い出すんですか！　ユウもストレイドも騎士団にとって重要な戦力なんですよ!?」
「ええ、だから代わりのＫＭＦなら私が用意してあげるわ。アレをバラして技術を流用させてもらえれば、アレより劣るとはいえ多少マシなのが作れるわよ。異世界の兵器なんでしょ？　アレ」
「そういう問題じゃなくてですね……！」

「なら聞くけど……アンタ達にとって首輪の坊やは……何？」
　立ち上がって必死に抗議する扇、あくまでも冷静に言葉を続けるラクシャータ、自分のことのはずなのに蚊帳の外状態になったユウ、成り行きを見守るゼロ、藤堂、ディートハルト。
「な、何って……」
「大事な仲間？　それともただの傭兵、戦う為の使い捨ての道具？」
「仲間に決まっているでしょう!?」
「だったら二度とアレに乗せないことね。あんなもの、人間が乗るような代物ではないわ。首輪の坊やもわかってるのかしら？　アレがどれほど危険なものなのか」
　そう言って彼女はユウの目をじっと見つめるが、ユウは口を開かずその目を見つめ返す。
「そう……覚悟の上って訳ね」
「それほど危険なものなのか？」
「今後も乗り続ければまず間違いなく長生き出来なくなるわ。詳しくデータをとったわけじゃないからわからないけど、おそらく体にかかる負荷が大きすぎる。たとえそれが散々弄った後の体であっても……ね」
　ユウが異世界人ということは騎士団の多くに知れ渡っていることだが、体のことについてはあまり話していないはずなのだがラクシャータには見抜かれていた。
「まぁ乗りたいなら乗せてあげればいいんじゃない？　操縦系統が全然違うからＫＭＦに乗ってもすぐには動かせないだろうし、アレみたいに上手に動かせるとも限らないしねぇ」
　ユウ自身、ハイブリッドというものがどういうものか詳しく知っているわけではないが、ネクストより危険は少ないと思っていたためラクシャータの言葉を全て信じることが出来ず頭の中で仮説を立て始めた。
「そうそう、それからもう一つ。足の方は大丈夫かしら？」
　そんなユウに対してラクシャータは遠慮なく更なる爆弾を放り込んだ。

「……何故それを？」
「別に私はＫＭＦ専門ってわけではなくてよ？」
「……ご心配なく。それから他言無用でお願いします」
（……やはり苦手だ）

「何を迷う必要があるんだか。殺したくなければさっさとギアスを使えばよいものを」
「黙れ……！　ただでさえ今はいくつも問題を抱えているというのに……」
「問題……？　何かあったのか？」
　クラブハウスの自室でＣ．Ｃ．と話すルルーシュは、いくつも抱えた大きな問題の解決法を必死に思考しているところである。一つはスザクをどうするか、もう一つは――。
「ユウに正体がバレた可能性がある。確証はないが可能性もゼロではない」
「まったく、何をやっているんだか。まだまだ詰めが甘いな坊やは」
　ベッドに寝転がりながら心底呆れたように溜息をつく。
「正体が知られるような要素はなかったはずだが……。そういうお前の方こそどうなんだ、勝手に出歩いたりしているだろう」
　Ｃ．Ｃ．は時たま気ままに外を出歩いたりしておりその度にルルーシュは肝を冷やしている。
「それこそありえないな、私を誰だと思っている。そちらの方こそさっさとギアスを使えば心配事も減るだろうに」
「あいつだから使えんのだ。あいつが欠ければ一気に不利になるのは間違いない。下手にギアスを使えばいざという時に使えなくなる」
　もし正体を知られていなければ無駄になる、かと言って正体を知られていれば放置しておくのは危険だ。だがもし一度でもギアスをかけてしまえばもう効かなくなる。もしユウが自分の下から離れていくようなことになれば何らかの対処をしなければならない。その為にはギアスは残しておくべきである。
「命令に従うようにギアスをかければ良いだろう」

「駄目だ、それでは色々と不都合が生じる」
「だったら直に聞いてみればいいだろうに。『お前は私の正体を知っているのか』ってな」
　その言葉に僅かに反応し、そうした場合のことを少し考える。
「たとえお前の正体がバレていたとしても、あいつにとってお前は〝ルルーシュ・ランペルージ〟だ。〝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア〟ではないし、その存在すら知らんだろう」
「それなればこそ疑問に思うはずだ。たかがブリタニア人の学生如きが何故日本人に肩入れしてブリタニアを潰そうとしているのか」
「ならばいっそのこと思い切ってある程度打ち明けてしまっても良いかもしれんぞ？　その上で己の腹心としておければ後々役にも立つだろうさ。危険だと判断したらギアスを使ってその辺りの記憶を削ってやればいい」
　どうすることが最善かを必死に考え続けるが、結局その日に答えが出ることはなかった。

　現在、アッシュフォード学園では生徒会主催でスザクの騎士着任をお祝いするパーティが催されている真っ最中である。たくさんの生徒が生徒会のクラブハウスに集まりスザクを祝い、パーティを楽しんでいる。
「いや～、まさかうちの学園から皇族の騎士が出るとは思いもよらなかったなぁ」
「まったくだな。おめでとう、スザク」
「ありがとう、ルルーシュ」
　生徒会のメンバーもスザクの許に集まってお祝いの言葉を送っている。だが生徒会全員と言うにはメンバーが一人足りなかった。
「あれ、そういえばユウは？　こういうの一番好きそうだけど見ないわね」
「ここ数日体調不良で休んでたんですよ。まだ調子悪いのかなぁ」
「私ちょっとユウの様子見てきます」
　そう言うとカレンはユウの部屋へと向かうことにした。前回の作

戦以来まともに会っていなかったので、嬉しさ半分不安半分といった様子。
部屋の扉を叩くと中から弱々しい返事が聞こえてきた。出てきたユウの目の下には隈が出来ており、酷く疲れているようだった。
「やぁ……カレン、どうしたの……？」
「それはこっちの台詞よ！　大丈夫……？」
「ちょっと寝不足でね……良かったら入って」
体調が悪いならとカレンは躊躇したが、ユウが大丈夫だと言うのでお邪魔することにした。共にベッドに腰掛け話を聞くと本当に単に寝不足なだけらしい。
「寝不足なら余計にお邪魔しない方が良かったんじゃない……？　寝た方が良いだろうし」
「寝てないんじゃなくて寝られないんだ。ここ数日寝ると恐ろしい夢を見てね……」
一瞬子供かと突っ込みそうになったカレンだったが深刻そうなのでやめておいた。
「最近いつも寝てしばらくすると夢を見て目が覚める。何か恐ろしい夢なのはわかるんだけど、内容は覚えていないんだ。それで起きるともうそこから眠れない」
「それで寝不足なのね」
カレン自身寝つけない時はどうしたか思い出してみることにした。色々考えてみると子供の頃に母がしてくれたことのおかげで安心して眠れたことを思い出した。
「……膝枕とかが良いのかなぁ」
「へ？」
「だから膝……あっ！　いや、昔眠れなかった時にお母さんが膝枕してくれたことがあってそれを思い出してただけ！」
頬を赤く染めながら必死に弁解するカレンを見てユウは微笑む。それと同時に昔セレンに膝枕をしてもらった際にとても安心したのを思い出し、２人は何故か膝枕の思い出話に花を咲かせた。
「じゃあさ……してあげようか？　その……膝枕」

その言葉を聞いたユウは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をし、カレン自身も言ってから自分の口から無意識に出た言葉に驚きまた顔を赤くした。
「それじゃあお言葉に甘えて……」
カレンは靴を脱ぎベッドの上に座り直し、ユウはそこへと寝転がり頭を膝の上に乗せた。カレンはあまりの恥ずかしさに首まで赤くしたが、幸いにもユウは目を瞑っているので気付かれていない。
少しするとユウは目を開きじっとカレンを見つめた。
「な、何……？」
「いや……やっぱり君はセレンさんに似てるなって思って……」
セレンという名前は一度ユウの話で出たことをカレンは思い出した。
「その人の名前は前に一度聞いたわね。どういう人なの？」
「僕の育ての親で、母や姉のような人だった。厳しくて怖かったりもしたけど、とても優しい人だったよ」
まるで思い出すかのように再び目を閉じるユウ。
「一緒に居ると……とても安心する……」
その言葉を言い終えるとユウは静かに寝息をたて始め、カレンはそれを優しく見守った。
（今度は良い夢を見られると良いね）

その後、カレンが遅いことを『何か面白いことになっている気がする』という会長の勘により様子を見に来た生徒会全員に膝枕姿を見られるというハプニングが起こった。ユウを起こしかねないためカレンは咄嗟に動くことが出来ず弁解する間もなく逃げられてしまい途方にくれるのであった。

カレンの膝枕のおかげでぐっすりと寝られその後も悪夢を見ることもなくなった。恐るべし膝枕、まさに神様仏様カレン様様である。

そして今現在僕が何をしているかと言うと早朝のゲットーで瓦礫の上に腰掛けてぼけーっとしている。理由は人待ちだ。
話は遡ること昨日、ゼロから連絡が入り何故か僕だけキョウトに呼ばれ彼らの許へ行くことになった。ゼロ達はスザクを捕縛する作戦に向かうと言っていた。スザクを捕縛するなら戦力的にも僕が居た方が良いのではと思ったのだが、用意があるらしく問題ないと言っていた。というわけで僕だけ爺の相手をするハメになった。げんなりしそう。
電話切る前に作戦後に大事な話があると言われた。なんじゃらほい。
迎えの車が到着し何処かへと向かう。相変わらずカーテンがしてあり何処に向かっているのかわからない。今回の要件は特に伝えられていないため警戒するに越したことはないと護身用の拳銃は持ってきてあるが正直心許ない。何かこう大きい得物が欲しいな、ミニガンとか。いや、そんなもの持ってたらまず入れてくれないだろうけど。
しばらくすると車が止まり扉を開けてもらう。車から降りると前の富士山の時とは違い和風な建物で、中に入ると桐原の爺の他、見知らぬ爺が3人座っていた。おいおい見たかよスティーブ、マジで爺だらけだぜＨＡＨＡＨＡ！　これなら作戦に出てた方が絶対良かったよ畜生。
その後爺達に色々聞かれた。以前桐原の爺に話したことに加えもう少し細かく向こうの世界の状況やらＡＣについて話し、この世界の日本や世界状況のことについて意見を求められたりした。当然ながら初見の爺達は与太話とほとんど信じておらず、挙句桐原の爺に『ついにボケたか』みたいな目線を送っていた。帰りたい。
くそっ、この前の膝枕は今日突き落すために神が寄越したものだったか。潤いが欲しいよ、可愛い女の子とか綺麗な女性とかいないかな、いるわけねーか。
場の爺率に嫌気がさし少し休憩を取ってもらい外で新鮮な空気を吸うことにした。爺だらけの空間と比べて何と清々しいことであろ

う。いっそストレイド呼んで逃げ帰りたい。初めての敗走となるがそんなこともお構いなしに逃げたい、一心不乱に。
「こんにちは、ユウ・ヘイズ様」
そんなくだらないことを考えていると後ろから声をかけられ、振り向くと髪の長い美少女が！　やだなぁ神様も人が悪い、持ち上げて落とした後にまた持ち上げてくれるなんて。小躍りしたくなったが我慢して挨拶を返す。見たことのない美少女、まるで爺達で汚染された僕の目を癒してくれているようだ。あれ、でもなんで名前知ってるの？
「異世界のこともっとお聞きしたいと思って来ちゃいました！」
そうかー来ちゃったかー……待て、この話は一体どこまで広がれば気が済むんだ。こんな見知らぬ美少女にまで知れ渡ってるってどういうことだ。あーでも偉い爺達が居る場所だし関係者か何かで誰かからそういうことも聞いてるかもしれないな。初見の爺３人にはさっき話したばかりだし桐原の爺のお孫さんか？　見た限りでは歳は僕と少ししか違わないのかな？　おそらくリリウムと同じくらい。
「そういうことなら少しお話ししようか、えーっと……？」
「神楽耶（かぐや）と申します」
「それじゃあ神楽耶、何が聞きたい？」
それから少しの間、この神楽耶という少女の質問に答えながらのんびりと談笑した。だが楽しい時間はすぐ過ぎるもので、しばらくするとまた爺達とのお茶会が始まった。帰りてぇ。
結局帰ったのは夕方頃だった。昼食は出してもらえたがそれも爺達と。せっかく飯は美味しかったのに気分はどん底だった、美少女神楽耶ちゃんと食べたかったです。
しかし戻ってきて携帯を確認すると着信が何件か入っており、折り返しかけると現実に引き戻されるハメになった。
「ゼロとカレンが行方不明……!?」
騎士団が使用している倉庫内、ストレイドの前で扇さんと連絡をとっている。キョウトの所から戻ってから連絡を入れた時は待機し

ているように命じられた。自分としては今すぐにでも飛び出してゼロやカレンを探して回りたかったのだが、２人が居なくなった近辺では同時にブリタニアの皇族が行方不明になっているらしくその捜索に敵がうようよいるらしい。その時はしぶしぶ従ったが、一晩経っても見つかったという連絡がないため痺れを切らし再び連絡を入れることにしたのだ。
「やっぱり探しに行ってきます。こんな所に居たって見つかるわけないんですから」
「探しにって……無理だ！　敵がうじゃうじゃいるんだぞ!?」
「だったら待ちますか？　ＫＭＦもないゼロ達がそのうじゃうじゃいる敵の中を抜けて僕らに連絡してくるまで？　冗談でしょう」
「だからって、死にに行くようなもんだぞ……。それにその機体だとお前の体が……！」
「んなもん、こういう時は『死んでも見つけてこい』って言やぁいいんですよ。傭兵なんざ所詮使い捨ての道具なんですから」
　笑いながらそう言うと一方的に電話を切った。

　機体に位置情報を入力後に現場まで向うとそこら中に敵の反応があるが、もはや敵に発見されることなんざお構いなしに空から付近の一つ一つの島全体をスキャンをしていく。見つからなかったら次、そしてそこを探し終えたらまた次を繰り返す。当然敵にすぐに見つかり陸地のサザーランドや海上の戦艦から攻撃されるが全て無視して捜索を優先する。ライフルの弾など当たってもたかが知れているし、ミサイルを避けるのも撃ち落とすのも造作ないことである。しかしスキャンには敵兵などもひっかかるため敵の居る島の捜索は時間がかかり焦りばかりが増していく。もしそんな島に居ようものなら先に見つけないとまずい。
　時間をかければかけるほど敵の目を引くことになり攻撃は激しくなっていく。そろそろ無視するのも限界ではあるが、攻撃や敵機の爆発に巻き込まれないとも限らない。どうするか考えあぐねていると警告音が流れた。

【4時の方向よりデータにない大型機が接近中　注意してください】
ただでさえ敵の多さに辟易しているというのに事も有ろうに大型機とは。最近は持ち上げられたり落とされたり大変だと考え始めていると自分の目でもその機体を捉えた。通常のＫＭＦより大型の、６メートルほどであろう黒と金色でカラーリングされた機体。両手を広げ空を飛び真っ直ぐにこちらへと向かってくる。ついにＫＭＦも空を飛びやがった……。
こちらの世界のＫＭＦという代物は飛ぶことが出来なかったので、下手に目立たないように今まで人目に付く場面で機体を飛ばすことはしなかった。今回は緊急事態だったので飛ばしたのだが今後どうしようか悩んでいた。だが今迫り来る敵は平然と飛んできている。
「今後は空中戦も解禁かな」
迫る大型機を放置しておくのはさすがにきついと判断し武器を向けロックしようとすると、そいつの肩に人が乗っているのを確認した。
「カレン……！　良かった、無事だったか。ということは……」
カレンを乗せて来たということはおそらくあれに乗っているのはゼロだろう、現に攻撃してこないし。
反転して敵に攻撃を仕掛けつつ扇さん達に連絡を入れ、ゼロ達と共にその領域を後にした。

無事に黒の騎士団と合流することが出来てほっとしている。冷や汗をかく場面もあったが結果的に新型機まで手に入れることが出来たのだ、怪我の功名というやつだろう。
スザクのことも後々解決しなければならないが、とりあえず今やるべきはユウのことか。あいつはあの敵の真っ只中自分の命も顧みずに俺達を探してくれていた。もちろん誰かに命令されたのかとも考えたが、扇の話ではほぼ独断で行動に移ったという。……あいつの記憶は完全ではないが信頼に値すると思う、思いたい。俺の考えは甘い

のだろうか。それともユフィと会って話したことで少し考えが変わったか。
「ユウ、話がある。来てくれ」
この選択の結果がどう転ぶかわからないが、悪いことにだけはならない気がする。
さて……どう切り出したものか。

16話　嵐の前

ゼロに呼ばれ部屋に入るとC・C・さんがソファでゼロ以上に偉そうな感じで座っていた。未だにこの人のことがよくわからんけどあんまり逆らわない方が良いということだけ本能的にわかっている。

ゼロから改めて礼を言われた。カレンとゼロを見つけ出す為に色々やったことについてのようだが、そこまで感謝されると困ってしまう。向こうがどう思っているかは知らないがこちらからすれば大事な仲間であり友人であるのだから。命を懸けるのは何の躊躇もないし、当然のことだと思う。

「では本題だ……が」

少し言い淀んでいる。そんなに言い辛いことなのだろうか？

「ここまで来てまだ迷うか？　腹を括れ」

「わかっている……。単刀直入に聞こう、お前は俺の正体に気付いているな？」

……わーそう来たかー……こないだのあれのせいか。気持ちが昂っていたせいでついポロっと出てしまった言葉、それだけで気付かれると思わなかった。やっぱ頭良いなぁ。

「えー？　何のことやらさっぱり……」

とか下手に誤魔化してみようかと思ったけどまぁ無理だよね。正直に本当のことを話すべきかどうか。消されそうになったりしないと良いけどね。そんなことになったら抵抗しないといけないし。

「まぁ誤魔化せる雰囲気じゃないよねぇ……。気付いているともさ、ルルーシュ」

「やはりか……」

そう言いながらマスクを外すと見慣れた、整った顔立ちのブリタニア人の青年がやれやれといった風にこちらを見ていた。

「驚いたよ。正体が露見する要素を極力排除してきたつもりだったんだが……。どこで気付いた？」

「ほとんど勘みたいなものかなぁ。僕鼻が良いからさ、最初はにおいが似てるなぁって思って」

さすがにそこまでは気が回らなかったみたい。というかまさかにおいでばれる可能性とか普通考えないよね。昔から鼻は良く、そのせいで『だからお前は獣扱いなんだよ』と言われダンにからかわれたりした。うん、今思い出してもあの時蹴りをくれてやったのは間違いないと言える。

「やはりまだまだ詰めが甘いな坊や。自分では完璧だと思ってもどこかに穴がある」

「お前は黙っていろ……！」

２人の上下関係がなんとなく見えた気がする。何て言うか、ルルーシュは誰を嫁に貰っても間違いなく尻に惹かれ……おっと違う、尻に敷かれる気がしてならない。

「確信したのは藤堂さんの救出作戦の時かな。スザクを見て言動が止まっていたからさ、『あーやっぱり』ってなった」

色々ゼロとルルーシュが似通った点はあったけどそれを裏付ける決定的な証拠はなかったが、あの作戦の時に同一人物だろうと自分の中で確信した。そんなことを話すとルルーシュは不思議そうにこちらを見て言った。

「それで、お前は聞かないのか？　ブリタニア人である俺が母国に対して何故テロ行為なんかしているのか」

「そりゃ友人としては聞いた上で力になりたいとは思うけどさ、言いたくないことは聞かないよ。それに雇われ者があれこれと詮索するのはあまりよろしくないことだよ、だからやらない」

無駄に首突っ込んで死んだら笑えない。実際そうやって命を落とす馬鹿もいるらしいし。

「それでどうする？　僕は最も知られてはいけないゼロの素顔を知ってしまったわけだけど、安全の為に殺しとく？」

まぁただ殺されてやるつもりもないが。個人的にはここから出て行きたくはないので大目に見てもらえると非常に助かる。

「いや……お前は重要な戦力だ、切り捨てるわけにはいかない。ゼロの正体を知ったんだ、最後までとことん付き合ってもらうぞ」

そう言って意地悪そうに笑った後、『それに……大事な友人だしな』

と付け加えた。
友人……か。その言葉は本音なのか、それとも……。

どこを見渡しても人、人、人。辺り一面人だらけ。たくさんの人が行き交い皆楽しそうにはしゃいでいる。先ほどナナリーの猫の鳴き真似により開始が宣言されたアッシュフォード学園の学園祭には多くの人が来場している。生徒の家族や友人、近隣住民だけでなく日本人までも来場出来ているのはオープンな校風ならではといったところか。人によってはこの騒がしさや人込みを嫌う人もいるだろうが僕はこの賑やかさが大好きである。楽しそうな人々の顔、そこらの屋台から漂う食べ物の匂い、やっぱり祭りは最高だね！

最近は色々あったから疲れがたまっているのでここいらで息抜きしておきたいところ。ルルーシュの正体云々の他に、中華連邦とかいうのが九州地方に攻めてきたっけ。こっちはあんまり面白いことがなかった。せいぜいガンルゥとかいうＭＴもどきがうじゃうじゃいて面白かったくらいか。でも所詮塵が積もったところでゴミの山でしかなかったけどね。アルドラ製のグレ撃ち込んだら跡形もなく消えてしまった。有澤製ならもっと酷いことになっていたのだろうか。あとは一緒に来てたルルーシュのガウェインと先に来て数に押されてたスザクを助けて共闘して、中華連邦に亡命してた日本人とか取っ捕まえて終わった。

そんなこんなで今に至るわけである。そして今現在何をしているのかというと、絶賛逃亡中である。本当なら生徒会の企画である巨大ピザ作りというのやクラスの出し物を手伝ったりしなければいけないが、全部皆に丸投げしてあっちへふらふらこっちへふらふらと気の向くままにこの祭りを満喫している。だって仕方がないじゃない、向こうの世界では学校なんて行ってなかったから学園祭なんて縁がなかったし。色んな出し物を見て、食べて飲んで、色々体験したいじゃない。本当は誰かと見て回りたかったけどそれは叶わない。だって連れが居たら生徒会やクラスの誰かに見つかった時に咄嗟に逃げれないかもしれないし。でも巨大ピザというのは心が動かされるので

完成した頃にこっそり行って貰ってこよう。食べ物に対してこんな気持ちになったのはバケツプリン以来だろうか。食い終わった後胸焼けが酷かったけど。

いやいや、それにしても祭りというものは本当に楽しいね。クラスの人や生徒会の誰かに見つかりそうになったら他の人に不審に思われないように自然に隠れたりしているが、こんなお祭りの最中だとそれすらも楽しく思えてくる。こんな気持ち初めてだ、もう何も怖くない。そんなことを考えていたら会長に捕まり軽くお説教を受けた。幸福の時間は長くは続かないものなのね。

会長に仕事を回されブーたれていると少し疲れた様子のルルーシュが現れ顔を合わせた途端に怒られた。どうも僕の分の仕事までするハメになったらしい。一応謝罪はしておいた。反省は一切してないけどな！

ルルーシュと一緒に仕事をしながらも時間があれば買い食いをしてお腹と心を満たす。だって仕事するとお腹が空くしね。いやぁ、お金稼いどいて本当に良かった。おかげでこういうところでたっぷり食って楽しめる。これで仕事がなければ最高なのに。

「お前には感謝しているよ」

料理を頬張りながら一応真面目に仕事をしているとルルーシュから感謝の言葉をかけられた。何か感謝されるようなことをしただろうか、むしろ仕事押し付けたことで恨み言を並べられても不思議ではないと思うんだけど。

「お前が居なければここまでスムーズに事が運ばなかった」

どうやらこちらの仕事ではなくもう一つの方の仕事の話だったようだ。

「僕が居なくても君らなら問題なくやってのけたと思うよ。正直あんまり役に立ってないし」

実際あまり役立ったとは言えない。極力目立たないよう努めてきたため機体能力の半分も出せていないと思われる。コジマ兵装は一切使っていないし、飛行もほとんどしなかった。これでは前時代の兵器となんら変わらない。

「謙遜する必要はないさ。実際、お前に命を救われているし、俺のことを話したことで幾分か心が楽になった」
そう言って彼は笑った。
「今後も……頼りにさせてもらうよ」
「上手く使ってちょうだいな」

しばらくするとルルーシュは別の場所の仕事を任されたようでそちらに向かうことになったらしい。
「さぼるなよ？　またこちらの仕事が増える」
「へいへい」
そう言ってルルーシュはその場を離れ、また僕一人になったわけだが。ははは、いやいやさぼるとは心外な。きちんと仕事はするとも。色々な出し物がきちんとやっているかの視察をな！　いやー本当は嫌なんだけど仕事なら仕方ないからね。うんうん、仕方ない仕方ない。そうと決まればこの仕事は一時中断して――。
「おやぁ？　首輪付きの獣さんは仕事をさぼってどこへ行くつもりなのかしら？」
ジーザス……。

畜生め。ルルーシュの奴、僕が早々に逃げるのを見越して援軍なんぞ呼んでいやがった……。　逃げる間もなく赤い悪魔にアイアンクローをかまされて捕縛されてしまった。もしＫＭＦに乗ってたら間違いなく輻射波動撃ち込まれてるところだった。生身で本当に良かった。
「まったく！　あなたがさぼったせいでこっちにしわよせが来てるんだから」
絶賛お説教中。今日で何回目だろう。
「反省してマース」
「もう一回いっとく？」
笑顔で右手を掲げられ全力で首を横に振っておいた。あたしそんなに命知らずじゃないわ。

「ほらほら、真面目に仕事する」
「へーい」
なんか彼女に一生勝てない気がしてきた。
「そういえば……スザクのことなんだけどさ」
一緒に仕事をしているとカレンの口からスザクの名が出た。
「あいつ……そう悪い奴じゃないのかもね」
話を聞いてみると以前行方不明になった際にスザクと同じ島に流され、その際に正体がばれたらしい。しかしスザクはそのことを誰にも話すことはなく、学校では普通に接してくれているそうだ。
「正直に言うとさ、スザクを殺すなという決断が下った時にはホッとした。当然友人を殺すことに抵抗はある、でも必要ならばやる。結局僕はそういう人間だから」
「もしかして以前にも似たようなことがあったの……？」
傭兵であるが故に昨日楽しく話していた相手が敵、なんてことはしょっちゅうだった。それでもダン、カニス、ロイさん、ローディーさん、隆文さん、リリウム、メイさんとは仲良くしていた。特にダンとは兄弟みたいに仲が良かったし、リリウムは妹みたいな存在だった。隆文さんに至ってはまるで父親のように尊敬していた。皆とても大切な人達だった。それを僕は裏切った。マクシミリアン・テルミドールに首輪を外されＯＲＣＡ旅団の一員となり、仲の良かった人々との関係を一切断った。記憶はないがもしかしたら仲の良かった誰かをこの手で抹殺したかもしれない。いや、下手をすれば全員を手にかけた可能性だってある。このことを彼女に話すべきか、一瞬考え――。
「いや……なんでもないよ。忘れてくださいな、あはははは……」
こんなことを話したところで何になるというのか。仲の良かった人々を裏切って反動勢力に加担した話をされて、その後も疑いもせず信用し続けることが出来る人間がどこにいるというのか。そういったことも含めて全てを話すことは関係を深めていく上では必要なことなのかもしれない。だけど話したことにより、今まで築いてきた関

係が崩れることの方が僕にとっては何より恐ろしい。この世界でたった一人の異世界人、そんな僕が彼らとの絆を失ったら……果たして今のままでいられるだろうか。……おそらく無理だ、そうなれば僕はきっと……壊れる。

「辛かったら無理に一人で抱え込まないでね……、ちゃんと最後まで聞くから」

おそらく彼女はある程度察してこういう優しい言葉をかけてくれているのだろうと思う。

「あはは、ありがとう。もしそんなことができたらじっくり聞いてもらおうかな」

でも、だからこそ話せない。これだけ優しくしてくれる彼女に畏怖や侮蔑の眼差しを向けられることが怖い。

「待ってるからね……」

――怖いんだ。

会話もそれっきりになり無言で仕事を進めた。楽しいはずの学園祭がどうしてこうなってしまったのだろう。あぁ僕のせいか。ここは無理矢理にでもテンションを上げてみよう。いっそ彼女もさぼりに巻き込んでのんびり見て回ろうか。いやでも彼女は意外と真面目だし、提案したところでまたアイアンクローからのお説教コースが目に見えている。

アホな考えを巡らせていると何やら広場の方が騒がしい。巨大ピザが完成するにはまだ早い、問題でも発生したのだろうか。カレンと共に向かうと人垣の中心にピザの生地を大きくするために使用されていた古いＫＭＦが佇んでいた。確かガニメデという名前で操縦者はスザクだったはず。そしてガニメデの右手には一人の少女が乗っていた。どこかで見たことがある気がするがどこの誰だったか……。あぁそうだ、エリア１１の副総督やってるブリタニア皇族のお嬢さんだ、テレビで見かけた。お忍びでやってきてたのが見つかって騒ぎになってたのか。そういうやスザクを騎士にした皇族って確か彼女だったな、忘れてた。

気付くとカレンは僕の背中に隠れるような立ち位置に移動していた。流された島であの人とも会ったんだったっけ、スザクが秘密にしてくれたからといって彼女もそうだとは限らないし確かにこの方が無難か。

少しすると皇族のお嬢さんが何か喋り出したが何を言っているのだろうか？　遠くてあんまり聞き取れないが近付こうにも人が凄くて面倒だ。

「私――は――周辺に――ます」

その一言で周囲の人間が一斉にざわめき始めた。

僕の耳がおかしくなったかな。『行政特区日本を設立する』って聞こえた気がするんだけど。え……？

先日ユーフェミアの宣言した『行政特区日本計画』によって日本人は２つに分かれた。参加すべきか否か。多くの日本人はこの計画に賛同し、また騎士団の中からもこれに参加する者も多くいた。キョウトまでも向こうにつくらしい。もし参加すればいずれ騎士団は解体・吸収され、独立という夢も今までの努力も水泡に帰する。しかし参加しなければ自由や平等を望む者を敵に回すことになる。なんともまぁ八方塞ですこと。

特区日本の式典前日、僕は格納庫で機体の整備を行っていた。いつものＡＲＧＹＲＯＳの機体構成に武器は左腕に真改タイプの月光だけ装備しておいた。式典にゼロの付き添いとして会場入りするため、相手を警戒させないように武装は最低限にしてある。これらからもわかるように僕らは向こうの誘いに乗ることになった。ただ特区日本に参加するか否かについては何も教えられていない。彼はどうするつもりなのだろうか。

格納庫で一人黙々と整備を進めているとゼロの恰好を身に纏ったルルーシュがやってきた。

「明日はお前のストレイドとＣ．Ｃ．にガウェインを操縦させて会場入りする。準備の方は出来ているか？」

「もうすぐ終わるよ。万全の状態にしてあるからどんな状況にも、ど

んな敵でも何機でも相手に出来るよ」
　勿論戦闘することになるかはわからないが、それでも最高の状態にしておくのが良い。人生何が起こるかわからないから。
　それからしばらく無言の時間が続いた。僕は調整を進め、彼はそれを黙って眺めている。それから１０分も経たないうちに完了した。
「終わったか。では明日は頼む。……いざという時は頼りにしているぞ」
「ゼロ」
　その場を去ろうとするルルーシュの背中に声をかけた。
「明日君がどんな判断を下しても、僕は君に最後まで従う。けど……後悔するような選択だけはしてくれるなよ。それじゃあ……また明日」
「あぁ……また明日」

　式典当日。ストレイドのコクピットの中で目を覚ました。決して寝心地は良くないが大事な作戦の前日はいつもこうして寝ていた。寝にくい場所で睡眠をとり少し寝たりない位の状態で作戦に臨む。そうして作戦を速やかに、完璧に遂行し、帰ってゆっくり寝る。お呪いみたいなものだ。食事は水を一口以外は何も入れない。作戦後に寝て起きた後にたらふく食う為に。勝利の美酒ではないが、やはりそういう時の食事はいつも以上に美味しく感じる。そうとも。いつも通りきっちり仕事して、ぐっすり寝て、たっぷり食べよう。
　ガウェインと共に飛行し会場へと向かう。他の面子は会場から少し離れた位置にて待機、何かあった際に直ぐに行動出来るようになっている。会場に近付くと中にたくさんの人々が来ているのが見て取れた。おそらく皆日本人。不味いな、人が多すぎる。下手に戦闘になれば大勢を巻き込む。そういう事態にならないことを祈るばかりだ。
　会場に到着するとルルーシュはユーフェミアに話し合いを申し出て、向こうはそれを受け２人きりで話し合うことになりブリタニアの指揮用陸戦艇Ｇ―１ベースへと入っていった。僕とＣ．Ｃ．は地上に降りて待機することとなった。それにしても、良くもまぁこう易々

とストレイドまで受け入れたものだ。だがさすがに護衛の兵士に武装の解除は命令された。
「断る。この式典そのものが罠ではないという確証がない。そちらが手出ししなければこちらも何かするつもりはない」
向こうは舌打ちをしてしぶしぶこれを認めていた。
ストレイドのカメラ映像にはスザクの姿もあり、こちらのことをじっと見つめている。敵対していた機体が目の前にあるのに白兜が傍にないのが不安で仕方がないのだろう。おまけに守るべきユーフェミアは護衛も付けずにゼロと2人きり、落ち着けと言われても出来るものでもない、か。
不意にガウェインのコクピットハッチが開きC．C．が機体を降りて出てきた。
「一体何をやっている、敵地のど真ん中で機体から離れるなどと」
そんなこちらの言葉も意に介さずスザクに何かを語りかけた途端、左目を抑えて蹲った。
「どうした!?」
スザクはC．C．の異変を心配して駆け寄り、彼女に触れた途端気絶してしまった。さらにそれを目の当たりにした護衛がC．C．に駆け寄り銃を頭に突き付けるが突如悲鳴をあげ倒れてしまった。おいおいおいおい、何が起こっている？　ただ何かやばいことが起こっているということだけはわかる。とりあえずC．C．を回収しよう。
その普通とは思えない状況の横をユーフェミアが一人横切り走って行った。銃を持って。……銃？　なんで、そんなものを……。まとまらない頭をさらに混乱させる、ユーフェミアのマイク越しの声が響いた。
「日本人を名乗る皆さん、お願いがあります！　死んでいただけないでしょうか？」
はっ……？　状況に頭が追い付かない。C．C．やスザク達が倒れて、ユーフェミアが……虐殺の宣言をして……。
「やめろ！　ユフィ！」
ルルーシュが横切っていたのを見てようやく我に返った。そうか

そういうことかよ。全部罠だったってか、なめやがって……。だが今はとりあえずＣ．Ｃ．とルルーシュを回収しないと。そう考えてＣ．Ｃ．に手を伸ばし――。

「っ！　よせっ！」

彼女に触れようとした途端に形容し難い、何かおぞましい光景が頭に流れ込んできた。それにより頭を激痛が襲うと同時に……記憶が頭の奥底から浮かび上がってきた。

『だっせ――俺――』

あぁそっか、何で忘れてたんだろ。

『ユ――お前はっ――』

皆。

『ユウ兄さ――どうし――』

みんな。

『ユウ……』

僕が殺したんだった。

「馬鹿野郎が……」

どこかで、誰かが、泣きそうな声で、そう呟いた気がした。

【武装転送】

【ＭＡＳＳ　ＢＬＡＤＥ】

【不明なユニットが接続されました。機体出力、危険領域に到達しています。直ちに使用を停止してください】

17話　暴発

『俺とお前は兄弟みたいなもんだろ？　大丈夫だっての。俺に任せとけって』

兄のように慕ったロイ・ザーランドも。

『いずれお前は私では歯が立たないほどの剛の者になるだろうな、楽しみだ』

戦場についてたくさんのことを教えてくれたローディーも。

『私にとってお前はもう一人の息子のようなものだよ』

命の恩人で、両親の居ない自分にとっては父親も同然だった有澤隆文も。

『私にとってユウ兄様は……秘密です』

妹のように可愛がったリリウム・ウォルコットも。

『お前は私のものだ……そうだろう？』

母であり姉であり、師であり相棒であり……初恋の相手でもあったセレン・ヘイズも。

全員殺した。

あの時から僕は――。

――最悪だ。

暴走したギアスがユフィにかかり『日本人を殺せ』という命令を遂行し始めてしまった。これは自分が経験してきた中でも最悪の事態だ。ギアスにかかってしまった以上はもうどうすることも出来ない。どんなに望んでも時が戻ることもないしなかったことにも出来ない。このような事態を引き起こしたのは俺なのだから、俺の手で終わらせねばならない。せめてこれ以上名誉に傷がつかないうちに――。

「すぐに楽にしてやる……ユフィ！」

C．C．と合流しガウェインへと乗り込み騎士団に召集をかける。

ユーフェミアが我々を裏切り日本人を殺害し始めたという嘘を伝えて。
ガウェインを起動させ空中へと移動し空から状況を確認するとあまりにも凄惨な光景が広がっていた。辺り一面血の海、そしてなおも増え続ける死体。厄介なことにユフィはグロースターへ乗り込んだのを確認した。更に厄介なスザクの白兜が出てくる前に始末をつけないと不味い。しかし会場には他にもＫＭＦが数多くおり当然邪魔になる。ガウェインのハドロン砲で一掃してしまいたいところだが会場の日本人諸共消してしまいかねない為、指先に搭載されたスラッシュハーケンだけで騎士団到着までに少しでも被害を抑えなければならない。だが一機ではこれだけの敵を相手するのにも限界が――待て、ユウはどうした。一緒に会場に来ていたはずだ。
空から地上を見渡すとストレイドが見えた。だが様子がおかしい、いやおかしいのは様子だけではない。何だあの武装は。そう違和感を覚えた途端にストレイドが敵ＫＭＦに向って有り得ない速度で突撃した。
それからのユウの行動には寒気を覚えた。
俺の知っているユウでなくなったのはおそらくこの時だったのだろうと、後に気付いた。

ゼロからの連絡を受け取った騎士団は藤堂の月下を先頭に全速力で機体を走らせ式典会場へと向かう。会場から銃声がのべつ幕無しに聞こえ続けていることに団員達は焦りと怒りの感情を抱いた。もっと速く、もっと速くと機体を酷使して目的地まで急ぐがそれ以上の速度は出せず、それがさらに焦りを募らせる。会場に近付くにつれ逃げてきたと思われる人々が見えてくる。だがその先にはもっと多くの人が逃げ遅れて恐怖を体験している。それどころかもうこの世には居ないかもしれない、そう考えると体の内からどす黒い感情が滲

み出てくる。
会場の外で日本人に攻撃をしている敵が見え始めると藤堂はすぐに指示を出し、団員はその怒りをぶつけるかの如く攻撃を開始した。ライフルを乱射し、スラッシュハーケンを打ち込み、斬って殴って蹴り飛ばして、敵味方が一機、また一機と減っていった。しかしこの場に一人でも日本人が残っている限り騎士団は一歩たりとも退く気はない。只管に戦い続け、殺し続ける。裏切られ踏みにじられて、無残な最期を遂げていった日本人の為に。
そんな激戦は会場の壁を突き破って飛来した何かによって唐突に中断させられた。その場の音や機体だけではなく会場からの銃声も聞こえなくなったため、周囲がしんと静まり返った。その場の大半がまず大きく穴の開いた壁に目を向け、その後飛来した物を視界に入れると最初はそれが何か理解出来る者はほとんどいなかった。しかし色や微かに残る特徴でそれが何か理解し――恐怖した。飛んで来たのはまるで強い力で押し潰されたかのようなグロースターの残骸で、手足は吹き飛びコクピットは押し潰され歪な形になっていた。一体どのようなことがあればそこまで異様な状態になるのか、答えはすぐに出た。
「うわぁぁぁぁ!!」
穴から右腕の拉げた一機のサザーランドが情けなく泣き叫びながら現れ、穴の奥に向かって残った左腕でライフルを乱射した。その姿を見た他のブリタニア兵達は明らかに困惑した。
仲間達の姿を確認したその機体は力なく左腕を伸ばし助けを求めた。
「頼む!! た、助け――」
しかしその願いは叶うことはなく、穴の中から現れた黒い機体の右腕に付いた武器によってサザーランドは無残にも叩き潰された。潰された際に発した金属音はまるで断末魔のように辺りに響き渡り、助けを求め伸ばした左腕だけを残して押し潰された機体は爆散した。その黒煙の中から黒い機体、ストレイドが残骸を踏み潰しながら現れ赤く光る瞳で周囲を見渡した。その姿にブリタニア軍は恐怖を覚え、

黒の騎士団は歓喜に湧いた。しかしストレイドを見て疑問を抱く者も少なからずいた。左腕にブレードを付けていただけのはずなのに、右腕には電柱のような巨大な柱。さらには頭部や機体のあちらこちらの外見が変わっており、目に該当する部分だけが不気味に赤く光っていた。出撃前とは明らかに違う姿、武装、そして何一つ言葉を発しないユウ・ヘイズ。

「てめぇらもここまでだな、ブリキ野郎共！」

しかしその異様さに気付かない一人の団員がブリタニア軍に対し啖呵を切った。その言葉に反応するかのようにストレイドが右腕を後方に伸ばして構え、柱や背部等に備え付けられたブースターを同時に吹かせ始めた。機体に余程の負荷が掛かっているのか全身から火花を散らせ、炎が噴き出ている箇所まである。傍に居たブリタニア兵は破壊の権化のようなストレイドの姿に気圧されて動けなくなり、恐怖に支配されるがままとなった。そんなストレイドの勇ましい姿を見て団員達はこの戦場での勝利を信じて疑わなかった。

余談だが啖呵を切った男は団員達からマサというあだ名で呼ばれており、騎士団の中でも特にユウとつるんでいる姿がちょくちょく見られた。異世界人を自称する等少し変わっているけれど、自分達と一緒に日本を取り戻す為に命を懸けて戦ってくれている良い奴というのが彼から見たユウの人物像である。年下でありながら戦場を知っており、その戦う姿を尊敬し、憧れてすらいた。今後も一緒に戦い続け、いつか日本を取り戻す。そしたら一緒に飯を食ったり何処かに行って遊ぼう、そう約束していた。

そんな彼には理解出来なかった。何故目の前で――ユウのストレイドが腕を振り被っているのかが。ほんの一瞬、それこそただ一度瞬きしただけのはずなのに、離れた位置に居たストレイドが目と鼻の先に居る。

人は死ぬ間際に走馬灯を見たり、事故に会った時には時間がゆっくりと流れているように感じるという。彼がそれを体感したかは定かではないがただ一つ言えることは。

彼の人生はそこで終焉を迎えたということだけである。

何が起こったのか全くわからなかった。ユウの機体が構えたと思ったら、その数秒後には団員の一人が乗っていたＫＭＦが消え、黒煙が上がり何かの破片が自機に当たった。そして目の前にはそれなりに離れた位置に居たはずのストレイド。

「!?」

ストレイドから大げさなくらい後方へと一気に距離をとり思考する。ユウが味方に攻撃し、それを受けた機体はバラバラになりパーツ片が飛んで来たのだろうか。駄目だ、今の状況を正確に把握しようにも混乱していて考えられない。そもそも何故ユウがそんなことを……。

ストレイドは見慣れた姿とは異なり右手には煙を上げる大きなハンマー、いや、そんなお上品なものではなくもっと無骨な、鉄柱か何かが付いていた。その柱で団員の乗るＫＭＦを殴り飛ばし破壊した。その行動を目にした他の団員達も急いで距離をとり、ユウに対して必死に呼びかけているものの何の反応もない。それどころかこちらに対しても敵意を剥き出しにして今にも襲い掛からんとする勢い。まるで獰猛な野生動物のようだ。

そんな姿に恐れをなしたブリタニア軍はストレイドに対し一斉に攻撃を開始した。

それからの戦いは酷いものだった。ストレイドはその圧倒的な力で次々とＫＭＦを破壊していき、その光景を見た敵も味方もパニックに陥った。幸いにも最初以降騎士団側へ攻撃の矛先が向けられることはなかったが、逃げ出す者も命乞いする者も関係なく叩き潰して回る、一方的な蹂躙と呼ぶに相応しい姿には背筋が凍った。確かにユウは敵に対して容赦がないところはあったが、投降した者まで攻撃するようなことはしなかったはず。けれど今はまるで殺すことに愉悦しているかのように誰彼構わず破壊し続けている。

これがユウの本性なの？　それとも以前ナリタで行動不能になっていたことがあったけれど、あの時のように今回も何かが起こって錯乱している？　声を聞けば、顔を見ればきっとわかるのに。でもそれは彼を止めない限りは不可能だ。けどあんな状態の彼をどうやって止めればいいのか。そもそも止められるのだろうか。あの機体を傍で見てきたからわかる。この世界のＫＭＦを遥かに上回る機体性能、そしてユウ本人の操縦技術。そんなものを相手にしてどれだけ生きていられるかもわからない。でも止めなければいつこちらにあの牙が再び向けられるか。私達だけじゃない、この場に居る一般人に被害が及ぶ可能性だってある。一体どうすれば良いの……？

「落ち着け！」

パニック寸前の私の耳にゼロの声が響き、空を見上げるとガウェインが視界に入った。ゼロの安否がわかりほっとすると同時にあの人ならばこの状況を何とか出来るかもしれないと淡い期待を抱く。でも現実はそこまで優しくはなかった。通信を通して聞こえたのは……ストレイドの破壊命令だった。

「ちょ、ちょっと待ってください！　ストレイドを破壊しろって……あれは――」

「ユウ本人にどんな事情があるにせよ、こちらに対して敵意を見せた。現に一人やられている。これ以上放っておいてはこちらに更なる被害が及ぶ可能性が高い。何より奴の攻撃で一般人に一人でも犠牲者が出れば我々も日本人からの支持を失うことになる」

確かにユウから攻撃してきて尚且つこちらにも更なる攻撃を加えんばかりの勢いだ、どんな事情があれ破壊されても文句は言えない。

「今為すべきことは！　一人でも多くの日本人を救うことだ！　ストレイドがその妨げになるのであれば……破壊してでも止めねばならない!!」

破壊してでも止める……？　……そうだ、殺さずに機体だけを行動不能には出来ないだろうか。

「ゼロ！　……私にやらせてください……彼を何とかしてみます。……お願いします！」

本当はこんな博打に出ないでさっさと破壊すべきだってことはわかってる。だけど……もしユウが反乱を起こしているのではなくただ錯乱の末の暴走であるのなら、彼を救ってあげたい。
「……良いだろう、だがわかっているな？　君が失敗すればその時は……」
私が失敗すれば自分だけじゃなくユウやもっと多くの人が死ぬことになる。それをしっかりと肝に銘じる。今回ユウがどうしてこんなことになったのか……それは機体から引きずり出して嫌でも聞き出してやる。
ゼロはユーフェミアを、私はユウを、残りはブリタニア軍への攻撃と会場近辺に残された日本人の救出へと分かれ行動を開始した。
他のことも気にはなるけど私はストレイドに集中しないといけない。時間をかけて全員で少しずつ削っていければいずれは倒せるかもしれないけども、生憎そんなことは不可能だしそんなに時間はかけられない。一つはここには多くの人が居るということ、もう一つはストレイドが火花を散らせ今にも自爆しそうな状態であること。おそらくあの右腕のせいだろうとは思う。そんな限られた時間の中でありの機体を破壊ないし行動不能の状態にまでしなければならない。おまけに一度狙いを定められたらあの驚異的な加速力で一瞬で間合いを詰められてやられかねない、故に一度で決めねば終わりだ。それを可能とする状況はブリタニアのＫＭＦに目標を定めてこちらに背後を見せた時、そこしかない。
時折飛んでくるブリタニア軍の攻撃を避けつつタイミングを見計らっていて気付いたことがいくつかあった。
まず飛べるはずなのに何故か飛ばない。あの攻撃に全ての出力系統を回しているのだろうか。そして攻撃の仕方が２通りあるらしい。と言ってもチャージするかしないかという程度の違いしかないのだけども。けど威力が段違いのようで、チャージ有りだと形も残らないくらいバラバラにされている。チャージ攻撃をする際には構えてからしばらく動かなくなり、目標へ一直線に向かって行き破壊する。攻撃後は１秒程硬直し再チャージまでのディレイは３秒といったとこ

ろ。けどそれらの時間は徐々にだけど少しずつ長くなっている気がする。機体が悲鳴を上げるくらいだし、出力を限界まで使っているから機体の内部への負荷が相当に酷いのだと思う。

少なくともあの右腕さえ破壊すれば止めることが出来る可能性が出てくる。巧く調節すれば輻射波動で右腕だけを破壊出来るはず。下手をすれば機体諸共吹き飛びかねないけど時間が足りなくてこれしか思い浮かばない。というのも今が絶好のタイミングだからだ。

ストレイドは周りに敵も味方も一般人も居ない逸れた一機に狙いを定め、こちらに背を向けた状態でチャージを開始した。チャンスは一度っきり、これを外せば後がない。一度大きく深呼吸し震える手や体に活を入れる。

そして機体を走らせ始めた。ランドスピナーを使いストレイドまでの距離を一気に詰める。その間ユーフェミアのしたことだとか失敗したらどうしようだとか、そういったことは一切合切忘れる。今頭に浮かぶのは皆と一緒に笑っていたユウの笑顔だけ。いつかまた皆で笑えることを信じて攻撃することだけに集中する。

ストレイドが攻撃に移るとＫＭＦは跡形もなく消し飛び、機体が硬直した。ここしかないと勢いそのままにストレイドへと右腕を構えて跳びかかり輻射波動を浴びせかけた。

「ぐぁっ!?」

吹き飛ばされて壁に叩きつけられた際に頭をぶつけたせいで何が起こったか曖昧になってしまった。ストレイドが居た辺りには煙が漂っていていまいち状況が把握できない。確かストレイドに跳びかかって、輻射波動を浴びせて……待って、その前に何か……。

「っ!?」

急いで起き上がり煙の方を注視しつついつでも動けるようにしておく。

ほんの一瞬だったけどあの時確かに見た。跳びかかる寸前……ストレイドが横目にこちらを見ていたのを。

煙の奥から黒い機体が歩いて現れた。機体の至る所から火花を散

らしているのに右腕には依然完全な状態の鉄柱が付いている。それに対してこちらの状態はそれ以上に不味い。右腕は肩から根こそぎ持って行かれてしまった。おまけにコクピットをぶつけた際に歪んだらしくハッチが開かず脱出出来ない。

何が起こったのか段々と思い出してきた。こちらが跳びかかった瞬間にストレイドが１８０度回転して鉄柱で反撃を受けたんだ。今私が生きていられるのは偶然輻射波動が障壁の代わりとなったおかげで鉄柱の攻撃を防ぐことが出来たことと、チャージされていなかったから。しかしそれでも右腕を失うくらいの威力を考えると、恐ろしさを通り越して笑いすら出てくる。

私は心の何処かでユウは錯乱して暴走しているから、隙を突いて後ろからしかければ問題なく当てられると思い込んでいた。機体はあれ以上無理な動きが出来ないと思い込んでいた。でも実際は違う。彼は今でも周囲の状況を冷静に把握しているし、機体も無理に動かしても問題なく動いている。

そんな私に向って一歩、また一歩と近付いてくる黒い姿が途轍もなく恐ろしいものに感じる。どうすれば良いのかわからない、考えられない。体が震えて心が折れかかっているのを感じる。今すぐこの場から逃げ出してしまいたい。でも逃げればユウも含めて多くの人が死ぬ……。そんなのは絶対に嫌だ。そうだ、こんなところで終わるわけにはいかない。たかが右腕が壊れて輻射波動が使えないだけだ。まだ左腕がある、両脚も動く、紅蓮はまだやれる。

「カレン！　後ろだ！」

そんな決意を嘲笑うかのような後方からの銃撃。反応してなんとか回避行動をとると、元居た場所に弾痕が出来ていた。

「貴方も日本人ですね？　死んでください！」

「この声……貴様、ユーフェミアか……！」

ゼロが相手をしていたはずのユーフェミアがここに居る。ゼロに何かあったのかと周りを見渡すとガウェインと白い機体が戦っているのが見えた。スザクの白兜……どこまで私達の邪魔をすれば気が済むのか。でも今はそれどころじゃない。前にはユーフェミアのグ

ロースター、後ろにはユウのストレイド。冗談じゃない、ユウ一人でも持て余しているのに。泣きっ面に蜂どころの騒ぎじゃない。
「うぁっ！」
ユーフェミアからの銃撃を受け右脚を破壊されて動けなくなってしまった。２機の片方にすらまともに集中出来なくなってしまっている。後ろから聞こえ始めたチャージ音に驚き、そちらを窺う際にユーフェミアから目を離したのが不味かった。片や鉄柱を構えこちらに狙いを定めるストレイド、片や今まさに止めを刺そうとライフルの弾倉を変えるグロースター。死の恐怖に心拍数が上がり息が荒くなる。気付いたら自身の乾いた笑い声が耳に入ってきた。
――ここで終わりかぁ。
ユーフェミアがコクピットへと銃口を向けたのを見てそう思った。悔しくて涙が出てくる。信じていた多くの日本の人達を踏みにじったあの女、一番殺してやりたかった相手に殺される。
『殺しているんだ、殺されもするさ、ってね』
以前ユウが言っていた言葉を思い出した。殺した以上殺される運命にある、結局そういうことなんだろうね。そっか……じゃあここで私が死ぬのも運命なのかな。自分の心が折れてしまったのをはっきりと感じ、ゆっくりと目を閉じた。
そして銃撃の音が響いた。

おかしいなぁ……いくら待っても死が訪れないや。それとも即死したから気付かなかっただけかな。
そっと目を開けると目の前に黒い機体が居た。私に背を向けて。
「なん……で……？」
どうして銃弾から私を守ってくれているの……？　だってあなたは今まで……。
ストレイドが一歩ずつ歩き始めた。機体を少しでも動かせば軋む音が聞こえ、機体だけでなく鉄柱の接続部からも火花が散っている。そんな状態でも銃弾から私を庇いながら、右腕を構えたまま着実にユーフェミアの許へと歩き続ける。弾が切れたのかユーフェミアは

ランスに持ち替えストレイドへと吶喊した。
「やめろぉぉぉぉぉぉ!!」
誰かの声が聞こえた気がした。それと同時に……グロースターだったモノが、遠くへと吹き飛ばされる光景をただ呆然と見ていた。

そこから先は覚えていない。後で聞いた話ではユーフェミアが吹き飛ばされた後に私は気を失ったのだろうということだった。
ストレイドはあの直後機能が停止して動かなくなったそうだ。機体はその後回収され、堅牢なコクピットハッチを豪く時間をかけて破壊し、気絶していたユウは引きずり降ろされた。コクピットの中はそこらじゅう血で赤黒く染まっていたという話だ。ユウ自身命に別状はないものの未だに意識が戻っていないという。今回の件について本人から詳しく聞くのはしばらくは不可能だろう。
スザクは歪な形となったグロースターのコクピットを抱えて離脱していったと言っていた。あんな攻撃を受けたんだ、おそらくユーフェミアは生きていないだろうし、その方が良い。
ゼロはその後会場で、ブリタニアからの独立を宣言。「合衆国日本」を作ると宣言したそうだ。きっと人々も喜んだことだろう。その場に居られなかったのが悔やまれる。
こうして「経済特区日本」の騒動は日本、ブリタニア双方に多くの傷跡を残して終わりを迎えた。

医務室のベッドに一人の青年が横たわっている。腕には点滴の針が刺さり、部屋には生体情報モニタが心拍数を刻む音だけが響いている。血塗れだったパイロットスーツは純白の病衣へと替えられ、体の血も綺麗に拭き取られている。
そんな彼のベッドの傍に男が一人立っていた。
彼の頭に銃口を突きつけて――。

18話　crazy beast

奴らは害悪だ。奴らをこのままには出来ない。生かしておけば蝕まれていく。そんな事があってはならない。これ以上穢すな。そんな事僕は見過ごせない。俺が許さない。奴らは生かしておく価値も無い。何故生かしておく必要がある。いや、奴らが消えれば穢れない、少なくともこれ以上は。だから殺さなければ。止まる必要はない。走って走って、全速力で走り続ける。最後は壁に激突して死ぬか、足が縺れて地面に叩き付けられ息絶えるまで走り続ける。だがそれまでは――。

ユウ・ヘイズは目を覚ましてからたっぷり30分もの間起き上がりもせず、何を考えるでもなくただ虚ろな目つきで天井を眺めていた。そして一番最初に感じたのが空腹感、次いで体の痛みや重苦しさ。それらに耐えつつ身体を起こし纏わり付く鬱陶しい医療器具の数々引き剥がしていく。その際に無理矢理引き抜いた点滴の針で出血するも傷口は瞬時に塞がった。

ベッドから出て立ち上がろうとすると足に上手く力が入らず点滴の掛けられたガートル台ごと倒れてしまった。まだ上手く働かない頭でどれ程の間寝ていたのかを考えながら立ち上がり、病衣も着替えずにそのまま医務室を後にした。

黒の騎士団がアジトとして使用している施設、その内の1つにある格納庫内。団員の大半は東京での作戦の為に既にそこを発っていたが、ある程度はユウの護衛や所々損壊しているストレイドの修理を行う為に残っていた。そんなアジト内を深夜1人の団員が警備を行っていると、明りの付いていない格納庫内から男の声が聞こえるのを耳にした。銃を構え警戒しながら近寄り中を覗き込むとユウがストレイドに向き合う様に胡坐をかいて座り込み、誰も居ない筈の空間で誰

かに話しかけていた。
「……ってる――にしても随分な格好になったな。すまん……女の子なのにボロボロだ、可哀想に……大丈夫……俺がちゃんと治してやるからさ……。中はどうだ……？　――そうか、なら移動は問題ないな……。――そうだな……まずはお前を綺麗にしてやらないと……。……？　あぁ、どうだって良いっつーのそんなもん……やらなきゃいけない事も多いしな……。――それはもういいって……はぁ……お前といいアイツといい……分かったよ……だが、それが終わったらすぐにお前の番だからな？」
傍から見たら気が触れたとしか思えないその様子に怖気付いた団員は急いで人を呼びに行き、ユウはそのまま病室へ連れ戻され、その後また眠りについてしまった。

ユウを最初に見つけた団員は恐怖していた。唯でさえ味方を殺した男の護衛という事でビクついているのに、その護衛対象である味方殺しが正気を失った状態で自分達の傍にいる。騎士団に参加した時に既に死ぬ覚悟をしれはいたが、それはあくまでも日本を取り戻す為にブリタニアと戦いその上で命を落としての事だ。決して仲間に殺されての事などではない。いつか自分も殺されるのではないかと気が気ではなかった。そして恐怖のあまりある結論に至ってしまった。殺される前に殺さなくては、と。そして拳銃を片手に深夜の医務室へと赴き、ユウの頭に銃口を向けた。味方だとか騎士団の重要人物だとか、もはや彼にはそんな事はどうでも良かった。ただ目の前の恐怖を取り除きたい、ただそれだけだった。しかし拳銃の引金を引き絞ろうとした瞬間、拳銃を掴まれ側頭部にまるで金属パイプで殴り付けられたかの様な強烈な蹴りを受け倒れた。頭を押さえながら上体を起こすと、まるで害虫を見る様な目で銃口を向けたユウの姿があった。
「……誰の差し金だ？　ブリタニアの奴か？　ディートハルトか？　藤堂か扇か？　それとも――ゼロか？」
底冷えする様な冷たい目で淡々と質問をしてくるユウに、次第に体が震え始め嗚咽を漏らす事しか出来ず、それに苛立ったユウに更に腹

へと蹴りを入れられ腹を押さえ苦しそうに咳き込んだ。
「〝あぁ〟とか〝ひぃ〟とかそんな答えは求めてねぇんだよ……。誰に命令されて来たのか言えっつってんだよ……」
髪を掴んで起こし銃口を目の前に突き付けて更に脅しをかけるが恐怖で声が出ないのかただ震えて小さな声を漏らす事が精一杯の様子だった。ユウはこれ以上は時間の無駄だと判断し、立ち上がって銃口を向けた。
「はぁ……もう良いわ……」
そう言って躊躇いなく引金を引こうとし――そして何故か止めた。
「――あ？　別に殺したって構わねぇだろ……。――はぁ……分かったよ、糞っ」
独り言をぶつぶつと言いながら団員の顔に一際強く蹴りを入れて失神させ、医務室を後にした。
――後生大事にしていた筈の首輪を残して。

それからは自身の端末やパイロットスーツを探し格納庫へと向かう。途中何か騒がしい様な気がしたが特に気にする事も無くストレイドへと乗り込み機体の状態を確認し起動させた。ユウ救出の際に破壊されたコクピットハッチは元通りにされていたが、所々フレームが剥き出しの部分があり、修理が追い付いていない事が窺える。そして敵味方関係なく恐怖の対象となっていた鉄柱の如き武装であるが、機体の回収作業中に忽然と姿を消したという。その後の行方を知る者はいない。
「駆動音がおかしいな……やっぱりお前を先に……。――はいはい分かったよ、東京だったか……？　ついでに飯も買って行くか……」
置いてあった武装を適当に持ち、格納庫の天井を突き破ってそこを飛び去った。ユウがストレイド諸共行方不明になったという連絡が東京組に伝わったのは、その数分後の事だった。

黒の騎士団に占拠されたアッシュフォード学園では緊迫した状況下にあった。騎士団とブリタニアの特派は爆弾と成り果てたガニメ

デにより双方停戦を余儀なくされていた。爆弾のスイッチはニーナが握り、一度それが起動されれば辺り一面灰となる程の威力を持つ。生徒会のミレイ達が必死に説得しているその最中に、それは落ちてきた。

「な、何だぁ!?」

着地の風圧により怯んだニーナのガニメデに向かい腕を伸ばし、胸部に取り付けられていた爆弾を無造作に引き千切った。その勢いのままガニメデは引き倒され、ニーナは頭を打ったのか気絶した様だった。皆が漸く目を開けると目の前に大型の黒いＫＭＦが左手に爆弾を握り佇んでいた。

「あれは坊やの……しかし何て無茶を……。爆発しなかったのが奇跡だよ……」

味方殺しの真相を語らぬまま眠りについていた人物の機体を見た騎士団員達はたじろいだ。少し前に行方不明になったと聞いたばかりだがまさかこの場に現れるとは思いもよらなかったのだろう。しかし現れたは良いもののその場を動く事無く戦闘が続く東京の街の方角を向いているのみ、その場に居る団員どころか敵である特派のＫＭＦにすら無関心だった。その様子を見た特派のセシルがランスロットの予備パーツで組まれたＫＭＦで銃口を向けた。

「動かないで！　我々の艦があなた方を狙っています、武器を捨て投降してください！」

そんな言葉を投げ掛けつつもセシルは動悸がして冷や汗が出ていた。はっきり言って自身の乗るＫＭＦとは比べ物にならない程の性能を目の前の機体が持っている事は明らかだ。敵がその気なら自分は瞬殺されるだろう。しかも黒いＫＭＦの左手にはまだ爆弾が握られている、下手に攻撃すれば爆発しかねない。故に先程の発言も口から出まかせを言ったに過ぎない。お願いだから武装解除をして欲しい、そんな祈りが通じたのか黒いＫＭＦはその身を屈めると後部ハッチが開き、パイロットスーツの上に黒の騎士団の制服を羽織ったまだどこか幼さの残る青年が現れた。スザクと同じ位の年頃だろうか、セシルがそんな事を考えているとまだ外に居た生徒会の１人であるリ

ヴァルがその青年の正体に気付いた。
「嘘……だろ……？　ユウ……何で……」
　生徒会員達がユウの姿に困惑しているのを余所に、本人は至って気にする事も無く片手に紙袋を掲げストレイドの頭部へと登っていき、そして紙袋からハンバーガーを取り出して齧り始めた。周りの者達等まるで眼中に無いかの様に爆発と黒煙で染まる戦場をぼんやりと眺めていた。
「ユウ……何でお前がそんな所に居るんだよ！　お前……黒の騎士団の一員だったのか!?」
「おいユウ！　こんな所に居ないで速く皆の援護に向かってくれよ！　聞いてんのかよ、おいユウ!?」
　周りからは何か言われているがまるで聞こえていないかの様にハンバーガーを平らげてはまた新たなハンバーガーを取り出しまた齧る。騎士団と生徒会の面子両方から色々な言葉を投げかけられているが全て無視してただ食事をしながら戦場を眺め続けているが、段々と苛立ち始めている様子が窺えた。それに気付かぬ者達がユウへと必死に訴えかけ続け、そして堪忍袋の緒が切れたのか立ち上がって以前の様な柔らかく暖かな声とは真逆の冷たい声で一言、〝黙れ〟と告げた。
「どいつもこいつもぴーぴーぴーぴーと……。うるせぇっつうんだよ糞がっ……！　人が折角飯食いながら良い気分で戦場眺めてるって時によ。何ならてめぇらから先にあの世に送ってやろうかっての、ええおい？」
　心の底から忌々しそうに捻り出した言葉の数々にその場の全員が凍り付いた。食べ終えた包紙を紙袋へと放り込み周囲を見渡しながら腰のホルスターから拳銃を抜いた。かなり大型のリボルバーで、大型の動物でも仕留めるのかという程の大きさ。それを溜息を付きながら指で回して弄び始めた。
「全く……何でどこの世界にもてめぇら人間みたいな醜いモノが存在してんのかねぇ……。動物は只々自らの種を残そうと繁殖を繰り返す、だが人間はどうだ？　増えるだけならまだしもこの世界を延々と

穢し続けていやがる。悍ましく、浅ましく、汚らわしい。いらねぇだろ……人間なんてよ。見ろよ」
　そう言って指差す先は今も尚銃声や爆音が響き続ける崩れた東京の街。
「人間はこの星を穢し、破壊する事しかしねぇ……。植林？　保護活動？　はっ……てめぇらが破壊しなきゃそもそもする必要ねぇ事だろうが。醜い奴らだ、見ていて吐き気がしてくる。けどな……今この瞬間のあそこは最も尊く美しい場所だ」
　そう言って爆発の続く戦場を愛おしそうに眺め続けるユウはとても嬉しそうだった。
「人間は不平等だ。生まれた瞬間に優劣や人生が決まると言っても過言じゃぁない。だがあの場では違う。死は全ての人間に平等に降懸る。死んで初めて人間は平等になる。国。人種。性別、年齢、貧富才能地位。死ねば皆そんなもの関係なしに同じ唯の肉塊だ。何も破壊しない、誰も傷付けない。死ぬ事で人は最も優しく、尊く、美しい存在へとなる。人類皆平等を謳うのであれば人類を滅ぼせば良い。戦争を止めたいのであれば双方を誰一人残らず消してやれば良い。黒の騎士団とブリタニア……この争いを終わらせたければどちらも皆殺しにしてやれば良い……」
　狂った持論を語るユウの口元は狂気に歪んでいた。
「だろう……？」
　そう締め括ると同時にストレイドの背部に突如大型の兵器が現れた。
「武装の転送!?　そんな、まさかありえない！」
　その光景を見て驚愕するロイドだが無理も無い。武装どころか物体を別の場所から転送する事自体机上の空論であるが、それが今目の前で行われた。光学迷彩を用いた武装の隠匿等では決してない、それも機体に直接転送し直後に起動出来る様な完璧なもの。そんなものが実現していた事等夢にも思わないだろう。一体誰が完成させたというのか、可能性があるとするならラクシャータしか居ない、そう考えるがそのラクシャータも驚きを隠せていなかった。

「驚いたねぇ……。機体に直接転送出来るなんて……」
転送されてくるもの自体は今までも見ていた。それはあくまでも送られてくるだけ、特に背部武装等は自身では装備する事が出来ずに他者の手を必要としていた。しかしたった今行われたのは今までのものとは明らかに違う。今までわざとその様に見せていただけか否かは不明ではあるが、戦場で臨機応変に武装を変更出来るのは間違いなく脅威だ。弾切れの心配が無く、下手をすれば損壊した装甲やパーツすら変えエネルギーが切れぬ限り戦い続ける事が出来るという事になる。実際は少し違うのであるが、それを知る者はユウ本人のみである。
そうこうしている間に折り畳まれていた武装が展開し少しずつ形作られ、数秒もすれば右肩には巨大な砲身が出来上がった。その姿を見た団員は戦慄していた。その武装で何をするつもりなのかと。それは今までの語りを聞いていれば自ずと理解出来るものではあった。あったが、まさかそれだけはしないだろうと心の何処かで信じている節はあった。結果としてそれはいとも簡単に裏切られたが。
気付けばユウはコクピットへと戻っており、その照準を今現在騎士団とブリタニア軍の戦闘が続く真只中へと合わせていた。一目見ただけでで強大な破壊力を想像させるその巨砲を味方へと向けられている騎士団員は気が気ではない。必死に説得するも聞く耳を持たず、ストレイドからは聞こえてきた返答はユウの鼻歌だった。
「動かないで！」
味方の居る場所を狙われているのは特派も同様であり、その巨砲を撃ち込まれれば甚大な被害が及ぶと考えたセシルが再び銃口を向けた。ユウはそれに対し一瞥もせず左腕を掲げて見せた。
「っ!?」
そこにあったのは――先程ガニメデより引き千切った爆弾だった。
「撃ちたきゃいくらでもどうぞお姉さんよぉ……。皆揃って消し飛ぶ……それもまた一興……そうは思いませんかぁ!? あっはははは!!」
そんな事をすれば自分も死ぬというのに、一体何が面白いというの

か。狂人と化した獣の思考を理解出来る者などこの場には、いやこの世界には誰一人として存在しない。
「撃たないならそこで大人しくしていてもらえませんかねぇ……。楽しみを邪魔されるのは嫌いなんですよ――俺はさぁ！」
爆音と共にその巨大な砲身から榴弾が撃ち出され、騎士団とブリタニア軍双方の争い合うその真只中へと落ち、そして巨大な爆発を起こした。その爆風は離れた位置にあるアッシュフォード学園にまで届き学園中の窓ガラスを揺らした。その場に居る誰しもが唖然としてその光景を眺める中、気違い染みたユウの笑い声だけが辺りに響いた。
「あっははははは……あー腹イテェ……。やっぱり良いねぇ……命が終わる瞬間ってのはさぁ……。感動的過ぎて涙が出そうだ……受賞間違いな――あぁ？　どこが悪趣味だってんだ。どいつもこいつも……感性を疑うっつーの」
独り言を呟きながら砲身を折り畳むと今度はその場に居る者達へと向き直り、左手の中にあるモノを見ながらせせら笑う。
「さぁーてさてさて……お前らはどうしてくれようか……。これで皆でドカン！　ってのも悪くなさそうだな……。――へいへい冗談ですよ、ったく……。本当にうるさい奴だ……。約束は守るよ……へっ」
握っていた爆弾を無造作に地面へと落とすも爆発はしなかった様子で、それを見てその爆弾の危険性を理解していた者達は漸く一安心といったところだった。そしてストレイドはそのまま宙へと舞い上がりその戦場から飛び去った。
その後ユウとストレイドはしばらくの間人々の前から姿を消した。様々な憶測がなされたが、真相は不明のままであった。
「～～♪」
機体の中でユウは鼻歌交じりに残っていたハンバーガーを齧り付きながらぼんやりと考え事をしていた。向こうの世界での記憶の大半は思い出したもののまだ思い出せない部分が存在していた。向こ

うの世界での最後――いや、自身の最期についてだった。記憶が確かであれば自分は死んだ筈だが、何時、何処で、誰に、どんな状況下で殺されたかがどうしても思い出せなかった。それまでの過程は全て覚えている。トーラスの変態共にこの機体を作らせたのを覚えている。多くのリンクスを殺し、多くのクレイドルを落としたのも覚えている。家族同然の者達を殺し、向かい来る敵全てを殺し、罪無き者達を殺した事、それも全て鮮明に覚えている。だがどうしても最期だけは思い出せない。

「あー……駄目だ、思いだせねぇ。そもそもあの時俺を殺せる様なリンクスは残っていたか……？　ＡＦ如きに殺されるとも思えんし……機体の外で殺されたか？」

自分を殺せる様なリンクスはあの時には殆ど居なかった筈だ。何故なら企業側も相当切羽詰まっていたのか、まだ成りたての未熟なリンクスですら送り込んできた事もあった。アンサラーと呼ばれる企業側のＡＦも多少面倒ではあったが落とした。あれ以上のモノを作り出したとなれば話は別だがそんな余裕があったとも思えない。機体外で暗殺されたという線も考えたが、それは自身が一番警戒している事である為、のこのこと出歩くとも思えない。一頻り悩んだ後に、どうせその内思い出すだろうと考えるのを止めた。

「さて……これから忙しくなりそうだ……。――大丈夫……時間はたっぷりある……。俺が元通りにしてやるさ……どれだけ時間を掛けようとも……俺１人で……」

機体外部だけでなく内部の修理も行わねばならず、おまけにそれを自分１人で行う。随分と時間が掛かりそうではあるが、時間が掛かれば掛かる程修理を終えてからの楽しみが増す。そう考えれば時間を掛けるのも悪くは無い、そういった事を考え嬉しそうにくつくつと笑う。

「くっ……くっくっくっく……楽しみだなぁ、おい……。こっちでなら俺の夢が叶えられそうだ。――待たされたら待たされた分だけ嬉しさ倍増ってもんだろ……？」

クリスマスを心待ちにする子供の様に心を躍らせながら夜の空へ

と消えて行った。

息抜き回その②　あんなモノ

ユウ・ヘイズがそれを手に入れた経緯はまだ首輪を繋がれていた時にまで遡る。リンクスとなってある程度の時が流れ「やっと中堅どころと呼べるくらいにはなった」とセレン・ヘイズに評価され始めた頃にある企業から初任務を受けた。彼自身あまり関わりがない方面からの依頼だったので少し身構えたが依頼自体は何てことは無い、物資を輸送する車両を守るただの護衛任務だった。依頼そのものは滞りなく進んでいたが終り掛けに敵の襲撃を受けこれを撃退、一切の損害を被る事無く終えた。

「君の戦い方には――あれだ、なんだ、とても惹かれるモノがあった！　とても言葉では言い表せない様な何かが！　君はこの後は暇かね!?　是非とも話を――」

輸送車両に乗っていた者の1人、同乗者から主任と呼ばれていた男がユウを甚く気に入った様だった。気に入られてしまった様だった。

それからと言うもの時々主任からお茶の誘いを受けては色々な話をした。

「知っているかね？　物には魂が宿り、そして全ての物には性別があるのだよ！　大半のリンクス――いや、大半の人間が信じていないがね！　だが事実魂は宿っている！　意思がある！　それは当然ネクストにも！　機体の魂を感じ！　心を通わせ！　そして対話を通じて信頼し合う!!　それにより１０倍にも２０倍にも機体性能を引き出す事が出来るのだよ!!　まさに神秘！　ちなみに君の愛機は女の子だぞ良かったなはっはっは！」

この会話にユウは付いて行けず終始目をぱちくりさせ、セレンは頭を抱えていた。当然そんな事を気にする事もなく、男はその後も頭の痛くなる様な話を続けた。

ある時男から是非とも受け取ってくれと随分と大きな箱を渡された。

「今度うちから出そうと思っている玩具のプロトタイプなのだがどうにもうちの部下共だと皆が皆絶賛の嵐でいまいち信頼性に欠けるのだよそんなわけだから是非とも是非とも君にも試してもらいたいのだよあぁ勿論君自身が試す必要はないし面倒だったら倉庫の肥やしにしてもらっても構わない他にも試供品を何人かに渡しているしねまぁあれだなんだ日頃の感謝を込めた我々からのプレゼントだと思ってくれていいだが我々の自信作故にいつかは使ってもらいたいものである事に変わりはないがね君のだけ特別性にしてあるしねあっはっは！」

何時ものマシンガントークで一気に捲し立てられ否応なく押し付けられてしまいユウは途方に暮れるも結局持って帰る羽目になった。住居に戻るなり急いで部屋へと引っ込みそれを隠した。もし仮にセレンに見つかりあの男から貰ったものである事がばれようものならすぐさま爆破処理されかねない。当然拒否権など与えられる事もなく、だ。いっそ見つかった方が良い様な気はするが。

セレンが寝静まった深夜にその中身を見てみると、自動追従型の小型機械が出てきた。どんなものが出て来るかと身構えていたが意外と真面なモノが出てきて一安心するもその気持ちは裏切られる事となる。今時古風な紙の取扱説明書を捲り目を通していくとユウの顔が段々と青ざめていった。コジマエンジン搭載、ロケット砲をも防ぎ切る装甲、飛ぶと不思議な緑の粒子が発生する、ショックレーザーもあるよ等々。こんなものを玩具として売り出すと主任らは言う。ユウは時間帯など考慮せずすぐさま主任らに連絡を入れるとワンコールで本人が出た。とても深夜とは思えない程のハイテンションの主任に、電話越しにも拘らず殴りかからん様な勢いでこれはどういう事かと問いただした。当然セレンを起こすのは非常に不味いのであくまでも小声である。へたれである。

「おぉ早速中身を見てくれたのかねやはり君に託して良かった我々も嬉しいよはっはっはあぁ安心したまえ破壊されなければコジマ粒子が漏れる事など絶対にないからね！　え？　どうやって汚染対策されているかだって？　そんなもの我々の技術の前には他愛も無い事

だよ心配する必要はないよあぁデザインも良いだろう実は今度ソルディオスを飛ばそうと思ってねそれでその前段階として作ってみた物が君にプレゼントしたものなんだが思いの他部下達の評判が良くてねじゃあ玩具として売り出してみようという話になったんだよあっはっは！」

ユウはその話を聞き終えると一言「封印します」と言い残してふて寝し、それに関する記憶と現物の両方を封印した。

「ふむぅ……実に残念だが仕方が無い次の計画を立てるとしよう我々は君が喜ぶ顔が見たくて堪らないのだ！　何が良いか！　何が良いかなぁ!?　君！　何か良い案はないかね君でも良いあぁ君でも――」

そして時は移り、世界も移ってその物騒なモノはそこで出来た友人の妹の傍をフワフワと漂っている。ユウの記憶障害等々より記憶から殆ど消えてはいたが野生の勘には引っかからなかった。事実粒子汚染も無く動作も良好で、新たな持ち主の周りを漂い甲斐甲斐しく彼女を助けていたりする。実際ヘッドホンを着用した謎の不審者を撃退したらしく彼女の兄からは甚く感謝されている。

そして本日も彼女の周りを飛び回り彼女の事を助けて回る球体ソルディオス・オービット。性別は女の子。主任の言う心を通わせ対話する日が来るか否かは不明だが、今日もフワフワと漂い持ち主を暖かく見守る。

「おはようございます、ソルディオスさん。今日も良い天気ですね」

「は!?　ユウ君にあげた私のミニソルちゃんが何処かで美少女ともうすぐ心を通わせるにまで至ろうとしている気がする！　さっすがユウ君だ君はこの世から居なくなってなお私の事を喜ばしてくれるとはこうしてはおれん新たなミニソルを作り出しもっと多くの人々の心を癒す素敵なモノを作らねば誰か！　誰か私にあっつあつで濃いーい珈琲をくれないか!?」

「三徹するからおかしくなるんです、寝てください主任」